

393.2
N34
4④



0056757000

3

0056757-000

393.2-N34-4ウ

戦略的に見た織豊戦史

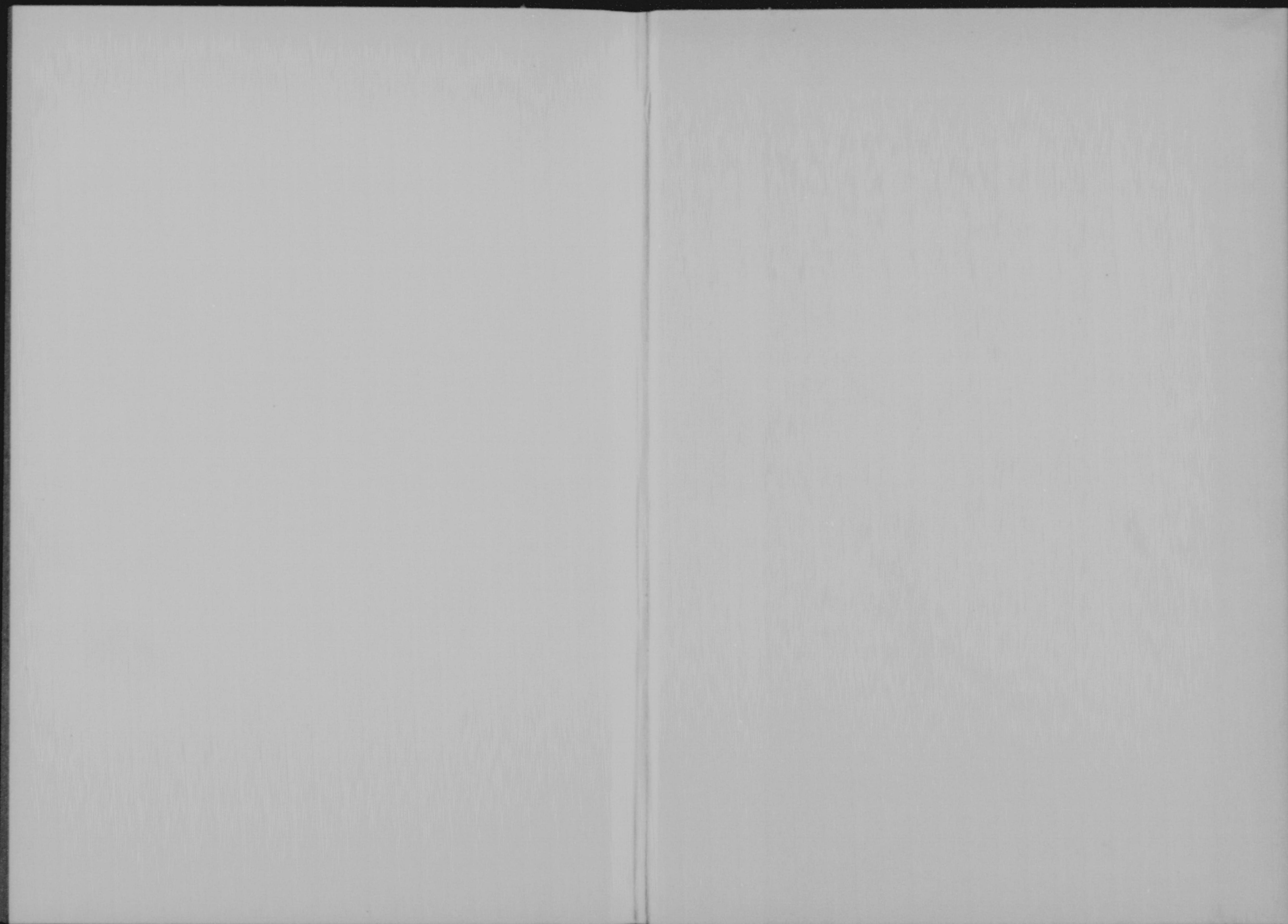
中井良太郎・著

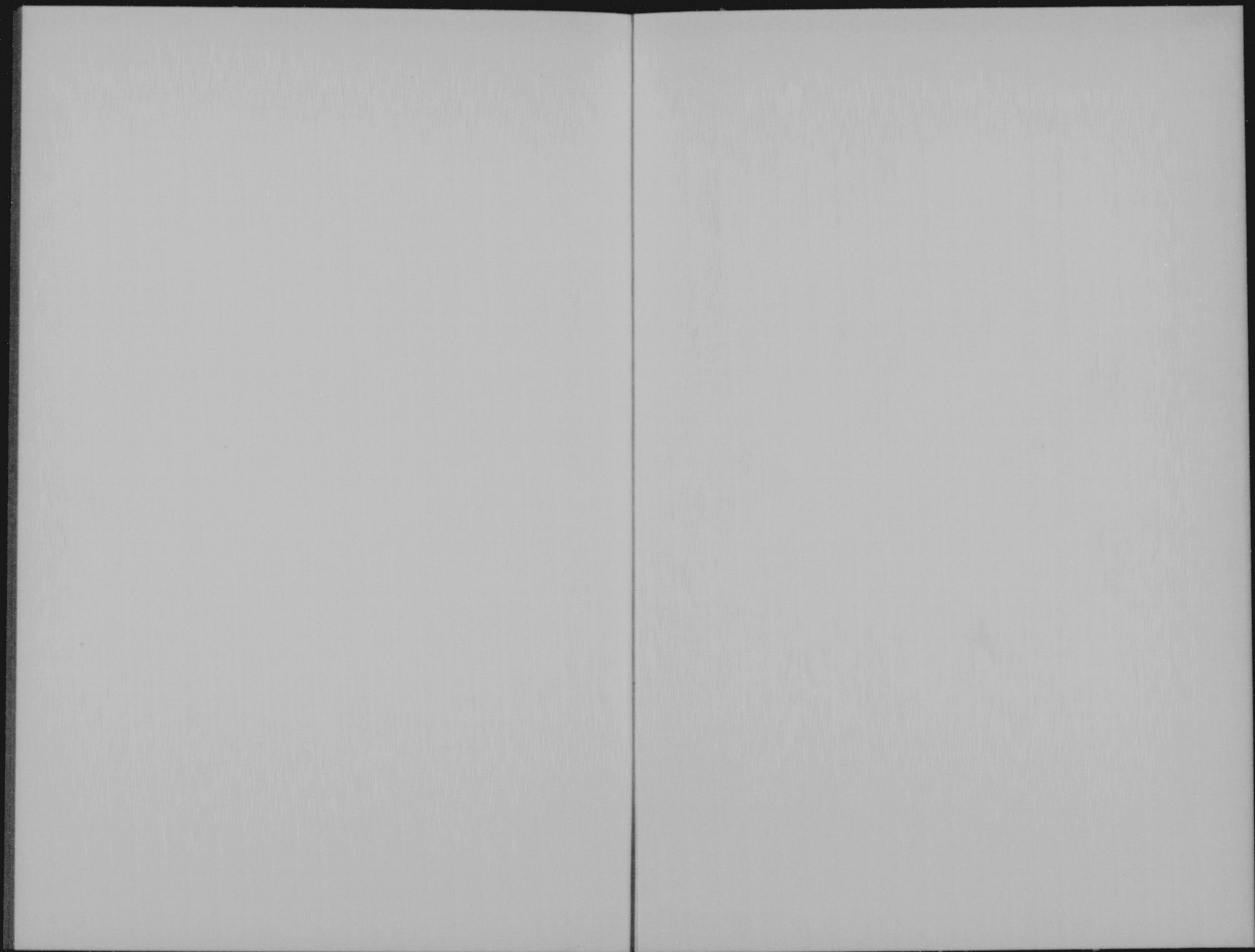
電通出版部

昭和18

AJD

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第67条の規定に基づき、平成12年5月1
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの





工-5212

393.2
N34
4 7



中井良太郎著

戰
略
的
に
觀
た
織
豊
戰
史

電
通
出
版
部



執筆の辭

本書は電通出版部からの懇請に依り、執筆したのであるが、淺學菲才の上、公私の要務に迫はれ心ならずのお粗末な所もあらうと思ふが、この點は幾重にも御勘辨を願ひたい。

本書は面白く読んで戴かうと思ふて書いた譯でもなければ、史實の異説を探究論考して其の眞實を捉へんとするものでもない。筆者は左様な慾望を起した所で生憎腕の持ち合はせがない。然らば何を自當てに執筆したのかと問はれるかも知れぬが、筆者は執筆の要請を應諾し拙なき筆を走らせた所以のものは、戦史觀就中兵理に立ちて織豊兩公の偉大性、特にその作戰その他戰爭指導の非凡卓越巧妙なる點を論考紹介し、一つは以て我が民族矜持を高めて、過去の拜外思想拂拭の一具とし、他は以て現大戰下に於ける必勝の爲の一助に供せんが爲である。

思ふに織豊兩公の爲された戦ひは世界に其の比を見ざるものがあり、國內に於いては無形の國寶的存在と云ふも過言ではあるまい。只筆者の凡眼拙筆では兩公の眞意を看破表現することが出来ないのを遺憾とするのみである。だが假令筆者の敘述は拙くとも、讀者各位はこの點を御了承且つ本書を手

引として他の織豊兩公に關する文獻の御研究を願へば筆者の心持ちも自然に分つて下さることと思ふのである。

世界戦國の形態を續くこと既に永年であるが、この世界戦國を救済する人物としては如何なる型の英傑が必要か、歴山大王型か、ケーザル型か、フリードリヒ大王型か、奈翁一世型か、夫れとも成吉思汗型か等々と世界的偉傑を列べて問はれても、筆者は何れも其の型では駄目だと答へざるを得ない。然らばと再問せらるるならば筆者は、夫れは織豊兩公型を必要とする。と答へる。舞臺や規模の大小に拘らず、戦争指導や亂世の統一といふ哲理に立ちて前記の如き外國の世界的偉傑と我が織豊兩公とを比較して御覽なさい。成る程兩公が優ると首肯するだらうと思ふのである。只筆者は斯く認識して頂くだけに筆は廻はらぬのは遺憾であるが、讀者各位は筆者と同じ心持ちで織豊兩公の爲された大業の迹を顧みられたい。すれば必ず筆者に共鳴せらるるに至るであらうと、自信する次第である。

更に筆者は此の序に念願することがある。夫れは我が古名將の戦史研究を忽せにして呉れるなど云ふ點である。若し我が古名將の戦史を粗末にするやうな人があるならば、其の人は國寶を無價値の古道具視する思想の持主と同様であるか、さなくば畫面が小さいからとてミレーの落穂拾ひを世界名畫にあらすとする凡眼者流と同様である、と警告したい。或は此の進歩せる科學時代に刀槍、火繩銃、甲冑時代の戦史研究などは不要だといふならば、夫れは温故知新と云ふことを知らざる現代模擬を事とする人が、さなくば進歩主義の美名に匿れて國粹的戦史を無視し、物的科學を見て精神的な統帥を解せざる人の言と云はざるを得ない。

以上は本書を執筆した筆者の心持ちであるが、淺學菲才、事志と相違する點もあらうと思ふ。併し乍ら此れだけでも、日本民族の矜持を高め、必勝信念を堅固にし、拜外思想を拂拭するの一助となり、幾らかでも戦争指導上の温故知新の資とならば筆者の本懐これに過ぐるものはない。

尚ほ終りに左の諸項を附言する。

- (一) 本書は大局的な兵理觀又は兵理論考に重きを置く。故に戦記の敘述は大局的な兵理論考を爲し得る程度に止めた。
- (二) 本書は織豊兩公の戦史であるから其の部下又は關係の諸將或は對手の將に就いては戦記、論考共に最少限度に止めた。
- (三) 兵理以外に於いても有益な得難い幾多の教訓もあるが、本書の目的上之を省略した。
- (四) 挿圖は最少限度に止め然も極めて粗略な圖であることを御斷り申しておく。併し古戦史に

執筆の辭

依り兵理を研究するには、さう精密詳細な地圖は不要である。

昭和十八年年頭

於世田ヶ谷野猫莊

中井良太郎 識す

戰略的に觀た
織 豊 戰 史 目 次

執筆の辭

第一篇 信長 戰 史

第一章 戰 歴 概 觀	三
第二章 内訌の鎮定と同族統一	八
第三章 桶狭間の戰	一六
第四章 織 徳 同 盟	三三
第五章 美濃 攻 略 戰	三九
第六章 西 上 戰	四七
第七章 第二次京畿肅正竝に但馬及び南勢の攻略	五五

目 次

第八章 第一次朝倉征討と淺井の破約…………… 六六

第九章 姉川の戦(淺井・朝倉との決戦)…………… 六八

第十章 第一次反織聯盟に對する作戦…………… 一〇五

第十一章 長篠の戦(武田氏との決戦)…………… 一三五

第十二章 第二次反織聯盟及び叛將に對する作戦附伊賀平定戦…………… 一三九

第十三章 信長の作戦用兵の特色…………… 一四三

第十四章 信長戦史の現代に與へる示唆の數例…………… 一四六

第十五章 信長觀の是正…………… 一五九

第二篇 秀吉戦史

第一章 戦歴概観…………… 一六二

第二章 秀吉の國內統一戦通観と作戦用兵の特色観…………… 一七三

第三章 獨立する以前の戦史(中國征伐を除く)…………… 一七五

第四章 中國征伐…………… 一七五

第五章 明智光秀討滅戦(山崎合戦)…………… 一八七

第六章 第一次反秀吉聯盟に對する作戦(柳ヶ瀬役)…………… 一九五

第七章 第二次反秀吉聯盟に對する作戦(小牧・長久手役)…………… 二二六

第八章 九州統一戦…………… 二三七

第九章 關東及び東北の統一戦(小田原攻略戦)…………… 二五五

第十章 征鮮役…………… 二六八

第十一章 秀吉の偉大性と其の戦史の現代に與へる示唆の若干例…………… 二八〇

摺筆の辭

…………… 二八三

第一篇 信長戰史

第一章 戦歴概観

應仁の亂以來約百年、亂麻の戦國に統一手術の快刀を入れ、戦國治療の基礎を作つた織田信長の功業と奮闘とは誰れ知らぬ人はあるまいが、公は十六歳で家を相続してから、四十九歳を以て本能寺の變に墮るる迄約三十三年の努力は實に戦史界空前の偉觀であると共に、又經世史觀としても双ぶものはないといへよう。

固より舞臺は我が島國內の一部に過ぎないが、三十三年殆ど熄む間なき交戦と、亂れ抜いた國家社會の秩序を再建する爲の努力は、外國の覇者の夫れ以上のものがある。歴山大王の奮闘史も十年足らずであり、其の指揮した兵力は大軍と云つても四、五萬を最大として居るに過ぎぬ。信長の三十三年の奮闘と最大限十二、三萬の軍を動かしたと比較すれば唯活動範圍が廣大であるといふに過ぎぬ。ハシニバルの奮闘も約十五年に過ぎなかつた。然も其の兵力最高約四萬、其の活動範圍はイスパニア、ローマ、カルタゴの大三角形地域とは云へ、彼の奮闘史の十五年中其の大部分は、アドリヤ海岸の駐劄期間である。之を信長の交戦寧歳なき三十三年に比すべくもない。フリードリヒ大王の奮闘も七年

に過ぎず、奈翁の奮戦も二十年足らずである。

かうして比較して見ると其の交戦期間だけでも信長は一番長い。其の使用最大兵力も決して外國の覇者に比し少いと云へぬ。唯活動舞臺の小さいと云ふことと對手は同民族であつた點が異なるのみであるが、エネルギーの使用量に於いては信長は第一等であらう。

然らば、信長の奮闘史と他の戰國群雄の奮闘史とを比較すればどうであらう。北條早雲、尼子經久、毛利元就、武田信玄、上杉謙信なども終生戦つた、交戦回数や、交戦年月から見たら信長以上であるが、其の行つた所は局部戦であり、天下統一を目指したと云へ眞の統一の段階に入らぬ地歩固めの經略の域を出でず、然も四圍の對手は信長の夫れの如き大敵はない。一般の隣國關係に於いて信長程難局であつたとは考へられない。

斯様に内外英雄の奮闘と信長の奮闘と比較しても、信長は奮闘努力と云ふ點からは古今の第一人者だと強調したくなる程である。

然らば一體、信長の戦歴はどうなのか、左に其の目星しい所を掲げて見よう。

(1) 天文十八年父信秀卒し、信長が家督を相續してから、外は三河及び東部尾張に於ける今川氏との小競り合ひ、内は織田家内訌の鎮定に當り、永祿二年知多郡を除く尾張一圓の同族を概定し

た。此の間約八年である。

(2) 永祿三年五月桶狭間の戦に於いて今川義元を殲す。爾後隣邦との外交策に萬全を期す。

(3) 永祿四年より同十年に互り美濃を攻略す。此の間上京の勅旨を拜す。

(4) 永祿十年十月再び西上すべき優詔を拜し、隣強と修好し、及び伊勢の北部を撃つて側背の憂ひを除き、永祿十一年九月、湖東の敵を蹴破して入京、次いで近畿を概定して岐阜に歸る。

(5) 永祿十二年畿内、但馬及び伊勢地方を攻略、此の間 皇居の修繕に着手す。

(6) 元龜元年(永祿十二年に續く)越前に朝倉氏を攻め、金ヶ崎城の攻城半ばにして淺井氏の廢返りに逢ひ、將に挾撃せられんとしたが、其の苦難より脱して京都を経て岐阜に歸る。

(7) 元龜元年六月淺井朝倉の聯合軍に對する作戰を開始し、六月二十八日姉川に戦ひ、大いに聯合軍を破る。

(8) 同年八月より近畿地方の肅正戦を行ふ。

(9) 元龜二年長嶋一向宗徒討伐、引續き淺井、朝倉氏との抗争並に叡山の燒討。

(10) 元龜三年、淺井朝倉兩氏との抗争を續け且つ三好、松永の徒黨を討伐したが、此の年武田信玄との和議破れて交戦状態に入り、家康は三方ヶ原に敗る。將軍義昭との間亦不和となる。

(11) 天正元年(元龜三年に續く)遂に義昭と戦端を開き之を降す。信玄との關係益々危険となつたが四月信玄卒す。毛利氏との間亦漸く隙あり、謙信亦快からず(何れも義昭の策謀からと云つてよからう)。

(12) 天正元年七月義昭敗走し信長初めて名實共に中央政權を掌握す。

(13) 天正元年十一月迄に淺井、朝倉、六角、三好の四氏を完全に討滅す。

(14) 天正二年武田勝頼と戦端を開く。此の年八月、長嶋の一向宗徒を殲滅す。

(15) 天正三年五月、武田軍と長篠に戦ひ、武田軍に致命的打撃を與ふ。

(16) 天正三年八月より上杉謙信との間に交戦状態に入る。爾後天正六年三月謙信の卒去迄、年々北陸に於いて交戦す。

(17) 天正四年安土に大築城を爲し、兼ねて謙信の西上に備ふ。大阪石山城(本願寺)の攻圍を開始す。

(18) 天正五年、松永久秀を討滅し、紀伊地方を肅正し、此の年十一月秀吉を將として中國征討を開始す。

(19) 天正六年荒木村重叛す。依つて之を討伐し伊丹に村重を長圍す。

(20) 天正八年迄に中國征伐漸次進展す(中國征討は秀吉の努力に俟つところ大なるも信長は中央に在りて征戰を統帥す)。

此の年大阪の石山本願寺遂に降る。

(21) 天正九年上杉景勝と戦端を開く。

(22) 此の年、伊賀を平定す。

(23) 天正十年三月武田勝頼を攻めて之を滅ぼす。

(24) 天正十年六月迄に中國征伐益々進展し且つ四國征伐の準備に著手す。

(25) 天正十年六月遂に本能寺の變に薨す。享年四十九歳。

以上年表的に列擧しただけでも、信長が十六歳の少年時より、四十九歳の兇變迄、殆ど一年として寧歳がなかつたと云つて過言ではない。此の勞苦と努力は信長にして初めて出来たと思ふ。そして信長は永祿十一年及び其の以後の戦ひは、勅を奉じて天下を統一する爲の戦ひで、私戦にあらずして公戦だと信念して居たやうであるが、此の點は筆者としても公戦と見て妨げはないと思ふ。

第二章 内訌の鎮定と同族統一

〔信長の幼少時〕 幼少時の悪戯と、其の守役たる平手政秀の死諫とを見れば、幼少時代の信長は如何にも不良少年の親玉視せらるるかも知れないが、其の言行には大天才たるの閃めきが燦として輝いてゐる。幼時庭前に於いて小蛇を捕へ、侍臣を顧みて、斯くの如きを勇と爲すかとの問ひを發し、侍臣は小蛇何ぞ恐るるに足らんやと答へると、信長は蛇は大小に依るものではなく、毒の有無に依るものである。汝等は蛇の小なるを以て侮るならば予を幼なる故を以て侮るか、きめつけたことや、或は寺小屋の學童を集めて石合戦をやらせて、自ら統監のやうな態度を以て之に臨んだこととか、或は家督相續直後、老臣等は其の傍若無人の放縱な振舞ひを矯正する爲、當代の著名の武將たる齋藤道三とか松永久秀、或は毛利元就や武田信玄や上杉謙信の言行を話して聞かせると、信長は例になく神妙に聽いて居たが、老臣の話が終ると信長は口を開いて「謙信や信玄を予の第一線の團隊長としたならば面白からう。松永の如き強慾非道な者や、齋藤道三などの行ひが世間に通るならば世の中は禽獸鬼畜の世界とならう。元就のやり口を賞むるならば、臣下には策謀家や權謀術數の徒が殖えるだらう」

と云ふ意を述べて老臣を煙に巻いて居る。或は父の信秀が死んだときの焼香の史話も有名である。これ等の史話は多少の修飾があるにしても小説でないと考定せられる。此の幼少時の史話と其の大成に伴ふ作戦外交等を見れば信長は實に大天才と云ふことが出来る。

〔織田家内訌の鎮定〕 信長が家を嗣いで後の織田家の内訌は大體大きなのが二つある。その一つは天文二十二年、織田の宗家たる織田信友の老臣等が分家たる信長に屬する諸城を攻めたので信長も奮然として之に抗した。且つ信友は其の主家斯波義達の子義統を殺したので信長は其の罪を問ふを以て戦ひの名とし、弘治元年信友を清洲に攻めて之を殲した。信長は夫れ迄は名古屋を居城としたのであつたが、是に於いて信友の居城たりし清洲に移つた。

其の二つは信長の老臣林通勝、柴田勝家等の叛逆である。信長は幼少時如何にも不良の如く見えたに反し、其の弟の信行は眞面目な少年であつた。由來、斯様な毛色の違ふ兄弟が居ると、得て内訌が起り勝ちなものであることは史實に其の例が尠しとしない。織田家に於ける内訌も亦かうしたことかから起つた。天文十八年信長が父に死別したのは十六歳の時であり、其の守役平手政秀が信長を死諫したのは天文二十二年であるから、信長の二十歳の時である。信長は此の忠諫に依り飄然として其の言行を改めたが、時恰も成年頃であるから其の天稟の大英才に對しては風當りも強いし、又、信長とし

ては父なき後に於ける老臣横暴の弊があつてもならず、老臣を掌握して己を畏敬せしむるやう仕向けねばならぬ等々、不羈個儘の性格の中にも色々と心を用ひたに相違ない。老臣共の中には、弟の信行の方は仕へ易い、否與みし易いと考へて、信行擁立を策する者の出て来るのも亦自然の成行きであつたであらう。斯かる雰圍氣は表沙汰となつて來た。老臣の林通勝や柴田勝家が首謀者となつて信長を廢して信行擁立と云ふ策動が起つた。信長は勿論、直ちに之を看破して常に反對派の爲すところに注意を怠らなかつたが、勝家等が遂に兵力を以て信長を除かうとしたので、信長亦兵を率ゐて出動し、遂に勝家等を撃破した。是に於いて通勝も勝家も平身低頭、僧服を纏つて無條件降参してこれ迄の罪を謝した。信長は快く之を許し且つ彼等に對し『予は前に徳に背き諫めに忤らつて平手を自殺せしめた。其方等の叛逆も亦源を質せば予の罪である。其方等は今より平手に代つて予を匡せ』と云つた。之は弘治二年のことである。即ち信友を除いた翌年である。

信長が林、柴田等を歸服せしめ、弟信行に對しても他意がなかつたが、信行が寧ろ信長に對する反逆意識が濃化したので、此の儘に放置する譯には行かなくなつた。そこで信長は謀略を以て信行を殺してしまつた。これでやつと織田家の内訌は鎮まつたのである。時に信長は二十三歳であつた。

此の内訌に於いて信長が織田信友を除き、林、柴田兩宿將も除いた戦闘は規模こそ小であるが其

の戦闘振りには天才的な閃めきがある。即ち、宗家の信友に對しても單に一族の私闘とせず、主家斯波家（織田家は斯波家の重臣なり）の爲、其の逆臣信友を討つ義戦として戦ひの名を正して居る。そして對林、對柴田の戦闘に於いても機先を制して急襲すると云ふやうな閃めきがある。弟の信行を謀殺した謀略は、伴つて病ひと稱し、家を信行に譲ると云ふことを信行の母方の六角氏に告げた。六角氏も大いに喜び、之を信行に告げると、信行は喜び勇んで信長の下に行つた。ところが、何ぞ知らん信長は家臣に命じておいて信行を謀殺してしまつたのである。

茲迄の信長の言行を見ると、他のことは立派だが弟信行を謀殺したことは如何にも非倫のやうに見える。併し信行も兄に取つて代らんとする野心があり、重臣も之に與みする者がある以上、信長としては家中の統制を紊る者は肉親と雖も容赦は出来なかつたと思ふ。夫れは戦國時代人倫の紊れ其の極に達した世相では斯かる紛争は力を以て解決するより手段がないからである。故に今日の道德觀を以て信長を責むることは必ずしも妥當でない。信行も恰も武田信繁が兄の武田信玄に對するやうな態度であつたならば、信長は決して弟を殺すやうなことをしなかつたと思ふのである。信行も殺される理由があると評すべしである。織田家に對する叛逆の中心人物と云へば死罪も已むを得まいと評し得るのである。

信長は柴田や林を助けたことは、信長は決して狭量殘忍な人でないことを立證するものである。助けるだけは助け、一家力を協はせて父祖の業を維持擴大しようとする大器の一端は之でもうかゞはれる。古來の信長性格觀是正の必要ある一例證である。

筆者は信長が内訌鎮定の處分には、夫れ々々當代的には條理が立つて居ると思ふのである。——現代道德觀は別として——。

〔同族統一完成〕 織田家はもと、斯波氏の家臣で代を経て重臣に列した。斯波氏は足利氏の重臣で世々越前と尾張とを領して居たが、其の勢ひ衰ふるに及び尾張は織田氏の支配となつた。

信長の家系は織田の宗家ではなく分家であつたが、宗家を凌ぎ、信長が宗家を除いて本質的に宗家となつた譯である。

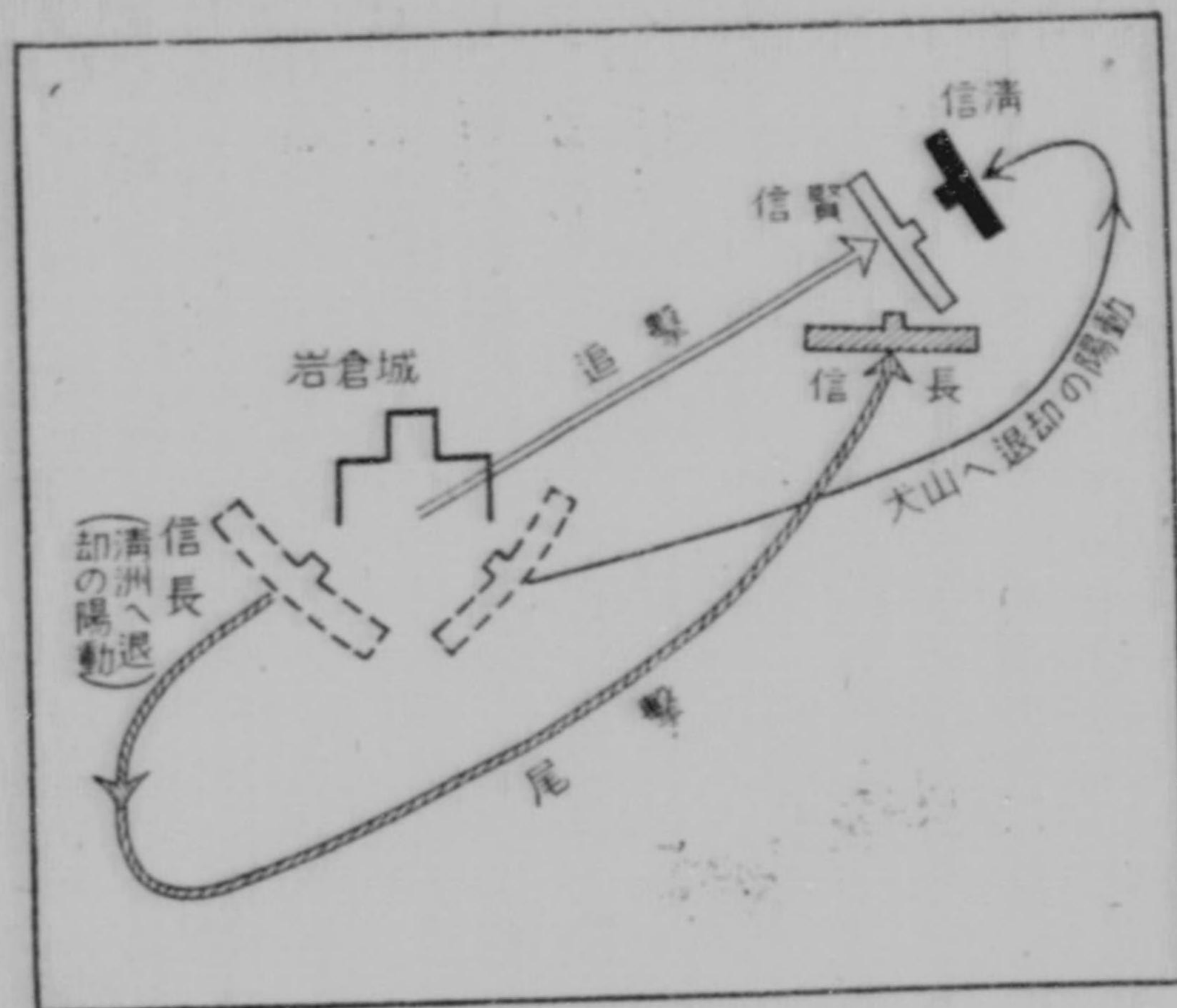
ところが、尾張の織田の同族は必ずしも統一されて居ない。宗家と信長との間に抗争があつたことは前述の通りであるが、之が鎮定に依り、尾張が統一したかと云ふに、まだ統一したとは云へなかつた。就中岩倉城（岩倉は今日の名古屋の西北の岩倉町である）主、織田信賢は款を美濃の齋藤氏に通じ、且つ清洲の城主たらんとして信長と抗争した。依つて信長は之を討伐せねばならぬ段取りとなつた。此の信賢との抗争戦も屢々あつたやうであるが、其中で岩倉城をして遂に落城の運命に追ひ込

んだのは永祿二年七月の戦ひである。この戦ひは小戦ではあるが一寸面白い戦闘であるから其の概要を述べよう。

永祿二年七月、信長は犬山の城主、織田信清と聯合して岩倉に向つた。すると岩倉勢が出撃して來たので之と城外に於いて戦つた。此の際、信長は弓銃手をして不意に敵の側面を射撃せしめて敵を岩倉城内に撃退した。そこで信長は岩倉城下に迫つたが、攻城しようとはせず、信長は清洲方向に、信清は犬山方向に撤退するやう陽動を行つた。當時、信長信清の兵は合して三千と號して居たが、信清の兵の方は少かつた。そこで岩倉城兵は敵の撤退を望見して寡兵たる信清方に對し城を出て追撃を始めた。信長は敵が信清の方へ追撃を始めたことが分ると、直ちに反轉して敵を尾撃した。信清勢も信長の反轉尾撃を見て後へ向き直つた。岩倉勢は腹背に敵を受け挾撃せられ惨敗して城へ逃げ込んだ。これから岩倉城の織田信賢は衰弱の一途を辿り其の翌年三月遂に落城した。

此の第二次戦闘の構想圖を書くに次の圖のやうになる譯だ。

此の戦闘は小戦であるが、兵略としては一寸珍らしい戦ひである。而して敵を城外に誘引出して決戦する即ち城外決戦は、今日の戦略思想たる陣地外に決戦を求める即ち成陣外決戦とその哲理が相通じて居るのである。城外決戦と云ふことは戦國時代他にも其の類例は少くないが、信長のやつたやう



な謀略を以て誘引出し、然も、うまく挾撃した例は珍らしい。

敵を堅城外に誘引出して決戦するは上策で、今日堅固なる陣地を避けて陣外に決戦を求むるの上策なると同様である。信長は後年姉川の戦にも浅井軍を小谷城から誘引出して撃破して居るが、城外決戦は信長の作戦思想の得意の一手であつたかも知れぬ。

岩倉城の攻陥に依り、永祿三年の初めには尾張の大半は之を掌中に收めることが出来たが、尾張の東部及び知多半島は今川の勢力下にあつた。けれども内訌や同族領の不統一は無くなつて、之から力を外に伸ばすの基礎が出来た譯である。

信長は天文十八年十六歳を以て織田家を嗣いでから元祿三年の春二十七歳となる迄の苦勞と云ふものは並大抵ではない。併し之が天才を試練して益々光りあらしめた。そして永祿三年五月十九日あの輝かしき桶狭間の大勝を得る基礎の力を築いたのであると評して宜しからう。

信長と云ひ、信玄、謙信等何れも十六歳頃から波瀾怒濤の世の中に於いて、内外に命を狙ふ敵を受け乍ら、千辛萬苦、之を切り抜けて來たのである。温室で育ち、時運にめぐまれて顯職に納まつた人や、假令温室で育たなくとも、幸運に恵まれつつ軍官財界などを泳いで來た人とは根本に於いて大差がある。茲に戦國時代の名将の偉大性の本源がある。命がけの苦勞を知らぬ人、多少は知つても、迎も亂世の偉人の苦勞に及ばぬ程度の苦勞人は、只管自省して人の指導や政局に當らねばならぬではないか。

第三章 桶狭間の戦

〔織田、今川兩氏の關係〕 今川氏は將軍足利の支族にして名門であり、世々駿河を領して漸次力を西方に及ぼし、織田氏は斯波氏の家老にして、其の家柄は遙かに今川氏に及ばないが、斯波氏を擁して尾張に起り、尾張の兵政兩權の實權を掌握し遂に斯波氏に代りて尾張を領した。今川氏の西漸は新興の勢力たる織田氏と衝突することとなるのは當然の勢ひであつた。

今川の勢力は擴大して遠江を併せ、天文年代の初めには多河の大部も亦今川の勢力下に入るやうになり、織田氏に對する脅威は次第に加はつて來た。當時、織田家は信長の父信秀であつたが、信秀は豪邁な人で強大なる今川氏の脅威を受けても屈するやうな人ではなく、常に敢然として今川氏と抗争し、多河は今川と織田との爭奪地域となつた。

此の今川、織田兩家の抗争は天文四年ころから始まつて居るが、天文十一年には有名な小豆坂の戦（岡崎の南方）があつた。此の戦ひは今川義元が大兵を率ゐて尾張に進攻せんとして西進して來たのを信秀が逆撃してこれを撃退したのである。其の結果、西部多河は織田氏に屬するものが多くなつた

が、天文十七年義元と信秀とは再び小豆坂に戦ひ、信秀が敗れ、次いで天文十八年信秀は卒し、岡崎地方は悉く今川氏に屬するやうになつた。

因みに、天文十八年には岡崎城主松平廣忠卒し、その子竹千代（後の徳川家康、當時八歳）が家を継ぎ、今川氏から重臣を派して管理せしめた。

信秀が卒して信長が家を継いだが、前章所述の如き同族間の内訌に悩まされ、一方今川氏の勢力は犇々と尾張に迫つて來ると云ふ状況で、織田家は勢力伸張どころか、甚だ危局であつたが、青年名將たる信長は聊かも屈する色なく内は同族訌争を鎮定しつつ、外今川に對しては或は秘密戦に或は武力戦に敢然として抗争を續けた。彼の笠寺（名古屋西南方）の城主戸部新左衛門と今川義元との間を巧妙なる謀略を以て離間して、有爲の部將たる戸部は遂に義元から殺されてしまつた如きは、信長の今川に對する謀略の一例であり、また天文二十三年には東南部尾張に侵入した今川軍を村木（刈谷の西方）砦に戦つて之を陥れて、今川勢の西漸を阻止した如きは武力抗争の一端であらう。

斯様にして織田、今川の兩家の抗争は宿命で、到底平和裡に共榮して行き得ぬ状況であつた。

弘治年間より、永祿の初めにかけては尾參國界地方の城主は或は今川に又は織田に叛服を繰返したが、今川麾下の岡崎城主松平元康（後の徳川家康）青年名將として善く戦ひ、今川氏の勢力は西部參

河に於いて優勢となつて来た。

乍併、當時は織田家の内訌も漸く鎮定した尾張の大半の統一も成り、信長としては内敵の憂ひはなくなつた。とは云へ、桶狭間の戦の直前に於ける兩者の領國を比較すれば織田氏の領地は今川氏の五分の一程であつたと思ふ。

斯様な状況下に愈々織田今川の決戦が起つた譯である。

〔兩軍の戦力概見〕 織田、今川兩軍の戦力を比較概見すると大體次のやうである。

(1) 織田軍は總兵額四千内外であつたと考察せられて居る。乍併織田領内は政令嚴正に行はれ民其の堵に安んじ、領主の用は喜んで之を爲したやうであり、軍隊はよく鍊成せられて居た。殊に織田軍の幹部には少壯有爲な者が多く、これ等の將校をよく纏めて信長を輔佐した重臣は、同族織田清正(家老)であり、信長をして大成せしむるに至らしめた起動力は平手政秀であつた。首將信長の偉才であつたことは今茲に云ふ迄もない。當年二十七歳であつた。

(2) 今川氏は駿遠多の三國を領有し、其の總兵額二萬五千を算したと考證せられて居る。

今川氏は名門にして其の勢望、織田氏と目を同じふして語るべからざるものがあるが、義元の祖父義忠時代より、京師の文化を移入し、公卿と婚姻し、其の軟弱文化は漸く家中を文弱に導き義元の如

きも齒を涅めて居り、武藝なども忽せにせられたものと見え、義元が桶狭間に向ふ間、落馬したなどと傳へられてゐる。従つて將士の訓練なども織田軍には及ばなかつたことは推定するに難くない。

今川の幹部にも相當の人物があつた。就中僧崇孚(雪齋と號す)は傑物で、義元時代に今川は大を爲したのは崇孚の力に俟つものが甚だ大であつた。ところが、惜しいことには崇孚は弘治元年(桶狭間の戦の五年前)に死んだ。夫れ以來は今川に傑出した謀臣はなくなつた。

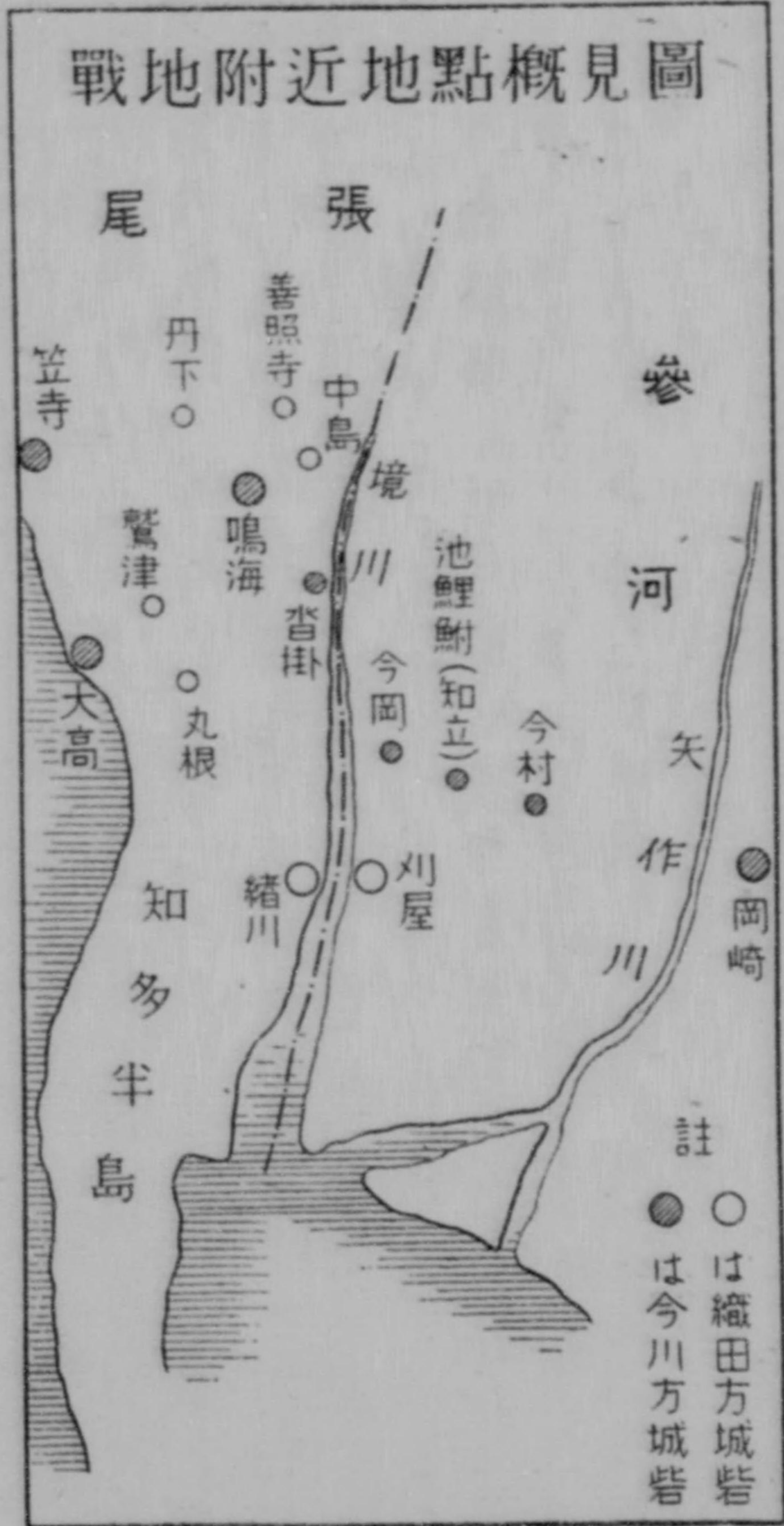
首將、義元は京都の軟弱文化に溺惑したとは云ふものの、資性中々豪邁で覇氣もあつたやうであるが、大體に於いて傲慢な政治家肌の武將であつたやうである。當年四十五であつた。

(3) 以上織田今川の戦力を比較概見すると今川は驕傲な富強を以て誇る國だが、既に老境に入り、織田は新進の青年國家の如き觀がある。首將信長は幼少より苦難と戦つて来た青年名將であり、義元は苦勞知らずの温室育ちの大權那と云つた型の將である。高級幹部及び一般將兵の技倆や素質は織田の方は優つて居る。斯様に比較すると此の戦ひは量と質との戦ひであると評しても過言ではない。

〔決戦の近因〕 織田、今川の兩家は何れは決戦の段階に達する宿命に在つたことは前述の通りであるが、皇紀二二二〇年永祿三年五月遂に其の時機が到来した。決戦の原因は何んであつたかと云へば、甚だ單純で、義元は中央政界に乗り出さんとする野心からであつた。

義元は永祿三年五月を以て西上と定めたのは何故であつたかと云へば、恐らくは武田、北條兩氏との同盟が成立して其の背後が安全となつた爲であらう。否此の同盟は西上準備の外交であつたと見る

戰地附近地點概見圖



べきで、義元は此の點中々の政治家だ。

義元の西上進路の第一障碍は織田信長であるは云ふ迄もない。稀代の英傑信長は假令尾張半國の領主と雖も、何で安々と義元を通さう、茲に兩軍の決戦となつたのは當然である。

〔尾參國境附近兩軍部屬〕 挿圖の如くである。

〔作戰經過の概要〕 永祿三年五月朔日義元は出兵の令を領主將士に發し、嫡子氏眞を駿府に留守せしめ、先遣部隊を以て五月十日、主力を以て五月十二日出發す(義元は十二日駿府を發す)。兵員は約二萬五千人と推定せらるるが當時は四萬と號したとのことだ。

此の出師を見ると動員下令から先遣部隊の出發迄十日、主力の出發迄十二日である。當時編成裝備などは甚だ簡易で、且つ兵農分れて居るのであるが、其の出師準備の事柄は時代相當に出來て居つたと見るべきである。當代の裝備は刀槍弓銃で、軍隊は歩騎兵、歩兵は弓銃隊であつたやうである。

先遣部隊は、五月十五日頃から織田領に對する侵略を開始し、義元は十六日岡崎に至り十七日岡崎城の守備及び緒川、刈屋(織田方城砦)の監視部隊を部署し、十八日沓掛に到り翌日のため次の如く諸隊を部署した。

(1) 丸根砦攻撃隊 二千五百人

長、松平元康（後の徳川家康）

(2) 鷺津砦攻撃隊 二千人

長、朝比奈泰能

(3) 攻城援隊 三千人

長、三浦備後守

(4) 清洲方面前進隊 五千人

長、葛山信貞

(5) 本隊 五千人

義元直接之を掌握す。

(6) 右の外鳴海城、沓掛城の守兵を定め、更に大高城將鶴殿長照に命令して丸根、鷺津の兩砦攻撃に協力せしむ。

右の部署を見ると聊か兵力分散使用の觀があるが、萬更、義元は凡將とは酷評出來ぬ點がある。此の部署の著想は尾參國境の織田領要塞の突破と其の首都への進攻とを同時に敢行しようとするのである。兵力が著しく優勢であるからどんな部署でも出來ると云へば夫れ迄であるが、鳴海及び大高と云

ふ兩城は我が所屬であり、其の中間にある丸根鷺津と云ふ兩敵砦を突破して織田の本據に突進しよう
と云ふ戰策であると見れば、萬更、捨てた案ではない。併しもつと兵力を集結して使用する必要があ
るやうにも思ふが、軍の組織は今日のやうでないから、原案のやうになるのも恕すべきであらう。今
日のやうに中隊、大隊、聯隊と整然たるものではなく、領邑の主毎に有する兵力を然も其の適所に應
じ適材を使用すべく組合はせての軍隊區分であるから、勢ひ兵力の重點が無くなるやうになるのであ
る。夫れでも大體八千の第二線部隊を控置し之を以て決戦しようとするのであるから、さう、こき卸
すのも氣の毒だらう。義元も、呆氣ない負け方をしたので凡將のやうに見えるがさうでもない。敗者
を馬鹿とのみ見てはなるまい。

次に之に對し織田軍はどうであつたかと云ふと、信長は此の閒戰に先だち、敵城砦の鳴海、大高、
笠寺等に對して、諸砦を築設して今川勢の侵入を阻止して居つたが、當時に於ける諸砦と其の守將及
び兵力等は次の如くである。

鷺津砦	織田信平等	四百人	(推定、以 下同じ)
丸根砦	佐久間盛重	四百人	
丹下砦	水野忠光等	同	一説には兵力七百とも云ふ

善照寺砦 佐久間信辰 四百人

中島砦 梶川一秀等 同

今川義元の西上の企圖は既に永祿三年の初め頃織田方には謀知し右諸砦も其の守備を嚴にして之に備ふる所があつたことは事實である。所が愈々の場合はどうであつたかと云ふと、五月十八日の薄暮謀者が丸根砦に歸つて、義元が十八日杵掛に達し明十九日は丸根及び鷺津の兩砦を攻撃するならんと報告した。そこで守將盛重は急使を馳せて之を清洲に報告したのであつた。何んだかイザと云ふ場合は織田方が不意を喰つたやうにもあるし、又假令此の程度でも情報を得たことは努力の結果でもあるとも評せられるが、兎に角五月朔日以来の敵大軍の行動は明敏な織田方へは時々刻々謀知せねばならぬ譯であるが、餘り差迫る迄判らなかつたと云ふ點に疑問を持たざるを得ない。

今川軍の丸根及び鷺津の兩砦に對する攻撃は愈々五月十九日の黎明から開始せられたが、同日午前遂に陥落し、丸根の守將佐久間盛重も鷺津の守將の一人飯尾定宗も戦死してしまひ、今川軍が凱歌を擧げたが、其の戦勝の驕りと油断とは遂に義元が噓され、戦局破滅より、後年今川家衰滅となる導火線となつた譯である。戦ひ勝つて驕る者は良將にあらざるは勿論、勝酔の危険又知るべしである。

以下信長の逆撃を概説しよう。

信長の逆撃に就いては諸説多少異なる點があり中には修飾したやうな書物もあるやうであるから、以下參謀本部公刊の日本戦史に準據して概説することとする。

信長の作戰方針やら作戰指導要領などは既に相當の期日に於いて決定し五月十八日夕の注進があつて初めて策定したとも思へない。少くも信長の意中には對今川作戰計畫として相當早くより腹案し決心して居つたと思ふ。俗に傳へられる出動の直前の軍議に於いて決した譯でもあるまい。若し出動直前の軍議で定まつたとすれば、決心を發表する爲の會同席上に外ならない。參謀本部の日本戦史には「初メ織田ノ將士清洲城ニ於テ東軍ニ對スル方略ヲ議スルヤ」と云ふ書起しになつて居り、五月十八日の注進を受ける以前と云ふ意が言外にあるのを見ても、那邊の事情が推窺することも出来るのである。夫れは兎に角、軍議の席上に於いては林通勝の如き老臣は四萬の敵の大軍に對し我は僅かに三千の兵力を以て運動戦を交ふるの勝算なき所以を力説し清洲籠城を主張したことは事實であり、之に對し信長は「守勢、籠城して敗滅しないものは稀れである。敵の來攻を居城に據つて防がんとすれば士卒氣餒え志變ずることがある。宜しく出でて國境外に戦へとは先考（信秀）の常に誡められた所である。予は斷じて先考の遺誡に背いて此の城に蟄居するやうなことは出来ない。死生は命なり、予の決意は攻勢である。予と志を同じうするものは予に従へ」と斷乎決意を示したのも事實であらう。

参謀本部公刊日本戦史には「十八日ノ夜警報丸根ヨリ達スルモ泰然肯テ驚カズ」とあるから、丸根から警報があつて初めて軍議を開いたとは思へない。防諜上過早に企圖を發表することは出来ないから、信長は種々苦心した點もあらう。其の出發命令が十九日の午前二時頃發せられたことは恐らくは信長は徹頭徹尾奇襲を企圖して居つたことが分る。信長は出發時迄酒宴を開き自ら「人生五十化轉の内を較ぶれば夢幻の如くなり一度生を受け滅せぬものあるべきや」を三度繰返して舞ひ、夫れが終るや「蝶吹け」と命じて出發命令を發したと云ふ史話は有名であるが、参謀本部公刊の日本戦史には「夜半後蓋し十九日午急ニ蝶ヲ吹カシメ進軍ヲ令シ直チニ甲冑ヲ呼ビ結束シ立乍ラ飯ヲ喫シ東天始テ明ナル頃馬ニ鞭ウチテ出ヅ」と書かれ、敦盛を舞ふての出發光景は書いてない。併し信長は謡曲敦盛を好み殊に其の中の「人間五十年夢幻の如し」の句を愛し、俚謡の「死なふは一定」云々を常に吟誦して居たと云ふことは同戦史にも認めて居る。兎に角信長は死生觀を達觀し人生の外に超越した點があるから、此の逆撃進攻の出發時、假令宴を設けずとも謡曲を口ずさむとか云ふことは有り得ることと思ふ。何れにしても信長は放膽なる言行の中に不動にして九死一生の決意あり、細心殊に企圖を秘匿せんとする意中が窺知することが出来る。然も何處かに必勝の信念の閃めきも見える。

信長の出發時には近臣岩室重休以下只僅かに數騎隨從したのみであつたが、熱田に至る頃は二百餘人に達した。時に十九日午前八時頃であつた（因みに五月の十九日は陽曆六月二十二日に相當すると云ふことである）。

夫れから熱田神宮に詣でて戦捷を祈り、詞殿内に金革の音をせしめて神明の我を助くるなりと告げしめた謀略も有名な話である。神様を利用する謀略とは随分だが、信長の心中には邪惡の念がないから神助を得たのだらう。此の頃になると集まる兵員は約一千となつた。熱田を出でて間もなく遙か東方に烟焰天に冲るを見、鷲津、丸根の兩砦が既に陥るを知つたので、途を鳴海北方に向つて取つた。途中、丸根守將佐久間盛重の戦死を知つた。信長は慨歎して「嗚呼大學（盛重）は我より一と時早かつたか……」と念珠を把つて之を肩にし馬上から四周を見廻はし「汝等今日生命を予に授けよ」と大聲呼號したので士氣大いに奮つたと云ふことである。

斯くて信長は途中兵を併せて善照寺砦（鳴海の東北側）の東に至つて其の兵を點檢した所凡そ三千であつたが、之を五千と號した。

信長が善照寺砦に至る頃、鳴海方面の敵と我が一部とが交戦し我が方は衆寡敵せず隊長等の戦死したのを聞き、信長は老臣の議を排し鳴海の西南側、中島砦に移らむとした際、麾下の梁田政綱の謀者が、義元は大高に移らんとして桶狭間に向つたと報告し、次いで他の一人が又義元は田樂狭間（桶狭

問の東北約二吉米)に於いて大休止をして居ると報告した。そこで政綱は信長に向ひ「敵は短時間に丸根鷺津の兩砦を陥れた爲必ず驕つて警備を怠つて居るであらう。依つて其の不意に出で敵の本營を突かば義元の首を得ることは必然である」旨の意見具申をしたので信長は直ちに之を採用し(一説には之は信長が發意し政綱は支持したとある)、現在地善照寺附近に若干の兵を留め、其の旗旗を増して有力部隊の如く欺騙し、潜かに二千餘人を率ゐて邱陵に隠蔽しつつ北方に迂回、田樂狭間の北側に進出して義元の牙營を急襲するに決し其の部署に就いた。此の時信長は麾下將兵に向ひ「名を揚げ家を興すは此の一戦に在る。一同努力必勝を期し敵を蹂躪せよ。斬り捨て、突き捨て、決して首を取つてはならぬ」と云ふ意の訓示をして居る。斬り捨て、突き捨ては寡を以て衆を撃つ際の大切な戦法である。北條氏康の川越の夜襲でも島津家久の有馬原の戦でも同じ訓令を發して居る。

正午頃、信長は田樂狭間の北方邱陵に差しかつた。此の日は朝來非常に暑かつたが、此の頃黒雲俄かに天に漫り、暴風猛雨西北より今川軍方面に吹き灑いだ。織田軍は、稍々霽れるのを待ちて吶喊して山を下り直ちに敵の本營を衝き縦横に蹴散らした(乗馬襲撃を行つた)。

これより先、義元は沓掛から大高に向つたが、丸根鷺津の捷を聞いたので田樂狭間に於いて休止することに決し、休止して居る所に又鳴海附近に於いて織田軍の一部を撃破し其の隊長級の首を届けて

來たので大いに喜び「我が旗の向ふ所鬼神も之を避く」と大いにメートルを擧げた。そこへ附近の神職や僧侶が酒肴を贈呈して軍を犒ふたので、義元はすっかり悦に入り杯を擧げ、全軍に食事を命じ、警備を怠つて居つた。そこで雨と嵐とで益々悪く腰を卸してしまつた形であつた。

斯様な有様であつたから勿論織田軍の近づくことを知らなかつた(休憩して居ても四周を警戒するの必要は此の戦例でも分る)。織田軍の突入を見て大いに驚き中には内叛者が出たなどと叫び廻はるものなどもあり、文字通りの周章狼狽を極め全く爲す所を知らずと云ふ有様であつた。斯かる間に織田軍の士、服部忠次槍を揮つて義元に迫つた。義元も刀を抜き其の槍柄を斷り、服部の膝を斬つたが、更に毛利秀高が義元と相搏ち遂に其の首を取り兩軍に示したので、東軍は全く潰亂に陥つてしまつた。筆者は此の戦記を見る度に、義元の側近の者は一體何をして居たのかと思ふが、此の疑問は解くべくもない。

信長は敢て東軍を尾撃せず、兵力を集合して此の日夕頃清洲に凱旋した。此の戦闘に於いて今川軍の戦死は二千五百以上と傳へられて居る。

〔評論〕 筆者は其の都度氣づいた所に於いて若干評論を挿入したが、茲に取纏めて桶狭間戦の概評を試みようと思ふ。

桶狭間戦闘要圖



此の戦闘を戦争観をもつて見れば、潑刺たる有爲な青年小國家と老大國家との交戦に比することが出来、斯かる青年國家と老大國家との交戦に於いては有爲なる青年國家が勝つと云ふ證明の一つになる戦史である。

此の戦闘に於いて特に著目せねばならぬと思ふ戦術観や思實観を列記すると、

(1) 此の戦闘は實に織田家興亡の岐路的決戦で信長の爲には九死一生の大戦である。信長の前後の態度言動から見れ

ば一面必勝の信念があつたやうにも見えるが、他面に於いては運を天に任せて斷行、乾坤一擲の大博奕を打つと云ふやうな気分も見え、更に大敵を懼れず、之を呑んでかかると云ふ氣魄も見え、其の何れにしても、信長は死生觀を大悟して居る。信長が「人間五十夢幻の如し」或は「死なふは一定」を口にし之を以て愉快として居つた氣分、夫れが即ち人生の大決断を爲さしむる心境を作るのであらう。死生を考へては大業は出来るものではない。死生を超越すれば大業を爲し得ることを教へる善き戦例である(毛利元就の嚴島戦、島津家久の有馬戦、吉川元春の馬山布陣、島津義弘の關ヶ原の脱出戦皆然りである)。

(2) 此の戦闘は代表的な奇襲戦で又急襲戦の一つである。

(3) 此の戦闘は寡を以て衆を撃破した代表範例の一つである(織田軍は今川軍の八分の一)。

(4) 奇襲、急襲の戦闘指導上の必須の要件たる企圖の秘匿、行動の神速果敢、敵情搜索の周密及び明察、士氣の作興等に就き教へられる所が多い。

(5) 天祐と神助は正しきことを強固なる決意を以て斷行する人に與へらるると云ふ代表的な戦例である。

(6) 信長は此の奇襲に於いて一騎討の首取り戦法を禁じ集團の威力を以て敵の本營に突進して敵

首將の首を獲ると云ふ戦法を考案して居る（嚴島戦の毛利元就、有馬原の島津家久皆此の戦法で大勝を得た。吉川元春も同じ企圖を有して居た）。

(7) 信長が潰走する敵を追撃せず、兵を収めたことは今日の作戦原則に反するやうであるが、當時の領内外の状況は懸軍長驅などは思ひも寄らなかつたと云はねばならぬ。信長の戦後の始末は適當と思ふ。

(8) 信長の論功行賞を見ると、信長に最も適切な謀報を齎し且つ力強く急襲を意見具申した梁田政綱を第一とし、義元の首を取つた毛利秀高の上にした。此の邊は信長の眼の著け所が高い。等の數項であるが茲に之を説明する必要もあるまい。只筆者は本章を終るに際し附言して置き度いことは首將の識見と其の威力と云ふ點である。信長は勿論其の他の古名將は多くの場合、自己獨創の決心に基づき作戦し謀臣や老臣から御膳立して貰つて其の据膳を食ふと云ふやうな作戦をしない。信長が一家興亡の岐路に立ち乍ら、重臣の守勢論を排して斷乎奇襲攻撃を主張し斷行して居るのである。參謀本部の公刊日本戦史には書いてないが、梁田政綱の敵情判斷と意見具申は信長は既に意中に充分に意識して居たと見るべき文獻もある。故に立所に同意したのであらう。問題は平地から進むか北方山地方面から進むかの二つであるが、山地より進むことに決したのは義元の所在が分つた爲であらう。

信長は決して重臣に教へられて決心して居るのではない。敵情判斷も明敏、意思も鞏固で必勝信念を超越した信念を持つて居る。茲が名將の偉い所である。老臣等が自分達の意見が容れられなくとも不満顔を見せず、力を盡くして居る點は幕僚學としてよき資料である。

由來青年凡將が重臣の意見を容れずして歿した例は段々あるが、青年名將が重臣の意見に従はずして敗れたのは三方ヶ原の戦に於ける家康だけかも知れぬ。之は對手が大き過ぎた爲である。其の他は青年名將の言ふ所必ず老臣の言ふ所より當つて居る。凡夫たる青年將帥が血氣に任せ放膽なことをするのは危険千萬である。同時に老人の冷水と云ふ奴も困つたものである。桶狭間の戦を纏る壯年名將信長と老臣との意見の杆格は書物に依り多少異なるものがあるが、大體に於いて、信長の獨自陣頭主義の作戦であると信する。信長が軍議の際、無原案を以て臨み、列席の臣下の意見を聴き、善いと思ふのに同意して自分の案のやうにする人だと云ふことを書いた文獻があるが、恐らくは見當違ひか徳川時代の信長を悪く云ひ家康を偉くしようとした文獻から出たことだらう。或は信長は左様な風體を装つたのかも知れぬ。軍議の際現に屢々原案を示して居るのである。

第四章 織徳同盟

〔戦後に於ける信長の勤靜〕 桶狭間に於ける信長の九死一生の攻勢決戦は大捷を博し、其の勢力頓に高揚し威遠近に響いたが、信長は聊かも驕慢の念を起さず、堅實に大志を建てたやうである。

呆氣なき義元の戦死と共に今川軍は滅裂状態を以て夫れ々歸東したが、信長は勢ひに乗じて参河地方に進攻しようとはしない。蓋し次年の織徳同盟は既に此の頃心に描いて居たのではなからうか。一方、松平元康（徳川家康）は義元の戦死と共に占據したる大高を撤し、居城岡崎に歸つて獨立を宣言した。家康は當時十八歳であつたが、義元の西上には先遣隊の一つとして丸根を美事に攻略し、又其の以前には巧妙な大高城への兵糧入れを行ふ等、青年名將たるの器は燦然として輝き、其の人物技倆の卓抜なることは恐らく當時今川家中にも、亦織田の家中にも知れ渡つて居つたと思はれる。殊に後述する戦後の家康の動靜は、明敏なる信長をして心を家康に寄せさせない筈はない。家康と争ふの愚を爲さず、之と締盟して志を中央に立つるの礎石的の力となさむと企圖したことは、信長の偉い所である。信玄が西上を志し乍ら、家康を傘下に入れなかつたのと同じの比でないと思すべしだ。信長

の東方侵略を爲さざる蓋し故あると思ふのである。——追撃中止の理由は他にもあるが——。彼の千八百六十六年普墮戦に於けるケーニヒグレーツの會戦後、ビスマークが後の普墮同盟を考へ墮軍を追撃せざるやう皇帝に奏上した思想と能く似た點があると思ふ。

元々信長の志は美濃にあつた。そこで銳氣を養ひたる後、永祿三年の六月と八月との兩度に互り美濃の齋藤氏に對し、戰略的威力偵察とも云ふべき作戦を試みたが、未だ其の時機にあらずと看取するや、姑く之を措き、翌永祿四年正月窃かに京都に上り將軍義輝に謁し、畿内の形勢を視察し、身邊に付き纏ふ刺客を一喝辟易させて清洲に歸城した。

〔織徳同盟〕 元來織田氏と参河の松平氏（後の徳川氏）とは西部参河に於ける利害相反し、織田は松平の主家たる今川と仇敵の間柄であつたから、自然松平氏とも抗争し、織田と松平（徳川）とは又仇敵の關係に在つた。けれども桶狭間の一戦は此の關係を一變せしむるに至つた。即ち戦後家康は今川氏の羈束を脱し獨立せしのみならず、今川の衰運に乗じて東方進取の志あり、信長は美濃を經略して近畿に進出せんとの大望を抱いて居つた。此の關係は兩將をして互に其の背後を安全ならしむると云ふ點に於いて利害が一致する譯である。之が織徳同盟が成立する動因と云つて宜しいと思ふ。

茲で一寸桶狭間戦直後の家康の動靜を併せて説明して置く必要がある。

説に依ると、信長は桶狭間戦後、家康は織田に款を通ずるだらうと思つて居たが、家康は、坐して信長の進攻を受けむよりは、進んで攻勢を採るの優れるに如かずとなし、西部参河に散在する織田方の諸城を攻略し、尾参國境附近で織田方と兵を交ふるなど、極めて強硬な態度を示した。此の家康の強硬なる態度は信長を怒らしめず却つて信長をして家康に心を寄せしむるに至つた。そして信長から家康に講和を申込むと云ふ状態となつた。之が實に信長の偉い所である。大局大志の前には小局の感情を捨てると云ふ點に於いて信長は斷じて、一本調子の糊癩持ちでないことが分る。若し信長が家康の態度を憎み、怒つて兩者兵を交へ出せば或は信玄と謙信との抗争の如くなり、信長も中央に出るの機を失してしまつたかも知れぬ。然るに信長がよく大局が見えた、實に偉いと評すべきである。

信長の和議に對する家康は、今川に對する恩誼と織田との利害關係との板挟みとなつた。殊に己の妻子も重臣の妻子も駿府で人質となつて居るので、家中には織田氏と結ぶことに反對の者は多かつたが、家康は信長が東方進攻の意なき以上、之と争ふ必要もなく、信長と争つて力を消耗するの愚なることも、よく分つて居た。そこで反對を排して斷然信長と握手することとした。此の家康の外交策も亦其の大局が見えて偉いと思ふ。家康は此の和睦の結果、今川氏から責めらるることは必然と覺悟して居つたことは勿論である。果せる哉、後日今川氏から大抗議があつたが、家康は今川の使に對して

「義元公の弔合戦をせらるるやうに承り手ぐすね引いて待つたが、其の企圖もないので獨力織田と争つて見たが、力は足らず。是非なく一時の方便として織田と和したが、妻子が人質として駿府に居る以上二心はない。若し弔合戦でもなさるならば先陣を承る」と云ふ意味の回答を爲し、今川氏を泣寝入りにさせて居る。中々の明快な答辯である。

さて兩雄の間の講和の下準備が終つたので、永祿四年二月愈々兩雄の清洲に於ける會盟となつた。清洲に於ける兩將の態度は誠に禮儀正しく、兩者非常に尊敬し合つたと云ふことである。此の會見に於ける信長の提議として傳へられて居る所に依ると「今度和睦申上げました上は、拙者は五畿内目指して討ち從へませう。徳川殿には駿河を討ち從へられたら如何でせう。若し強敵あらば互に加勢し合ふことに致しませう。吾等の兩旗を以てせば、天下一統の世と爲し得ることは必然と存する次第です。古來兩雄相争つて共に滅んだ例は段々あります。之等の前者の轍を踏んではなりません、自今吾等兩雄は威を争ふことなく、織田が統帥すれば徳川殿は其の幕下に入り、徳川殿が統帥すれば織田は其の幕下に参りませう。全く一言の虚妄もありません」と云ふ意を表明し、家康も之に同意し條約文に調印、交換し祝杯を挙げたと云ふことである。

此の同盟は爾後二十二年間信長が本能寺の變に墜るる迄同者の間に尤も忠實に履行せられた。戦國

群雄間の同盟や聯合は實に御都合主義なものが多いが、織徳同盟は實に鞏固其のものであつた。

此の同盟は亂麻の戦國を統一すべき基礎的な一つの大きな力である。信長は此の同盟に依り、大業の礎を築き、家康は此の同盟が基で、統一の仕上げを爲すべき地位に達したと云つても敢て過言ではない。會盟時に於ける信長の言の通りである。

此の同盟は何故に鞏固であつたか、夫れには利害關係に變化がなかつたと云ふやうな唯物史觀もないではないが、何と云ふても兩雄共に偉大で互に信頼し合ふと云ふ心情が、斯く鞏固な結盟を續けたと思ふ。

筆者は常に思ふ。今日の世界大戦は世界戦國三百年の統一戦である。さうして日獨伊の三國同盟こそ、我が戦國時代の織徳同盟であらねばならぬと。織徳同盟とは云へ織田の内部には秀吉あり、地位を離れ力的に見れば織豊徳の一體的な團結である。日獨伊、織豊徳、此の關係は舞臺にこそ大小比較にならぬが、歴史哲學觀としては全く相似の點がある。吾人は三國同盟をして本能寺の變なき織豊徳の團結とせねばならぬ。そして世界戦國を救済するの必要があることを信念し之を提唱する。

第五章 美濃攻略戦

〔織田齋藤兩家の關係〕 織田家と齋藤家とは信秀の時代から仇敵の間柄であつた。そして齋藤道三は無類のしたたか者で所謂奸雄であつたが、善く戦ひ兵亦強く、織田家としては苦手であつた。信秀が卒して信長の代となると、東からは今川が、ひし／＼と迫つて來るので、北、齋藤と不和では織田氏は前後に敵を受け、危険なることは云ふ迄もない。茲に於いて織田家としては、齋藤家と和して今川に對するの賢明なることは信長も重臣も皆考へたことと思ふ。これが信長の妻として齋藤家の濃姫（道三の末娘）を貰ひ、兩者姻戚關係を結んだ理由と見て差支へがあるまいと思ふ。此の婚姻政策は、結局、信長が今川と齋藤とを各個に撃破するの手段ともなつた。即ち齋藤氏と和して今川を撃破し、次いで齋藤に鋒を向けて之を滅したと云ふ結果となつて居るのである。信長が濃姫を娶る爲齋藤道三との會見の史話は有名であり、道三の從臣は信長の風貌や態度や裝束を見て馬鹿と評したのに對し、道三は、我が子孫はあの馬鹿の軍門に降らねばならなくなるだらうと豫言したことは的中するに至つた譯であるが、道三も具眼の將ではあつたと評し得やう。其の後道三父子が益々不和となり、道三の

子義龍は父を弑するに及んで、織田家とは疎隔するやうになつたのも自然の勢ひであらうが、信長が後年義龍と兵を交ふる戦ひの名を得たに相違あるまい。舅の弔合戦、親を弑する如きは假令義兄と雖も許し難いと云ふ善き口實となつたと推想せられる。——別に文獻上の根拠はないが——。

〔美濃攻略の好機到る〕 信長は家康との盟約成り、東方の顧慮がなくなつたので、力を専ら美濃攻略に用ひ得る餘裕が出来た。其の頃は恰も信玄謙信が川中島の抗争が劇甚を極め、永祿四年九月は最後の大決戦をやつた年で、信玄も西方に手出しが出来ず、謙信は勿論、他國が中に介在し織田領に對し觸指不可能の形勢であつたから、信長の美濃攻略開始には外交的關係は絶好の機會であつた。けれども、信長は信玄に對しては修好の用意なく、信玄の意を迎へ其の感情を害せざるやう充分に意を用ひ、後年の婚姻關係迄持つて行くべき素地を作つたことは云ふ迄もあるまい。

一方、對手の美濃の齋藤氏は如何かと云へば、齋藤氏の始祖道三と其の子義龍とは不和で義龍は父を殺し（弘治二年）義龍は美濃の領主となつたが、癩病に罹つて永祿四年死んで其の子の龍興の時代となつた。此の龍興は若年で凡庸であつたので美濃攻略には其の好機であつた。

要するに永祿四年頃からは凡有る條件も情勢も美濃攻略には絶好の時運となつた譯である。

〔美濃攻略の目的〕 道三死んだ後、信長と齋藤家とは疎遠となつたことは前述の通りで、之が爲再

び兵を交ふることとなつたが、信長の當初の出兵たる桶狭間の役の直後即ち永祿三年六月及び八月の美濃方面出兵は恐らく戦略的威力偵察、平易に云へば將來攻略の爲の小手調べ的な出兵であつたと見るべきであらうが、愈々本格的な美濃攻略を開始した所以は西上の内勅を拜したので、西上作戦の根據策源を設定するを目的としたことは申す迄もない。元々信長の志は、家康との會盟の際、言明した如く中央に進出するにあつたから、當初の小手調べも、先を見ての小手調べで單純なる美濃攻略のみの小手調べでもないことは勿論であると推考する。そして永祿四年は美濃攻略戦開始の準備の年であつたことは云ふ迄もなからう。

〔美濃攻略の經過概要〕 美濃攻略に就いては、史籍に依り異なる所尠しとせずと云ふ有様だが、左の筋書は何れも大體一致して居る。

- (1) 齋藤道三が死んだ後永祿四年迄は、美濃攻略の爲の準備又は小手調べ的な時期であつた。
- (2) 永祿五年信長は其の本據を清洲から小牧に移した。之は美濃攻略の爲の準備の完成を意味する。
- (3) 永祿五年、永祿六年及び九年八月にも西濃に出兵して洲股附近に立脚地を占めんと企圖したが成功するに至らない（齋藤家に對する進攻は前後七回と云ふ説もある）。

(4) 之に反し東濃方面に對しては犬山城の攻略を初め漸次齋藤方を壓して居る。

(5) 永祿九年八月の西濃進出の失敗に屈せず、信長は木下藤吉郎(秀吉)の獻策に依り之を起用して洲股に臨時築城して茲を確保することが出来、立脚點が出来たので爾後の作戰が非常に有利になつた。

(6) 美濃の攻略には信長は作戰と共に巧妙なる謀略を併用して居る。信長があつた濃姫を瞞して齋藤の君臣を離間した有名な謀略史話に就いては眞ならずと云ふ意見があるが夫れは夫れとして、最後に所謂、美濃の三人衆と云はれる齋藤家の重臣が信長に内應したことを見ると、謀略を以てしたことは明瞭であり、此の謀略には木下藤吉郎の施策が與つて力大なることも窺知するに難くない。

(7) 美濃の三人衆(稻葉伊豫守、氏家卜全、安東伊賀守)の老臣が内通すると直ちに、信長は參河に出動すると觸れ出して軍隊を小牧山に集結し、參河へは行かず、疾風迅雷、齋藤家の本據瑞龍山(稻葉山)へ突進して齋藤龍興を追拂つて完全に其の本據を占領した(龍興は流浪して近江、畿内地方を流浪した後、刀根山(越前と近江との境)に於いて戦死したとのことである)。此の完全占領は永祿十年八月十五日である。

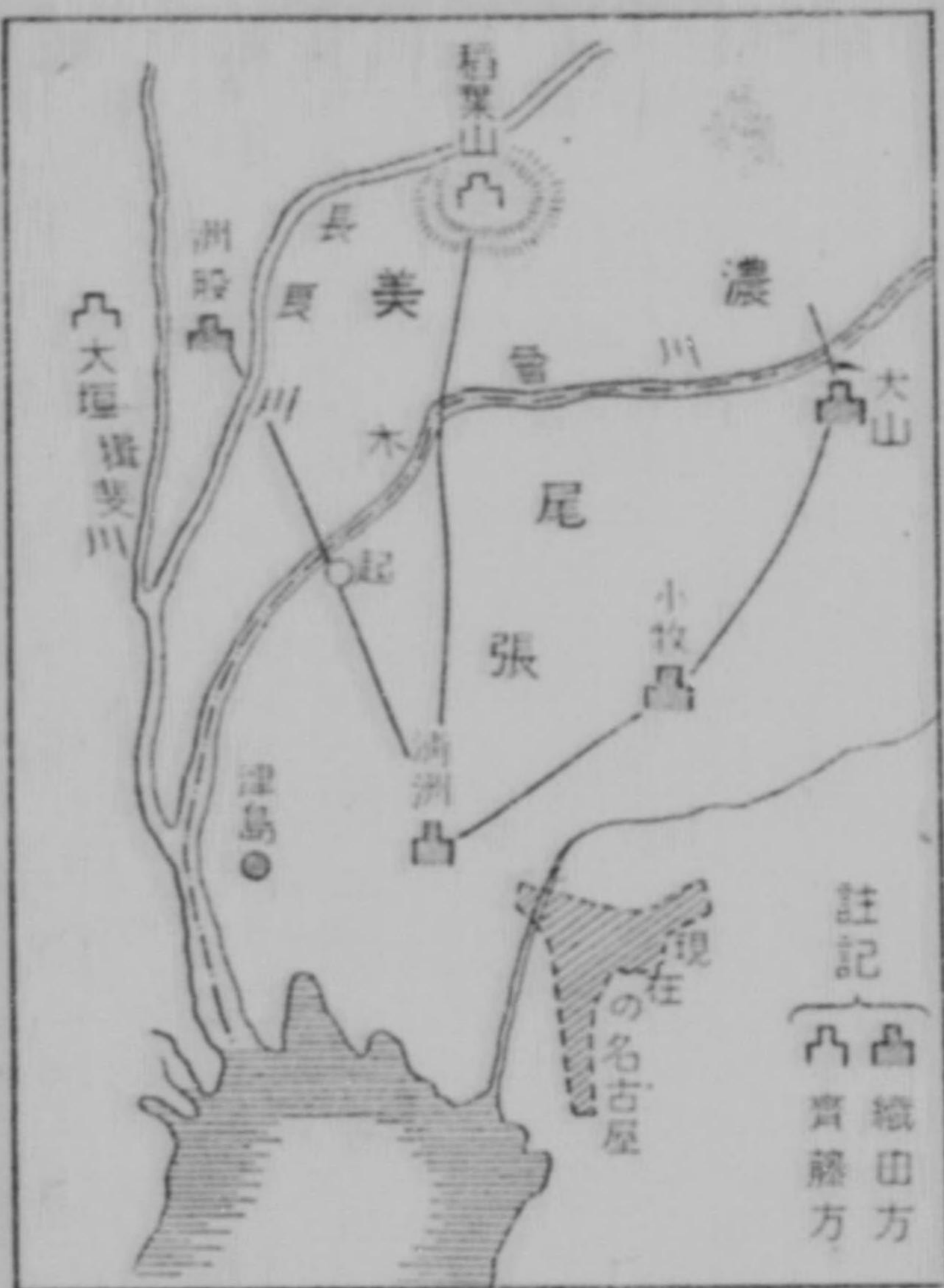
右の筋書の内には木下藤吉郎の洲股築城の面白い小説めいた史話もあるが、藤吉郎は巧妙に地歩を占め、爾後一ヶ年間よく之を維持したことは事實である。此の事は更に次篇で再説する。又此の美濃攻略戦間、信長が佐久間信盛や、紫田勝家が洲股築城を失敗して散々な目に逢つて逃げ歸つたが、信長は少しも叱らず、能く其の勞をねぎらつたと云ふやうな話もあり、信長が決して盲滅法な癩癩持ちではなかつたことを立證する言行もあるが、右掲げた筋書に依り此の美濃攻略戦は概略判ると思ふ。

〔美濃攻略間の外交〕 信長は美濃攻略間、攻略を容易にし西上の支障をなからしむる爲隣邦外交を考へた。即ち近江の淺井氏に妹を嫁して婚を結び、特に對信玄外交に深く意を用ひた。即ち美濃攻略間も攻略後、將來の西上を考ふれば、信玄の機嫌を取り之を敵に廻はさないことが緊要である。信長は辭を低く禮を厚くして武田家と修好した。そして永祿八年には、姪を以て武田勝頼の妻とし、十年には嫡子信忠の妻に信玄の娘を貰ふことに成功し、爾後文龜三年、兩雄の和議決裂迄は兎に角にも信玄をして鋒を西に向けしめなかつた點は信長の一大成功で、其の外交手腕の卓抜を知ること出来よう。

〔概評〕 此の美濃攻略戦は齋藤道三の秋せられた弘治二年から數へると、十年餘の永きに互り、信長が初めて小手調べ的な進攻を始めてから滿七年、本格的に攻略戦を開始してから滿五年を費し、攻

略を完遂した譯で、長期戦の一範例となる。而して此の長期戦は、最後の一年だけが信長に極めて有利に展開したが、其の以前の年月は信長は失敗続きと云つて過言ではない。即ち信長の戦績は初善後善であり、齋藤氏は初善後悪である。其の原因を温ぬると、第一には首將信長と龍興との力の差である。齋藤方は、部將は中々立派で織田方に匹敵する人を勝しとせず、士卒亦勇敢であつたが、何分首將龍興が凡庸なる爲、打續く長期戦間に其の内部の結果が紊れたと云ふ點を特筆することが出来る。第二には、信長は連年の失敗にも挫折せず、手を代へ品を代へて執拗に積極的に攻勢を採り、齋藤方では、信長の攻撃を不成功ならしめつつも大勢に於いては守勢であり、唯進入して来る信長方を局部的に反撃する計りである。斯様なことを繰返して居ると、しまひには守勢の方は負けるのは常態と思ふ。北條時宗は對元進攻を準備せしめたことは蓋し故あることである。齋藤氏の初善後悪は大局的な戦略守勢が禍を爲して居る。反之、信長は戦術戦略、並に政略及び之を通ずるに謀略を以てし數度の失敗に挫折せず執拗なる攻勢を持続したことは成功した要因である。長期戦はかうして連年戦ひを繰返し最後の一年か短かきは二、三ヶ月で、ばた／＼と梟りが付くものであることを肝銘して現下の大東亞戦に於いても常に攻勢を以て對處することが緊要である。米國の攻勢を破摧するだけでは不十分である。

〔美濃攻略關係地點要圖〕



註記
 □ 織田方
 ○ 齋藤方

たと見ても強ち妄断でもあるまいと思ふ。

信長の美濃攻略の戦略を見ると、齋藤家の君臣離間の如き謀略を除いては、西美濃の要地に占據して敵を茲に牽制し、東濃の國境大山を抑へて敵に對して我が主たる進攻方面を秘匿し、機を見て稲葉山の齋藤の本據に電撃的突進を試みようとしたに

あつたと思ふ。史の傳ふる所に依ると、前記美濃の三人衆が信長に内應するに決したが、いきなり主

人に弓を引くわけにも行かぬので龍興の非行の數々に就いて意見したが、龍興が之を斥けたので、之を口實に信長に内通したが、信長は之を聞くや否や、一日の遷延なく疾風の如く行動を開始して居るのを見て其の當初よりの企圖たることを推定がつくと思ふ。

後の戦史にもあるが信長はかうして戦機を捉へることが實に明敏であつた。

信長は數年間連年の失敗を物ともせず執拗に攻勢を採つたことは、決して短氣の人ではないことが分るであらう。

戰術的には渡河戦とか、奇襲とか、前進根據地設定の爲の築城實施など非常に参考になることもあるが、他章との振合上之を省略する。

第六章 西上戦

〔本據を岐阜に移す〕 信長は愈々齋藤氏を討滅したので其の本據を舊齋藤氏の本據たる井口城に移し、井口を岐阜と改めた。現在岐阜の東方に聳える城跡は皆人の知る所である。此の本據の轉移は西上の直接準備の第一歩と見て宜しからう。

〔西上準備の完成〕 織徳同盟、武田及び淺井との修好は共に美濃攻略の爲でもあり又西上の準備工作でもある。美濃攻略は西上の最も重大なる準備であつたが、長年月の苦難を克服して永祿十年八月を以て美濃の攻略が完成したので、茲に西上の爲の不動の戰略政略的の基礎態勢が確立した。

其の直後たる永祿十年十月に信長は再び西上すべしとの優詔を拜した。勤皇、敬神の念厚き信長は彌々感激を深くしたと思ふ。於是信長は愈々西上に決定したが、考ふれば尙ほ其の準備として爲すべきことがある。夫れは織徳同盟を益々強化し、武田及び淺井との修好に微動だも無からしむることや、美濃地方の齋藤氏の殘黨蜂起の憂ひなからしむることは當然であるが、次いで來るべき最大問題は西上の進路に蟠る六角氏に對する工作である。六角氏は湖東の名族（佐々木氏の本家）で其の勢

力は湖東を本據として北伊勢にも及び、北伊勢の神戸氏、長野氏等は皆六角氏の勢力範囲にあつた。故に信長にして西上する爲には正面に於いても左側背に於いても六角氏を屈服し其の勢力を抑へてしまはねばならぬ状況である。

信長は伊勢方面は機會を得れば處理せんとして居つたらしく、美濃攻略の目鼻がついた永祿十年春伊勢侵入を企てたが、當時、武田氏が、信長の背後を衝くとの風説があつたので之を中止し、瀧川一益を長嶋に置いて北伊勢攻略の準備を爲さしめたが、武田氏の心に大變化もなく、美濃攻略も完遂が出来、十月優詔を拜したので直ちに伊勢の經略を開始し、翌十一年二月には神戸氏を征服して三男信孝をして神戸氏を嗣がしめ、又長野氏を征服して弟の信包をして其の姓を冒して敵黨を制壓したので北伊勢は意の如くになり、左側背の憂ひもなくなつた。只南伊勢には北畠氏が重きを爲して居るが、信長の側背を著しく脅威する程でもないので、安濃津（現在の津）に織田掃部助を置いて北畠氏に備へしめた。之で左側背に對する憂ひは解消した。

進路正面の近江に於いては前述の如く、淺井氏とは婚を結び、淺井の嗣子長政に嫁せしめた信長の妹の御市の方は永祿十一年四月には後の淀君を産んだと云ふやうな有様で親善は薄らぐ、信長の西上を妨げなかつたが、六角氏は其の本據を觀音寺城（今の安土驛の東側の山續き）に有して在京の三

好氏と策應して信長の西上を阻止しようとして居る。そこで信長は先づ外交工作を以て西上の進路を開かんとし、自ら従者二百餘人を従へて永祿十一年八月七日湖東の佐和山に至り、淺井長政と會見して西上の企圖を打明けて其の協力を求め、使を三度六角承禎に遣はし修好の道を聞くことを要望したが、遂に應じないので、愈々武力に訴へることとした。此の間、淺井氏の信長接待役たる遠藤喜右衛門と云ふ者は、信長を其の酒の酔に乗じて暗殺しようとして長政に内申したが、長政は其の武士道に反する所以を以て之を斥けたので、信長は助かつたと云ふ説もある。眞偽は別として信長は武力を用ひねばならぬと云ふ敵を作らず、何とかして度胸を示して淺井に二心なからしめ、六角に來降せしめようとした努力は大なるものがあると云はねばならぬ。

六角氏に對しては愈々武力を用ひねばならなくなつたが、信長は最少限度の武力を以て西上の途を開かんとする努力は克く讀めると思ふ。西上準備の工作は之で終了した譯である。

信長の西上の爲の動員令は八月であるから、信長の佐和山行きは、動員直前又は動員間であつたと思はれる。

〔進攻より入洛迄〕 信長は永祿十一年八月、信長は諸將を岐阜に會して軍議し、九月七日を以て進攻開始日と定めた。其の兵力は三萬と號した。

これよりさき將軍足利義輝は三好、松永の一黨の爲弑せられ、其の弟、義昭が逃れて諸方を徘徊したる後、身を信長に托したので信長は之を容れ、此の西上には義昭を奉じて居ることは周知の通りである。

近江に於ける淺井領と六角領との境界は湖東に於いては、今の愛知川の線であつたやうである。即ち愛知川を境とし、東北は淺井領、西南は六角領である。故に信長は愛知川の線迄は、同盟國領通過を許される譯であるから、問題は愛知川の線より西南の湖東地域の作戰である。

六角氏は湖東の領内に十八の城砦を有し、本據を觀音寺城とし、箕作城を其の羽翼的據點とし、領境中山道の要衝に當る和田山の防備を最も堅固にし茲に其の最精銳を配置し、信長をして之を攻圍せしむるやうに仕向け、信長が和田山を攻圍せば四周の諸城塞が起つて信長を四方から袋叩きの攻撃を加へようと云ふ計畫であつた。そして六角承禎は其の本據觀音寺城に居つた。

信長は敵の此の計畫を諜知したので、一部を以て和田山を監視せしめ、主力を以て箕作城を急襲して之を攻陥した。茲に於いて觀音寺の防衛は羽翼を殺がれたのみならず、觀音寺の防衛は到底、信長に抗すべくもない爲、六角承禎は施す策なく遂に觀音寺城を捨てて逃亡したので他の麾下の諸城も風を望んで降参し、茲に忽ち西上の進路は開けたのである。

〔入京及び入京後の作戰〕 湖東の六角氏を突破し掃蕩したので信長は西進し、先づ園城寺に本營を置き、京師に進入を準備したが、三好松永の黨は京師を捨てて逃亡したので、信長は九月二十七日京師に進入した。初動から大體二十日である（一説には十二日目となつて居るものもあるが二十日間説の方は實際かと思ふ）。實に疾風電撃的であると評して過言ではあるまい。

之より先、京都市民は信長の西上を聞き昔物語に聞いて居る木曾義仲の入洛及び其の軍隊の亂暴を想起し、織田軍亦然らんと恐れ、家財を荷擔して逃走避難する者が續出したが、さて信長軍が入京して見ると軍令極めて嚴正、將卒秋毫も犯す者なく、偶々些細な軍令違反者あるも、信長は毫も假借しない。卒にして商人と口論した廉に依り、信長は其の卒を街路樹に縛り付けて晒物にしたと云ふ史話もある。故に信長の軍隊は實に軍紀嚴正、京師の人達も其の意外に驚くと共に何れも安堵し、逃走した者も歸洛し、京師は百年振りに泰平の天地となつた。九月二十八日信長が本營を東福寺に移した時には凡ゆる階層の人達が進物を以て、我れ先にと東福寺に伺候して信長に禮意を表し、信長は一々應接して好意を謝し返禮したので、市中には信長公は鬼神でなく、菩薩であると褒め合つたと云ふ史話もある。或は弱者の阿諛媚態かも知れぬが、信長は決して粗暴な人ではなかつたことは充分に判る。斯くて京師の秩序も益々正しくなり、十月十八日には義昭に對し征夷大將軍に補せらるべき勅命

が下り、信長にも左兵衛督に任ぜらるの御沙汰があつたが、信長は功に誇らず之を過分として固く拜辭し、從五位下、彈正忠（今日ならば先づ東京や京都の憲兵隊長格）だけを拜受した。信長は宮中に對しては斯く謙讓であつたのも其の本心は勤王精神が充溢して居たからである。

信長は十月、十一月の頃を以て京師の四周を肅正した。其の主たる作戦は芥川、越水、池田、茨木、高槻各城の攻略と河内地方に於ける三好黨の掃蕩並に大和の筒井順慶等の征討である。そして其の力攻したのは池田城位で他は多くは風を望んで降ると云ふ有様で割合に手数はかからず、一應の肅正が出来たやうである。

此の肅正戦は斯く案外手軽に出来たと云ふ所以は信長の威力が能く敵を壓したのと、尙ほ一つには信長の政略適切で、戦略と政略とはよく調和したからである。例へば信長は此の作戦に於いても降参する者は決して之を誅滅せず、其の領地を安堵せしめ降將を登用して居る。此の事は長くも、皇宗の建國聖戦に於いて聖範を垂れ給はつて以來の皇軍の傳統である。信長は此の西上戦及び其の後の征戦は皆皇師であると自任して居る。蓋し、西上の勅を拜して居るからである。降將を優遇し寛大に取扱つたと云ふことも強ち政略からではなく、かうした皇軍意識も大いにあつたと思ふ。信長の勤皇精神から推して筆者は斯く推考する次第である。信長は決して狭量な人でないこともよく分ると思ふ。

斯くて京師及び其の附近も秩序は立ち、義昭も將軍に補せられたので、信長は村井貞勝を京都の守護に留め、自ら主力を率ゐて十二月一日一旦岐阜に歸つた。

西上戦は斯くて成功した。信長が永祿五年内勅を拜してから、數へ年にして七年の歳月を費して居る。此の七年を長期戦と見ることも出来ると思ふ。

〔評論〕 此の西上戦は七年の長期戦中の最後の五十日である。即ち、永祿十一年の八月から九月二十七日と見ればさうなる譯であり、茲にも長期戦の最後の重要性を證據立てて居ると思ふ。

西上戦に於ける湖東平地の進攻は、戦略突破の好戦例である。即ち湖東に散在する敵の十八の戦略據點中の二つの重要戦略據點の一つを監視し他を急襲陥落せしめた爲、全般に於ける敵の戦略配置が瓦解したのである。茲にも信長得意の奇襲戦法を發見するであらう。

筆者は信長の西上戦と今次歐洲大戦に於けるヒットラー氏の作戦とを比較すると其の戦理に於いて非常に相通するものがあると思ふ。即ちヒ氏とム氏が握手して先づ壘國を併合しチェコ國を收めたこと、次いで伊國との同盟提携を更に強化し、進んでソ聯と不可侵條約を締結して波蘭を席卷したことは、恰も信長が、尾張を平定した後家康と同盟し、次いで信玄と修好して美濃を攻略したのと其の政戦兩略の理念が相通するものがある。其の後ヒ氏が愈々對英佛作戦を開始したのは丁度信長の湖東進

攻戦のやうなものである。又獨逸が一部を以て對英佛戰前丁抹やノルエーに進攻したのは或は信長の北伊勢の攻略にも相當し、更に局地的には和田山を監視せしめて箕作や觀音寺と遮斷したことにも相當する。獨軍は蘭白兩國に進入したのと、信長の湖東に進入したのとは全く同じであり、信長の京都進入は獨軍のバリ進入に類似する。かうして見ると規模には大小はあるが、殆ど完全な相似形的な所があると思ふ。綿密周到なる準備の下に疾風の行動をやる。そして出来るだけ、損害や兵員の損耗を少くして成果を挙げようとする點は日獨古今の兩雄將に相通する點がある。信長の方は四百年の先輩であることを日本民族の矜持とし、ヒ總統の信長型に對して敬意を表したいと思ふ。

信長の西上は尾濃平地に生れ地の利を得た爲だと云ふ人が多いが、以上の如く信長の遣り口を見ると筆者は信長にして初めて此の西上戦が出来たのである、必ずしも地利を尾濃平地に得た爲であるのみ考ふることは出来ない。

信長は京畿を一掃除し大荒削的な肅正の後、京畿地方に在ること僅かに二月にして岐阜に歸つたと云ふことは、永く尾濃地方を留守にすることが出来ない情勢に在つた爲であることは云ふ迄もないが、信長が一旦歸來したことは賢明で、木曾義仲が滯京して味噌を付けたのに比し天地の差がある感がある。

第七章 第二次京畿肅正並に但馬及び南勢の攻略

信長が京都から岐阜に歸ると、前に信長から追つ拂らはれた三好の殘黨、美濃齋藤の浪人共が京都に集まつて、又將軍義昭の居館を襲ふと云ふ事態が起つた。恰も在支皇軍が蔣軍を撃破して原駐地に歸ると又彼は蝟集して來ると似た點がある。

此の報告は永祿十二年正月の四日に岐阜に達した。折柄大雲であつたが、信長は從者數騎を伴ひ五日出發晝夜兼行で京都に着いたが、亂は村井貞勝等に依つて鎮定せられた後であつた。此の信長の再上洛を見ると、三日行程の所を二日で急行し、軍隊は後から遅れて上京すると云ふ拙速振りである。之も信長の用兵の一特長である。流星に秀吉の主人である。

信長は此の機に於いて 皇居の修築に着手し、其の他御料の設定等勤皇の至誠を捧げたことは後世吾人の感動する所である。又幕府の修繕をも爲し義昭をして幕府に安居せしめ、此の度は秀吉を止めて京都を守護せしめた。秀吉に此の重任を課したのも蓋し秀吉の手腕を益々認識した爲であらう。斯様に處置をして信長は岐阜に歸つた。

其の後七月信長は一部を遣はして但馬の山名氏を討伐せしめ、八月には自ら大軍を率ゐて南伊勢に進攻して北畠氏の征伐を開始し、遂に其の本城大河内を攻圍した。併し城兵克く戦ひ城も堅固であつた爲、信長は力攻を止め、長圍の策を執り、附近の民家を悉く焼き拂ひ、田畑の作物を全部刈取らせて城を丸裸にしてしまふと共に勸降の矢文を送つた。當時城中は糧食に困り抜いて居つたので屈服和を請ふた。依つて信長は二男信雄を大河内城主とし北畠の姓を冒し南伊勢を治めしめ、北畠の當主具教は家も國も信雄に譲つて大河内城を出ると云ふことを條件として其の降を許した。一説に依ると北畠の家臣拓植某は主人北畠具教を殺して降参した。信長は拓植の不臣を責めて之を斬首したともある。何れを正とするやを検討せんとするのは本書の目的ではないが、具教は其の後毛利氏や本願寺と關係を持つて居るから後者の説は如何はしい、或は永祿十一年春の北伊勢討伐には信長は可成り謀略を以て諸族を征服して居るが、此の際の謀略などちやんぼんになつて居るのではなからうかとも考へられる。併し乍ら何れにしても信長の性格や用兵の特質が判ると思ふ。拓植某を殺したと云ふ説の眞偽は別として恰も源頼朝が奥州征伐の際泰衡を弑して降参した河田某を斬らしめた話を信長に擬したのかも知れぬが、若し眞なりとせば名將の爲す所同軌である。西洋史上でも歴山大王が、河斯王ダリウス三世を弑して降参した臣下を死罪とした。東西名將の心理相通するものがある。大河内城の長圍説

に従へば信長は難攻不落と迄は行かずとも堅城を力攻して部下の多くを損傷せしめると云ふやうな攻撃は之を避けると云ふ戦略思想があつたやうに思ふ。姉川戦前小谷城を力攻せず、敵を誘引出し策を講じた點にも其の現はれを見ることが出来、後年の伊丹城、石山本願寺の攻圍亦然りである。

信長は伊勢の攻略には、北、南地方共に武力に併行して常に巧妙な謀略を用ひて居ることは事實であつたと思ふ。唯其の謀略の筋書は種々小説化せられて居ると云ふに過ぎぬと思ふが、信長の智は湧くが如くであつたことは否めまい。

第八章 第一次朝倉征討と浅井の破約

〔織田、朝倉兩家の關係〕 織田氏と朝倉氏とは共に斯波氏の重臣で、織田氏は尾張の守護代、朝倉氏は越前の守護代であつたが、斯波氏の衰弱に乗じて兩家共に其の守護地たる尾張と越前に於いて獨立したのである。所が朝倉氏の方は織田氏より家格は高い上に、信長家は織田の宗家ではなく分家であるから、其の家の格式には尙更開きが出来た譯であるが、其の實力に至つては朝倉氏は逆も織田氏の敵でなかつた。併し朝倉氏としては信長の下風に立つことを快しとしなかつたことは人情として止むを得ない。信長が西上する際にも朝倉氏の協力を求めたが、勿論、應じやう筈はない。足利義昭が初め朝倉氏に寄寓し、後、織田氏を頼んだことも朝倉氏には不快であつたらう。

兎に角、信長が、四海平定の企圖と、兩家の因縁的な感情は早晚爆發するの運命にあつた。所で朝倉家の當主義景は文弱凡庸であつたから信長の狙ふ的となつたことも自然であらう。

〔朝倉氏征討〕 永祿は十二年を以て終り、其の翌年は元龜元年となつた。

此の年二月信長は入京した。此の上京の際は信長も慰安行樂的な行事の數々を催した。就中、將軍

の新邸が落成したので、茲に諸將領を會して今日迄の勞を犒ふこととし、徳川家康を招いて、家康も上京することとなり、此の春は珍らしく京都は和やかであつた。信長は此の慰安行樂、新築落成祝に朝倉義景にも招待狀を發して入洛を求めたが、勿論之に應じないのみならず、南部越前の諸城に於いて戦備を修め敵意を示した。之が信長の朝倉征討の口實となつた。

思ふに、信長の入京は恐らくは朝倉氏を征討の決意を藏してのことであり、其の行樂も、一面、將領の慰安と一面、企圖秘匿の謀略であつたかも知れぬ。蓋し四月二十日陽春解雪を待つて京都から直ちに出動して居る所を以て見ても推定するに難くならうと思ふ。

斯くて、信長は家康と共に四月二十日京都を發し、若狹を経て越前に進入し、二十五日敦賀を攻略、二十六日金ヶ崎城の攻撃を開始し、是亦難なく攻陥したので信長は朝倉義景の本城一乗谷へ押寄せようとする矢先、浅井長政が是迄の信長との盟約を解消すると云ふ通告に接した。

〔浅井、朝倉兩家の關係〕 茲で浅井、朝倉兩家の關係を概説して置かう。

浅井家は北部近江の守護京極氏の家臣であつたが、京極氏の重臣、上阪景重が京極家の權を専らにし、屢々南部近江の六角氏と戦ひ、當代の浅井家の主人たる亮政も上阪の配下でた、かつて戦功があつた。上阪が死んだ後、謀略を以て上阪家を押しさへて之に代り、小谷山に本據を構へ、之を小谷城と

名づけ、京極高清を擁して北部近江の六郡を領有して長政の代に及んだのである。

而して、夫れ迄に淺井氏が南部近江の六角氏と戦ふ毎に朝倉家は兵を派して淺井家を援助した。之は近江越前は共に接壤し、四圍の群雄に對する利害關係も一致し、感情的にも兩家は所謂仲好しと云ふ傳統があつたやうである。

〔淺井長政破約の理由〕一體何故に淺井長政は義兄に當り然も何人が見ても當代に傑出して居る信長を裏切つたのであらう。元來淺井長政は少壯とは云へ相當の人物で、朝倉義景よりは遙かに優つて居ると思ふのに此の邊の明がなかつたのは不思議であるが、之は其の父の久政の凡眼からであつた。其の父の久政と云ふ男は、參謀本部公刊の日本戦史に「久政懶惰文弱ニシテ宴樂ニ耽リ兵力漸ク衰フ其ノ將士之ヲ憂ヒ長政ヲ擁立シ」と書いてあるが如き有様であるから見當はずれの觀方をするのも是非はない。久政は信長の越前進入を見て長政に向ひ「信長の心中を伺ふと、どうも信用は出來ぬ。朝倉を滅ぼしたならば、必ず次いで鋒を我が家に向けるであらう。朝倉家とは古來親交があり、絶縁し難い間柄であるから此の機會に於いて朝倉を援けて信長を挾撃するがよい」と意見した。長政も父の言に従つた譯である。

けれども信長は淺井氏に對しては之を滅ぼさうと云ふ考へはなく、妹の婿、義弟としての長政觀は決して長政を捨てること云ふ考へはなかつたやうに考察せられるのである。

信長のごとき型の偉傑は、凡人からは非常に誤解せられるものである。筆者は、淺井長政、松永久秀、荒木府重の叛を見ても、將又最後の明智光秀の叛逆を見ても信長の意中を誤解して居ると思はれる點は多々ある。從來夫れを信長の不徳の致す所だと評する史家が多いが、筆者は、寧ろ反對に叛者の不明の致す所だ、と評したのである。

〔信長の越前撤退〕長政の裏切りのことは、初めは正式通告でなく風評流言の如く信長の軍中に傳はつた。併し流石の信長にも、之はどうしても信ぜられない。夫れと云ふのも信長自身は長政に對する異心なく、寧ろ義弟として彼を信賴しての越前進攻であつたからである。所が、陣營の様子を見ると淺井の叛の聲が益々高く、どうやら陣營も動搖の色が見えるので信長は從軍して居た前の降將松永久秀に、果してどうだらうかと思見を聞くと、久秀は、どうも本當らしいから、此の際速かに退却せらるるを可なりと進言する。信長も思案にくれて居る際、淺井家からの使者が来て、前に取りかはした誓書を返し爾今敵に爲ると云ふ正式通告が來た。

そこで信長は越前に亂入し討死する決心である旨を家康に語ると、家康は「淺井の行動は鈍重だから今からならば、まだ退却が出来る。拙者は後衛を引受けるから御安心あれ」と答た。之に對し信長

は「夫れでは相濟まぬ。拙者より先へ退却下され、途中、淺井勢に遭遇せば突破して行かれやうと、拙者を御待ち下さらうと時の宜しきに従はれよ」と云ひながら「疾く〜」とせかせたので、家康は先敵中を退却する場合に設ける前衛のやうになつて先發する。出發に際し家康は信長に向ひ「拙者は先に行しますれば退却の途筋は御心配御無用である」と告げて出發した。これで敵中退却の前衛が出来たが、次には後衛を誰に命ずるか云ふ段になつた。すると秀吉は進んで後衛司令官たることを志願した。信長は其の意氣を壯とし、各部將の部下の中から、秀吉の許に三、四十名宛、臨時配屬して秀吉の麾下たらしめた。

此の敵中退却に、家康は前衛、秀吉は後衛、信長は本隊を率ゐるて行動する。天下の三傑の行列である。一寸見られぬ場面である。

斯くて信長は二十八日夜を以て退却を開始し、東部若狭から湖西に出で京都へ歸著したのは四月の晦日であつた。

〔評論〕 信長の人の使ひ方に就いて一言する。此の退却路上通過せねばならぬ西部近江に栃木谷と云ふ所があり、そこには栃木元綱と云ふ豪族が居り、佐々木氏の一族で淺井方に味方すると云ふ噂が大であつた。そこで松永久秀が單身栃木家に行き栃木を説得し、却つて信長を響應せしむるやうにさ

せた。松永久秀は古來將軍義輝殺逆の犯人として定評があるが、大策士であつたらしい。又相當に膽ツ玉も太く、使ひ方に依つては役に立つ男らしかつた。さればこそ信長が初めて入洛した際、義昭の不興を掛して松永久秀を許し、大和の筒井順慶征服にも彼を用ひ、今日迄使つて來た。所が、後年信長は安土城内に於いて、久秀を前に置き家康に對し「之が將軍を殺した有名な松永で」と信長としては全く無頓著な冗談的な紹介であつたが之が松永をして不安疑念の基となり、遂に信長に叛して却つて亡ぼされてしまつた。信長は人の使ひ方の上手な人である。久秀が越前進攻や退却時にも能く働いて居るのも信長の人の使ひ方の上手な一證據である。所が根は無頓著な人であるから戯れの不用意な一言が松永を叛せしめた。徳川時代の學者は斯様な所を捉へて信長は不徳だと云ふが、筆者は久秀はひねくれた曲者で信長と云ふ英傑を知らない不明の爲だと思ふ。

秀吉は洲股の占據と防衛、箕作城の攻陥、京都の守護代、此の後衛戰等、花形的な難局の任務を立派に果した。彼は難局に處し最善を盡くして任務を完遂した所に其の大成した原因があらうと思ふ。信長も這回は可成りまづい作戦に終つた。其の爛眼をもつてしても淺井の裏切りは看破出来なかつた。併し其の見切りの附け方は善いと思ふ。彼は越前亂入討死の決心を吐露したが夫れは恐らくは本心からではあるまい。内實は退却と決心して居たが、夫れでは下拙をすると潰亂に陥る虞れもあり、

殊に降將松永の如き大策士も居るから、之等に異圖なからしめ、退却行を容易にさせる必要もあり、又家康の意中を探つて見る必要もあつた爲の謀略心からだと思はれる。

家康と信長との對話を見ると、兩雄共に中々抜け目はない。併し兩者はかうして美しい所を見せるのも、互に自重し、信頼し合つて居た結果である。そして家康は對等とは考へず、信長をば信頼すべき兄分として信長の爲に最善を盡くした所に信長も亦、信頼すべき弟のやうに思つたであらう。

筆者は信長自身が努力の人であるだけに、誠意努力する人を愛し信頼したやうにも見受けるのである。

淺井長政が疑心暗鬼に驅られて盟約を破棄したことは稀れな愚策であつたと思ふ。只藪棒的な行動に出でず、堂々と宣戦した後、對敵行動に移つたことは武士的だが、棲が合はない。大なる理由なく信長と縁を切り敵に廻はる行爲其のものは藪から棒式である。かう云ふことをするならば越前境に兵力を集結して置いて、縁切狀を突きつけると間髪を容れず、信長軍にむかつて進攻を開始すべきである。實に中途半端な愚策を弄したものである。

朝倉氏と淺井氏との作戦協定は信長が京都に還つた後始めて居る。即ち五月に長政は使を朝倉家に遣はし、六角家は再び南近江に勢力を盛り返し、信長の岐阜への歸路を邀撃するから之に策應しよう

ぢやないかと提議して居る。けれども義景は之に應じなかつた。淺井長政は信長を裏切つただけで何の施策もなく、みす／＼自家を後年の滅亡へ追ひ込む因を作つたに過ぎないと云ふ結果となつて居る。成る程家康が淺井を鈍重と評した通りである。

第九章 姉川の戦 (浅井・朝倉との決戦)

〔信長の戦備〕 信長は危機を脱して京都に歸つたが、形勢がかうなると一刻も猶豫は出来ない。そこで愈々岐阜に歸り、爾後の對淺井朝倉作戦を準備することとした。所が、南部近江には、六角の殘黨再び蝟集し蜂起して信長の退路を邀撃せんとして居るので、之に對する處置も必要である。信長は行路の敵を追つ拂らひ、南近江の要衝に守備兵を殘置し、自ら、千草越(鈴鹿越のもう一つ北の峠)を越え伊勢を経て五月二十一日岐阜に歸つた(家康は十八日岡崎に歸る)。

斯くて六月十九日には出動を開始し、二十八日は姉川の戦となるのであるから、必ずしも遅いとは云へない。寧ろ中々敏速と云ふべきである。

因みに、信長が越前から京都に歸つた後、五月上旬、中旬は京畿及び南近江の諸工作に費したと思はれる。即ち、京畿及び南近江地方を安全にして對淺井朝倉征討をやらうとするので、其の準備なるや疾風の如く新作戦を敢行しようとしたのであらう。

一方淺井長政は、信長と盟約を破棄した後、六角の殘黨が南近江に蜂起して信長を路に邀撃せんとして居るので好機逸すべからずとし、再び義景に出兵を促した所、朝倉景鏡をして兵三千を率ゐて南下せしめた。依つて南近江に進出し六角黨と策應せんとしたが、六角義賢は之に應じない(淺井と六角とは古來仇敵であるから感情的にも合はない)。さうかうする内に信長は、佐久間信盛、柴田勝家等の宿將を南近江の要衝に止めて歸東したので、長政は美濃の西方國境に出動して垂井、赤阪方面に放火するなど脅威して見たが、信長は一向對手にしない。其のうちに朝倉の増援部隊も歸越することになつた。

其の後六月に入つてから信長は、秀吉と竹中重治とに旨を含め美濃近江國境附近の淺井領内又は遠く湖東彼我の領境近くの淺井方をして内應せしむる工作を爲さしめた結果之に成功した。即ち美濃より近江に進入することを容易にし且つ淺井領に進入後、湖東方面の淺井方から左側背を脅威せられないう爲である。大局小局に互り實に用意周到と評すべしだ。

〔作戦行動開始及び爾後の機動〕 信長は岐阜に歸つてから諸般の準備を整へたが、夫れが完成したので六月十一日(元龜元年)更に徳川家康に應援を求め、十九日自ら兵凡そ三萬人を率ゐて岐阜を發し長比碁(美濃と近江との國境要塞として淺井氏に屬したのを作戦開始前謀略に依り織田方に屬せしめたもの)に陣し、廿日自ら横山城(以上地名に就いては本章挿圖参照)を偵察した上、織田信包、

丹羽長秀、水野信元の約五千をして横山城を監視せしめ主力は中山道柏原より右折して淺井氏の本據小谷に向ひ、更に一部をして雲雀山に陣し小谷城下の民家を焼かしめ、自ら虎御前山（雲雀山の西）に陣し、別に柴田勝家、佐久間信盛、木下秀吉等に命じて小谷城外四近の部落に放火せしめたが、小谷城からは一向出撃をしない。信長は意中既に施策を考へたが、更に諸將を會して軍議を開いた。此の軍議の席上佐久間信盛は「急に城を抜かふとすれば我が軍の三分の一を損するだらう、且つ朝倉の援軍も追つつけ來ると思ふから姑く軍を後退して其の動靜を観るに如かざる」旨の意見を述べたので信長は之に同意した。

茲で一つ申して置きたいことは信長は明敏果斷其のものやうな人であるが、軍議はよく聞く、そして部將の意見を聞き、自分の決心と一致すると勿論、直ちに之を裁定する。夫れは衆心を結集一致せしめて戰鬪方針完遂に邁進せしめんが爲である。名將言行録に「信長常に諸將を集めて謀を問ひ、其中にて善謀あるを我思ふ所則ち夫ぞとて取り行はれしとぞ」と云ふ一話があるが、信長は思案に餘つて部將に策案を聴くと云ふやうな凡將ではない。意中ちゃんと成案があるが自己の案や決心を部下に押付けただけでは衆心一致上具合が悪いと思つたやうなときは必ず軍議を開き、諸將に言ふべ

き所を言はせて、自分でじつと聞いて居り、諸將の意見開陳が終ると、自己の決心と一致し又は之に近似する案を裁決するので、外觀は部將の意見を我物顔に執るのだと云ふやうに見えるかも知れないが眞相は左様なものでないことは幾多の作戰指導が之を證明して居る。事實、古名將の軍議は何れも信長式であり、主將の意中と同じ意見が出ないとか、とんでもない見當違ひなことを云ふと、之に對し自己の意見を述べて啓蒙する。要は衆心一致を圖り作戰行動を其の方針に統一する爲で、自ら思案に餘るとか、策がない爲、軍議を開いて意見を聞くのでは斷じてない。筆者は軍議は須らく信長式であるべしと主張するものである。將帥にして意中決することなく所謂白紙で幕僚會議に臨んで參謀長や主任幕僚の意見を聴き、よからうと思へば裁決すると云ふやうなことではなるまい。必ず自分で確乎たる考案を以て會議を見るべきだと思ふ。又、參謀長と主任參謀との意見が合はぬとか、參謀長の意見と將帥自己の意見とが合はぬといふやうな場合に、高邁なる識見を以て自己の斷案を下す人でないとか、名將の部類へは入らない。自分の意見と幕僚の意見とが一致せず、然も自分の意見の方は善と信するに拘らず之を強行し得ないやうな將帥は凡庸の將たるを免れまいと思ふ。

〔敵誘出城外決戰策〕 さて信長は佐久間信盛の意見に同意を與へたが、夫れは作戰行動の型が似て

居ると云ふので、信長の意中にはびつたり適中して居ないものであつたと思はれる。信長の考案は敵を小谷城から誘引出して城外決戦を爲さむとする爲の後退であり、信盛の意見の如く後退して姑く其の動靜を見ると云ふやうな不決心なものではないことは爾後の戦闘指導に依り十分に窺ふことが出来るのである。然も信長は静観案に同意を與へたのは自己の眞の企圖を晒物としない爲の用心からであり、用兵の形さへ一致して居れば、企圖が違つても差支へがないと云ふ考へ方であつたと思はれる。

茲は信長の非常に周到な所で流石に秀吉の主人、家康の兄分たるの資格は十分に在ると思ふ。信長は斯く後退して敵を誘引出し城外決戦を爲すに決し、二十二日、梁田政辰、中條秀長、佐々成政に後衛を命じ諸隊を彌高村（横山城東方約四吉米）に集結した。此の撤退行に於いて敵の一部が城中から出撃して来たが、後衛の三將は三段構へに交番逐次に返戦して敵を撃退した。

信長が兵力を彌高村に集結したことは、横山城を攻むる如く見せかけて、敵を小谷城から誘引出すための準備工動と見ることが出来る。次いで二十三日信長は其の司令部を龍ヶ鼻（横山城の北方高地端）に移して、諸隊を部署して横山城を四周から包圍する態勢を採つた。此の態勢は小谷城の敵を誘引出す爲其の手を一步進めたものである。

信長は横山城を攻圍した態勢を採り、其の攻城を準備して居るやうな顔をして居るが、信長の眼は

横山城を見ずして絶えず北方小谷の敵情を睨んで居るのである。

〔家康の來援と兩雄の會見〕 越えて二十六日には家康は兵五千を率ゐて春照（横山城東方約四吉米）に來り茲に宿營、二十七日信長と會見し、信長は來援を謝し、兩雄交歡、爾後の必勝を語り合つた。其の節、信長は「吾等兩人がかりで戦へば雜作もあるまいが、君は先づ豫備隊で控へて居て頂いても構はない」との意を漏らすと、家康は「折角、來たからには初めから第一線に出して頂きたい」と懇望した。そこで信長は「然らば敵の援軍朝倉勢に當つて戴きたい、誰か裨將を附けようか」と云ふと家康は「然らば稻葉通朝を附けて貰ひたい」と申出で、信長も賛成し、兩雄の會見を終り、家康は龍ヶ鼻の西方の上阪附近に兵力を集結した。

此の會見を見ると、双方共に其の心持ちが分る。信長は家康を尊重しつつも、聊かも弱味を見せず、自分が主將たるの權威を要領よく表現しようとして居る。そして家康をして進んで一方面を引受けるやう仕向けて居る。家康も中々要領はよい。特に何處迄も信長の爲に獻身的に出て居る。そして信長の意中を見透して自ら督戰隊長的な稻葉通朝を附せられんことを要望して居る。盟約を堅くするには双方斯様な態度でないといかん、自己本位であつてはならぬ。——尤も信長でも家康でも情けは人の爲ならずの意中が無いとは斷言が出来ぬが——。時に信長は三十七歳、家康は二十九歳だが、双方

共に我利我利的な言行聊かも見えぬのは流石に兩雄であると首肯される。

〔淺井軍の態勢〕 淺井長政は信長が京都より岐阜に歸つた後、近江と美濃との國境を越えて垂井、赤坂等、大垣平地の入口迄進攻したが、信長は一向取り合はないので引上げると間もなく信長の方から領内へ手を入れ出して、自領内の鎌羽城（長濱平地南側の要點）が信長に内應するにつれ長比砦の如き國境要砦も遂に織田方となつてしまつた。

南部近江に蠢動した六角殘黨も六月の初め柴田勝家等に撃滅せられて又起つ能はずと云ふ狀況に至り、假令多少の殘黨が居ても從來の仇敵感情上、織田方に對する協同作戰など爲すべくもない。湖東の淺井領や美濃國境の近江地方も大體織田方となり、淺井の勢力は湖北長濱平地と西部近江の北半部位である。そして此の長濱平地の北と東とに小谷の本城と横山の支城とがあるが、此の兩城が相俟つて美濃方面に對し長濱平地を制扼し得る状態にある。そして開戦前更に横山城を修築して一部を以て之を警備せしめて居たのであつた。

〔淺井軍の行動〕 淺井長政は信長の來攻の企圖が漸次鮮明するに従ひ、援を朝倉義景に求めると共に戦備を修めた。

既にして信長軍が領内に進入し、近く小谷城下を燒いたので、長政（當年二十六歳）は出撃せんと

したが、諸老臣が、朝倉軍の來援を待つを可とする旨進言するので思ひ止まつた。次いで信長軍が後退し始めたので長政は之に尾撃せんとしたが、父の久政初め老臣が又之を不可とするので、長政も之に従つた。そこで少壯連が老臣達の意氣地無きに奮慨して獨斷追撃して織田軍の後衛と戦つたが、其の目的を達せず城内に退却したのであつた。

所が信長は小谷城から撤退したが、横山城を攻圍したので長政は二十五日愈々城を出て大依山（大寄山）に陣取つた。信長の思ふ壺の第一歩に入つた譯である。二十六日になると朝倉景健の指揮する増援軍が大寄山に到着した。茲に於いて淺井朝倉の聯合軍は、淺井軍約八千、朝倉軍約一萬、計一萬八千となつた。

二十七日になると横山城は指呼の間になり乍ら危急状態にあるのであるから、長政もじつとして居ることが出来なくなり、景健に對して朝倉軍の主力の來著を待つことなく、二十七日夜行動を開始して、拂曉より横山城を攻圍中の信長軍を背後から攻撃すべく提案した。其の理由は朝倉軍の主力を待つ爲に無爲にして時を移し、横山城を失ふは耻であると云ふに在る。之に對して大部の諸將は賛意を表したが淺井半助と云ふ同族部將は之に反對した。此の反對論に就き參謀本部公刊の日本戦史には「某嘗て美濃ニ遊ヒ稻葉氏ニ客タリ能ク信長ノ將略ヲ知ル其敏捷ナルコト猿猴ノ樹梢ヲ走ル如ク

最モ機ニ應シ變ヲ制スルニ長セリ、我軍營ニ曉襲ヲ能クシ難キノミナラス恐クハ陣ヲ移スモ亦容易ナラサラン姑ク此ニ在テ敵情ヲ考察スルニ如カス」と敘してある。信長の用兵の神速振りは當時敵味方共に知れ互つて居たものと見える。秀吉も性來敏捷なる上、信長から教へられたのだから愈々敏捷となつたのだらう。併し信長の方は師匠格だ。

此の淺井半助の意見に對し、遠藤直經と云ふものが更に反對し、「若し負けても自分は亂軍中に紛れ込んで信長を刺し殺す」と迄主張したので軍議は攻勢移轉に決したのであつた。併し、之が全く信長の思ふ壺に入つたとは淺井朝倉方の誰しも知るに由がなかつたわけである。此の遠藤と云ふのは曾て信長が西上準備の爲、永祿十一年佐和山で長政の會見の際、信長を暗殺せよと進言した男である。彼は眞に信長を仇敵視して居つたものと見える。姉川の敗戦後此の言責の如く信長の本營に斬り込んで來て戦死した。責任觀は見るべきである。

〔戰闘〕 二十七日夜信長は龍ヶ鼻の司令部から遙かに見える大寄山の炬火を見詰めて居つたが、側に来てゐた勝家や秀吉等に向ひ「敵は愈々明朝來攻するだらう。彼は全く我が衛中に陥つた。さあ反撃しよう」と云ひつつ立ち所に部署を命令した。其の部署は次の通りである。

第一隊 坂井政尙(約三千)

第二隊 池田信輝(約三千)

第三隊 木下秀吉(約三千)

第四隊 柴田勝家(約三千)

第五隊 森 可成(約三千)

第六隊 佐久間信盛(約三千)

本 隊 信 長(約五千)

計 二萬三千

横山城監視隊 丹羽長秀(約三千) 氏家直元(約一千) 安藤範俊(約一千) 計五千

徳川軍は家康(約五千) 稻葉通朝(約一千) で第一隊酒井忠次(約一千) 第二隊小笠原長忠(約一千) 第三隊石川數正(約一千) 木隊家康(約二千) であつた。

即ち織徳同盟軍總計二萬九千である。

之に對し淺井朝倉軍の部署は次の通りである。

淺井軍 (約八千人)

第一隊 磯野員昌(約千五百)

- 第二隊 淺野政澄(約一千)
- 第三隊 阿閉眞秀(約一千)
- 第四隊 新在直頼(約一千)
- 本隊 淺井長政(約三千五百)
- 朝倉軍 (約一萬人)
- 第一隊 朝倉景紀(約三千)
- 第二隊 前波新八郎(約三千)
- 本隊 朝倉景健(約四千)

當時姉川は水深三尺位であつたと云ふことで戦闘行動には大なる障碍とはならなかつた。

斯くて兩軍共に夜間行動を開始し、二十八日午前四時頃から、織田軍對淺井軍、徳川軍對朝倉軍と云ふ關係で、姉川の線で激戦が展開せられた。淺井方は信長の此の如き反撃は豫期しなかつた。

戦闘経過を概述すると、當初淺井軍の鋒尖鋭く、織田軍は戦況不利にして第一隊から第四隊迄は敗れて第五隊でやつと支へ、將に信長は旗下を以て最後の決戦を爲さねばならぬのではないかと思はれる程であつたが、此の時横山城監視部隊中の氏家及び安藤の兩隊は獨斷本戦に參與して淺井軍

の左翼を衝いたので淺井軍の猛襲は一頓挫の形となつた。

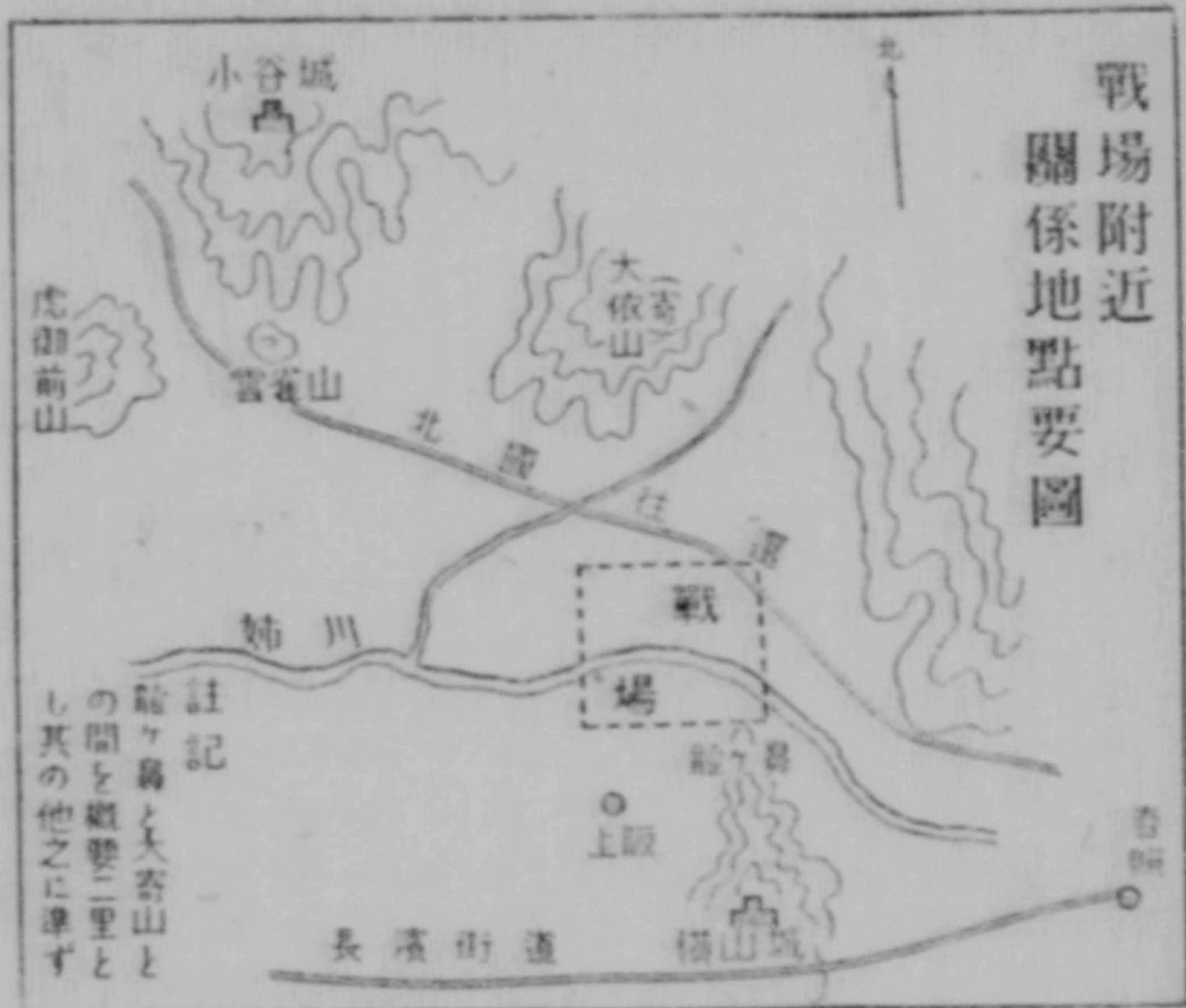
徳川軍對朝倉軍の交戦も當初は朝倉軍が猛襲し徳川軍の第一線第二線も稍々押し退けられたが第三隊が之を支へ、第一第二隊も反撃したが朝倉軍も亦健闘し、徳川軍を壓迫しさうな戦況となつた。朝倉軍は徳川軍を壓して愈々家康の旗下に迫る遠きにあらずと見た際、家康は朝倉軍の右翼を衝くべき好機を看破して之に乗じて猛然と朝倉軍の右翼に對して側面攻撃を斷行したので、朝倉軍の銳鋒もすつかり鈍つて戦勢漸く逆轉し始めた。そして朝倉軍は後退を始めた。家康は機を失せず益々猛攻を加へたので朝倉軍は敗色が見えた。

淺井軍は織田軍の第一乃至第四隊を壓して進出して居るのに、朝倉軍を後退し出したのだから、朝倉軍と淺井軍との接撃部の間隙は著しく大となつた。此の間隙に乗じて稻葉隊は淺井軍の右翼に側面攻撃を加へた。

是に於いて戦況は愈々逆轉した。淺井軍の動搖は顯著となつて來たので信長は此の機を捉へて旗下及び其の他の後方部隊を以て淺井軍の中堅を突き崩した。

斯様な次第で淺井朝倉聯合軍は、織田徳川の同盟軍の爲撃破せられ、小谷城指して退却した。秀吉等若干の將は此の勢ひに乗じ一舉小谷城を乗取るべしと進言したが、信長は之を許さず、戦場追撃

戰場附近
關係地點要圖



の後兵力を集結した。夫れは午後二時頃であつた。そして兩軍の損害は、

織田徳川方 約八百

浅井朝倉方 約千七百

の戦死者があつた。

此の戦闘の経過を戦闘指導の構想圖として書くと次頁の圖のやうになる。

〔評論〕 以上の戦闘経過を見ると次の觀察が出来る。

(1) 此の戦闘は陽動に依り敵を誘引出し、堅陣外に決戦を求めんとして生起した遭遇戦で其の形式は戦闘前進から發した遭遇戦である。織田軍は豫期戦だが、浅井軍は織田軍の背後を衝かんとしたが

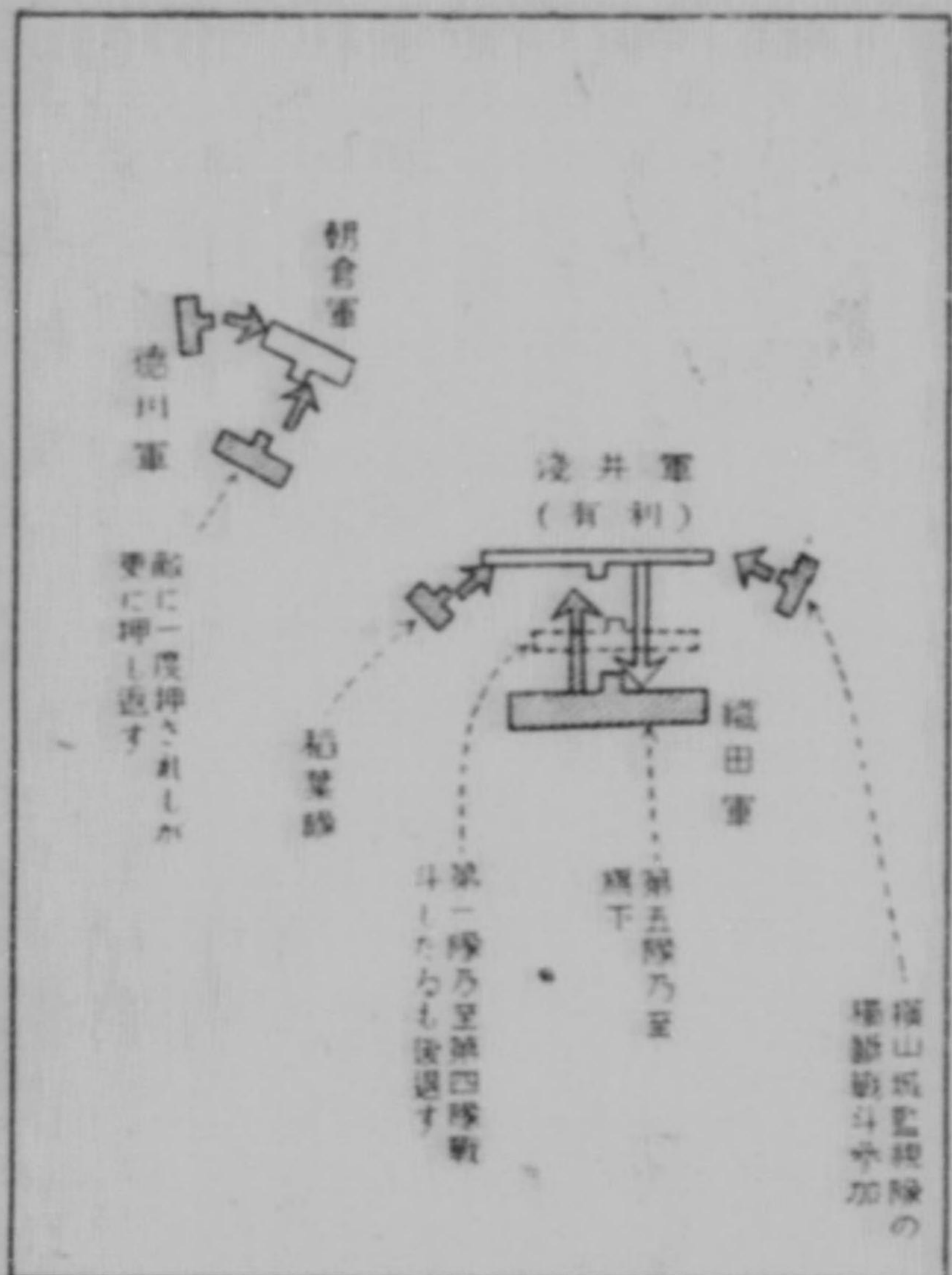
不期戦が起つた譯である。

(2) 浅井軍は織田軍の突破を企圖し、其の突破が漸次奏效しつつある矢先に兩側から包圍せられて突破は不成功に終り、次いで敗北となつた。中央突破は不成功に終つた場合には、かうなるのは古今東西皆然りである。

(3) 浅井軍も朝倉軍も側面攻撃を受けて大敗した。要するに包圍攻撃の有効なることは今も昔もかはりがなく、遭遇戦に於いても包圍の緊要なることが分る。

(4) 浅井朝倉兩軍が協同動

(備考) 織田軍ハ左前梯隊配備ヨリ戦闘ヲ開始シタルモ構想圖ナルガ故ニ上圖ノ如ク書ク。



作が悪く朝倉軍と浅井軍との間に生じた間隙は破綻の基となつた。今日でも兩兵團の接合部は危険であり攻者の狙ひ所となると云ふ原則は、此の時代に於いても既に存在してゐるのである。

此の戦闘に於ける信長の統帥を見ると次のやうな諸點に其の非凡性があることが分る。

- (1) 敵を堅陣より誘出して陣外決戦を求めた點(斯様なことは外國に其の例がない)。
- (2) 敵の企圖判断の明察、俊敏なる點。
- (3) 兵力部署特に夜間に於ける兵力部署の神速なる點。
- (4) 必勝の信念を堅持しある點。

而して此の戦闘の勝因は、家康の奮闘就中朝倉軍の右側面を衝いたこと、稻葉と、氏家安藤兩隊が浅井軍の兩側を衝いたこと、此の機を逸せず加へた正面よりする信長の猛反撃、此の諸行動がよく協同して行はれた點を見落してはなるまい。

家康は少壯名將としての器は益々磨かれた。彼が敵に比し半數の兵力を以て戦ひ、克く敵の弱點を苦戦の間に發見して之に乗じ側面攻撃を行つたことは實に偉いと思ふ。凡そ戦闘に於いても大會戦に於いても將又戦争全局に於いても狀況が悲運となると敵の強點と我が弱點とが眼に著き、敵の弱點と我が強點が目に入らなくなる。之が凡將の凡眼である。名將は家康の如く苦戦悲運のときでも克く敵

の弱點を發見して之に乗ずる。之に乗ずるは部下を知つて居るからである。現下の大東亞戦争に於いても、敵の強點のみ眼に入るやうではならぬ。必ず其の弱點を看破して之に乗せねばならぬと思ふ。

家康が、信長と協同作戦をやるのではなく、信長の部下の如き心持ちで獻身的にやつたことは織徳兩軍勝因の一つであり、反之浅井朝倉兩軍には朝倉軍に此の氣分がなく對等であるから協同動作は出来ぬ。第一次歐洲戦争初期に於ける英佛軍の狀態に似た様相を呈して居る。茲に一つの敗因がある。

浅井長政が當年二十六歳の青年勇將であつたが、其の出撃攻勢の決心もわるくはないものの勝目のない決心と評すべしだ。信長と縁切りとなつた以上は、堅城小谷に莫大なる糧食其の他戦闘資材を貯へ、茲で持久して近畿の反信長黨、武田、毛利の反信長聯盟の戦略的據點と爲るより外に手が無い。根本に於いて信長を裏切つたのが大勢を見抜く明がない爲で總ての禍根は茲に在る。長政は此の年春信長を越前から退却せしめたことを以て誇りとしたならば凡將と評せざるを得ない。當時果敢敏速に越前に進入しなかつたことや、信長の歸東を扼することが不徹底であり、信長が歸京した後、美濃の西端などつたたとて何にもならぬと評すべきである。

長政の父、久政はだらしない殿様で、遂に引退の已むなきに至つたのであるが、若し老人の冷水の代表物を求めるならば、此の久政が一つのモデルであらう。信長を裏切る智慧をつけるなどは言語

の外と云ふべしだ。だが長政は父と義兄と妻との間に挟まれた苦境は同情すべきものがある。長政は其の間に處して行くべき途を誤つたのは氣の毒であつた。思ふに淺井家には對信長親善の熱意ある人は居なかつたやうに思ふ。茲に長政も獨力、親織を主張することも出来なかつたと思ふ。

斯かる反信長氣分に拘らず、信長は短期とは云へ、西上戦に於いて淺井を敵に廻はさなかつた外交振りは見上げたものである。

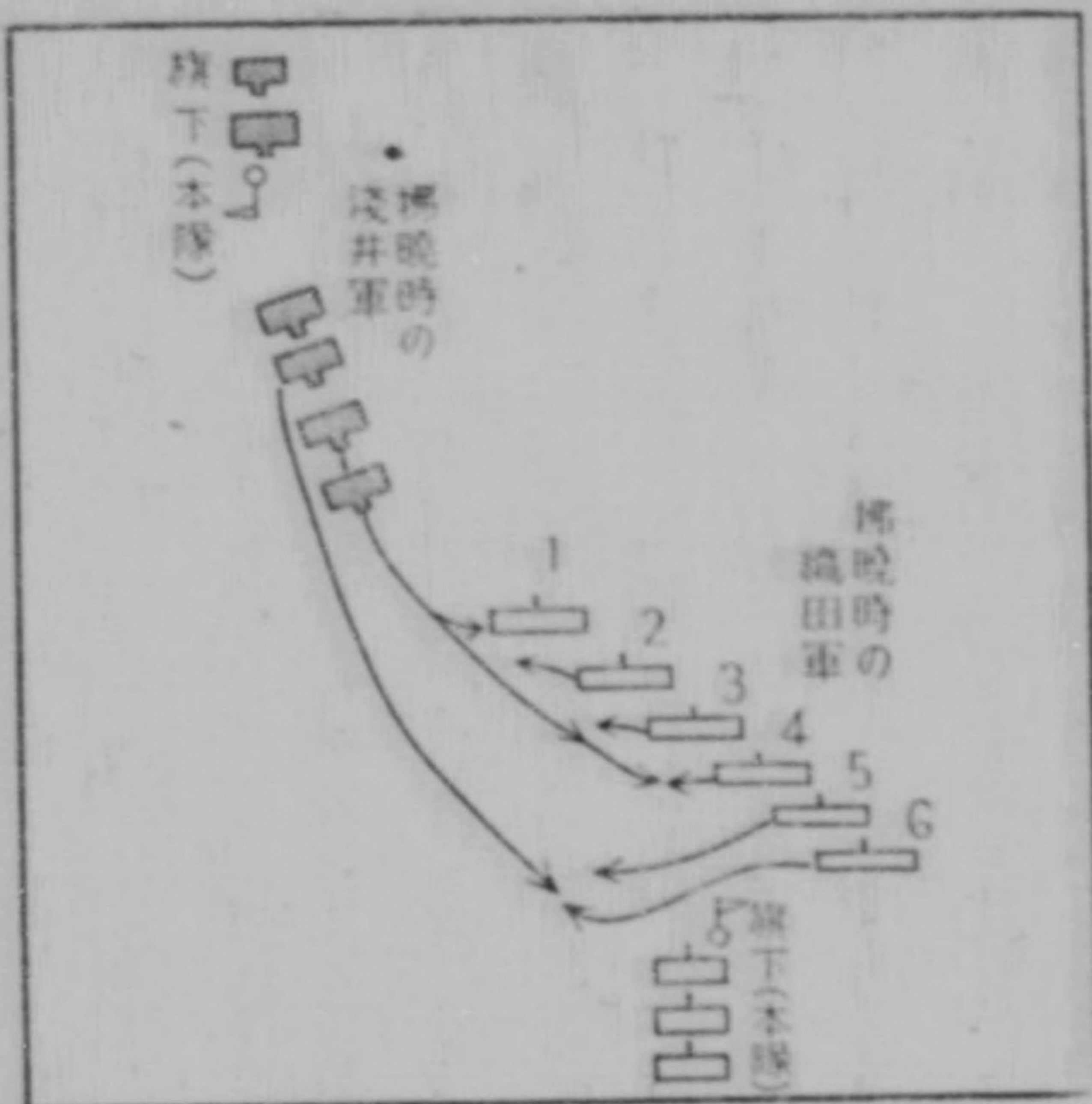
朝倉軍は優勢なる兵力を以て約半数の徳川軍と戦つて敗れて居る。元々朝倉義景は當年三十八歳の働き盛りであり乍ら文弱的な人で、自ら出馬もせず、部將たる朝倉景健を使はして居るやうな所に既に敗因が蟠つて居る。

秀吉が一舉小谷城を屠らんと進言したことは秀吉らしい點ではあるが、信長が之を聴かなかつたことは何故だらう。史話に依れば信長は此の戦闘に於いて安養寺三郎左衛門と云ふ勇士を捕へた。之は曾つて信長も面識ある士であつた。信長は懇ろに勞はりつつ訊問した所、彼は城中尙ほ千八百位の精兵があると答へたので、信長は當日の淺井軍の奮戦を見て小谷城を直ちに攻陥し難いと判断した爲一舉小谷城を屠らうとしなかつたのだとある。或は左様なこともあつただらう。併し左様な戦術的のことのみでなく信長はもつと大きく考へて居たと思ふ。即ち近畿地方では反信長派の策動があり、信玄

の西上のこともあるから、小谷城で曠日彌久するの非なるを考へた爲であるとも思へる。又私的には信長は義弟長政に對し、さう憎悪不快の念を持たず、何とかして反心舊の如くさせたいと考へたかも知れぬ。後年長政は窮命したときも助命するから投降せよと再三勸めて居ることと思ひ比べて左様な感じも浮ぶのであるが、固より實證がある譯ではない。

此の戦ひに於いて非常に不思議に思ふことがある。夫れは信長は淺井軍に比し約三倍の優勢を以て居乍ら、第一隊から第四隊迄が切り崩され第五、第六隊をやつと支へ、そこへ横山城監視隊の一部と稻葉通朝の隊とが兩側から淺井軍を攻撃したのでやつと戦況を好轉せしめたが、何故に第一乃至第四隊が左様に脆く敗れたのだらう。然も第三隊長は秀吉であり、第四隊長は柴田勝家であるに於いて此の疑問が益々深きものがある。又弟分の家康は寡を以て倍數の朝倉軍を對手とし苦闘を續けつつ遂に何人の援助も藉らず、獨力で撃破して居るのに、兄分の信長が斯くも危い戦ひをして弟分からの助太刀で勝つたかの如く見えると云ふ諸點である。そして甲陽軍鑑などの評を見ると信長が淺井軍に對して三倍もある兵力を以て初期まくし立てられ、家康が僅かに五千の兵力で二倍の朝倉軍を撃退した御蔭で信長が勝つたのだ。家康が居なければ信長は負け戦をする所であつたのだと評して居る。之は信

長に對する反感が手傳ひ、家康を偉くしようとする人の手に成つたかも知れないから、之のみ信する



ことも出来ぬが、兎に角、信長方では第三隊の秀吉、第四隊の勝家などまでまくし立てられて居るのである。然も浅井軍の各隊は千人隊で、織田軍の各隊は三千隊である。按ずるに織田軍の不利なりし原因は上圖の如き織田軍の梯隊配置に對し第一乃至第四隊が側面を衝かれて方向變換が出来なくなつてしまつた爲ではなからうかと思ふ。果して然らば信長の此の戦闘配置は信長にも似合はぬまづい配置と云はねばならない。併し斯かる危機に於いても泰然たる所に信長の偉さも見えるとも云へる。又長政は僅かに三分の一の兵力を以て克

くあれだけ戦つたと禮讃して宜しいのである。

更に考へると織田軍の第五隊と第六隊が兎に角方向變換して猛襲して来る敵を引受けて居るのであ

るから、第一隊、第二隊が不意に側面を衝かれても第三隊の秀吉、第四隊の勝家などの所で何とかせねばならぬ所である。然るに之が出来て居ないのは何故だらうと云ふ疑問がある。察するに秀吉などでも勝家などでも思はぬ不覺をとつた譯であらう。考ふれば色々と思はれると思ふが、確かな文獻もない。斯様な状況になつたのは詰まる所時間がなくて信長軍各隊の戦闘準備がまだ完成しなかつたのではなからうかと思ふ。信長が大寄山の敵の炬火を望んで敵の攻撃前進企圖を察知したのは夜の九時頃であつたらう。夫れから攻圍線を撤して明朝の戦闘配置に就くのであり、太陰曆の六月二十七日の闇夜の行動である。信長は二十八日午前三時更に諸隊の行動を督促して居り、午前四時には第一隊の弓銃射撃が始まつて居る。此の戦闘行動を見ると、信長方は其の行動が神速其のものと評して宜しいが、戦闘準備完全とは評し難い。浅井方は織田軍の攻圍態勢を背後から衝き取ると思つたのが、正面からの遭遇戦となつたのだから不期である。信長軍諸隊は、初めから反撃遭遇を豫期して居たが、戦闘準備が完成して居ない。従つて第一隊第二隊などは聊か面喰つたかも知れぬ。第一隊長の坂井の子が戦死して居るのを見ても尋常の力の戦ひではなく、坂井隊などは不意を喰つたと思ふ。浅井方は不期戦の原則通り遮二無二に突進して來ると、準備不完全な織田方の第一線が脆く敗れる。そして後方梯隊は其のなだれの中に巻き込まれて動きが取れなくなるものである。第三第四隊迄も不首尾であ

つたのは恐らく斯かる關係からではなからうか。所で此のなだれの影響も第五、第六隊の所でやつとなくなり、茲で對策が取れたのであらう。かう考へると恰も横綱の危い相撲の如き観なきにあらざるも、茲が訓練を経たる優勢なる兵力を有する者の強味即ち横綱的強味である（織田軍は訓練に努力したことは有名である。單なる衆兵ならば第五、第六隊も敗れてしまつたらう）。

戦略上の過失は戦術上の卓越、或は軍隊の精銳に依り補はれる。戦略上の優越は、戦術上の瑕疢や多少の軍隊の過失を補ふことが出来ることは古今東西の戦史で之を見ることが出来るが、姉川の戦闘は信長の戦略の卓越に依り他の戦術上の瑕疢を補ひ、家康の卓越せる戦闘指揮は織田軍の戦闘實施の缺陷を補ふたことは否定が出来ぬ。

或は曰ふ。姉川戦に於ける織田軍初期の不首尾は火力主義なる織田軍の歩兵裝備が未だ當代の刀槍主義の騎兵襲撃に對し得る程度に至らなかつた爲だと、或は斯かる原因もあつたかも知れぬ。

信長は左前梯隊（右下り梯隊）を以て拂曉姉川左岸に位置したのは、恐らくは敵が右方前から即ち高きより低きに向ひ攻撃して來ると考へた爲ではなからうか（筆者は現地は未踏査だが地圖で見ると左様に見えるのである）。

○

筆者は本戦闘に於ける戦場運動に就き斯く長々と論ずる所以は、我が古名将の密集部隊の戦闘指揮から、克く今日の戦闘指揮哲理が発見出来るは勿論、殊に機械化部隊の戦闘や空中戦闘に於いては古名将の密集戦闘指揮から其の哲理を撮取し得る所が多いのではなからうかと思ふたからであることを特に附言する。

第十章 第一次反織聯盟に對する作戰

茲に反織聯盟と稱するのは、足利義昭、武田信玄、毛利一族、大阪石山本願寺、淺井朝倉の聯合、叡山僧兵、近畿の三好殘黨や一向徒、紀州の僧徒等信長に對する反抗派の聯盟である。之は足利義昭の忘恩反信長感情、家格の優越觀、信玄の西上中央制覇の霸心、毛利氏と本願寺との結托、動もすれば毛利氏の東上中央制覇の霸心、一向徒等の反信長感情などから發してゐる。尤も堅固なる盟約と云つたやうな統一的な條約はある譯ではないが、反信長と云ふ點に於いては利害關係や感情が一致して居る。そして此の聯盟を策して之を操つて居る黒幕内の大立物は武田信玄で、格式高く虚名を擁する義昭が形式的中心で、武田、毛利などから利用され、利用しつつ信長を除かふと云ふ譯である。

此の聯盟は何時頃から出來たかと云へば、信長が群雄を抜いて西上し其の中央的な威力や權力が日にくく増大するに連れて出來たものである。武田信玄も其の霸心が信長に依り先を越され抑へられたと云ふ感情、信長にうまく一杯喰されたと思ふ不満などが漸次高まつて來た頃で、事實に徴すれば姉川の戦の前後からは表面化して來たやうに思ふ。信玄以外の者では信長の入京時から反信長感情の持

ち主だつた者は大部であらう。

そこで先づ反織聯盟に對する信長の作戰を年表的に敘述すると、

- (1) 元龜元年七月佐和山城攻圍（姉川戦の延長）。
- (2) 同年八月下旬より九月下旬に互り野田、福島（共に今の大阪の西方）兩城に據つた三好殘黨攻撃及び本願寺僧兵との交戦。
- (3) 同年九月淺井朝倉聯合軍の再起に對し野田及び福島より兵を班して之に當り、聯合軍を叡山に圍む。
- (4) 此の間河内に三好黨、攝津に本願寺、近江に六角殘黨、若狹の武田黨、長嶋の一向宗徒等蠢動す、信長部將を遣はして之を鎮壓し、十一月六角義賢降り信長之を許す。
- (5) 同年十二月十三日、義昭は 叡旨を奏請關白二條晴良と共に信長に對し淺井朝倉と講和することを諭す、信長は之を御受けした。又同時に長政及び義景にも綸旨を傳へて和せしむ。兩人亦之を遵奉し茲に和議成る。
- (6) 元龜二年に入り淺井の將士、長政の膽甲斐なきに望みを失ひ信長に降る者多し（長政は對信長作戰が甚だ消極なる爲）。茲に淺井氏漸く内部動搖が始まる（織田方の謀略もあらう）。

(7) 元龜二年の初めに信長と淺井、朝倉との和議が破れ、湖北に於いて小競り合ひが始まり、八月には信長小谷城下を侵略す。

(8) 元龜二年九月叡山の焼討を敢行す。

(9) 元龜三年正月及び七月の兩回信長は小谷城下を侵略して將來の攻城を容易にす。

一方に於いて謙信と修交して信玄を牽制することを策す。

(10) 同年夏、信玄は愈々西上の決意を爲し、淺井朝倉と通謀し、信玄の西上に際し信長の背後を撃たしめるの策を立て、朝倉義景が二萬人を率ゐて小谷城附近に来て、織田軍と對峙したが、信長は信玄の西上が愈々迫るので十一月岐阜に歸り對信玄策を畫策す。朝倉軍又越前に歸る。

(11) 同年十二月徳川家康は信玄西上の途次を擁して之を三方ヶ原に戦ひて惨敗し、信長亦援軍を送つたが効果も薄かつた。然るに信玄は此の西上中發病甲府に歸つたので信長の爲には大なる幸ひであつた。

(12) 天正元年(元龜三年の翌年)二月足利義昭兵を挙げ石山(近江)に據る。信長部將を遣はし之を攻め四月義昭と和を講ず。

(13) 天正元年信玄再び西上を企圖したが發病此の年四月遂に卒す(反織聯盟の大黒柱が折れた譯

である)。

(14) 同年七月義昭約を破りて信長に抗す。依つて信長は自ら之を攻め遂に義昭を降して之を追放す(足利幕府亡ぶ)。

(15) 同年八月朝倉義景南下、木ノ下(湖北)に到る。然るに其の軍中叛逆者が出で陣營動搖し出したので義景が兵を反せんとすると、信長は之に乗じて進撃を開始し、急進して朝倉氏を亡ぼす(此の朝倉陣營動搖にも織田方の謀略が作用して居るかも知れぬ)。

(16) 同年八月下旬信長越前を處理したる後、小谷城に淺井長政を攻めて之を滅ぼす。と云ふ經過を辿つて居る。之で武田、足利、淺井、朝倉の四者の反織聯盟の立役者が皆自然に又は力を以て潰滅させることが出来たので、信長の霸業は益々固くなつた(其の後義昭は信長に軟禁され最後に毛利氏に寄寓して上杉謙信及び毛利一族を中心とする第二次反織聯盟を作ること策し、他の殘存第一次反織黨も又引續き之に加はると云ふこととなり第二次反織聯盟となる譯である)。

以下右述の中主たる作戦を觀察しよう。

〔總括的觀察〕 以上の年表の如く第一次反織聯盟に對する信長の作戦は元龜元年の七月頃から天正元年の九月頃に至る迄約三年繼續し、此の三年間に於いて大立物の信玄が病死し、淺井朝倉を撃滅し

叡山の痛を除き足利義昭を追放して三年掛りで反織聯盟の六七割を各個に撃破した譯で、内線作戰に於ける各個撃破の善き範例の一つであらう。

信長の各個撃破の遣り方を見ると或る一つを破らんとして我武者羅に其の一に突つ掛つて我が方も動きがとれなくなると云ふやうなまづいことをしない。假令一つが生ま殺し的なつても叩き潰し易い奴が他にあると夫れから片づけてしまふ。例へば淺井朝倉も痛なら叡山も痛である場合、叡山の方は片づけ易いと見ると叡山の方をやつつけてしまふと云ふが如き其の例である。信長の遣り口を見ると各個撃破と云ふものは叩き潰し易い方から叩き潰すのが宜しいと云ふ兵理を示唆するものがある。又信長の淺井、朝倉に對する作戰でも足利義昭に對する作戰でも一回に片づけず、淺井朝倉の如きに對しては姉川で一叩き、叡山で一叩き、夫れから淺井内部の破壊工作及び最後の止め刺しと云ふやうに作戰を導き、足利義昭に對しても先づ諫め、次いで兵威を以て威嚇し最後に武力を以て追放すると云ふやうにして居る。例へば三枚の葉を蟲が喰ふに一枚宛喰ひ潰さずして、あちら喰ひ、こちら喰ひつつ、たふとう三枚の葉を喰つてしまつたと云ふやうな遣り方である。各個撃破にも斯様な遣り方があると云ふことを後世に教ふるものである。

次に聯盟を見ると、淺井朝倉の兩氏は精神的には仲が好いやうであるが作戰行動としては兩者殊に

朝倉義景が軟弱であり淺井長政も勇將のやうであるが、優柔なる父や老臣の制肘で其の行動が甚だ消極的である。黒幕の大黒柱たる武田信玄が不健康であり、足利義昭は其の將軍職と云ふ顯職を振り廻はすだけで實力なき小策士である。大阪石山本願寺や毛利氏も陣頭の立役者とならうとはしない。要するに足並みは揃はぬ。そして近畿方面は皆武田信玄をたよりにして居るのであつたが、此の信玄が病氣、卒去と不幸が続いた。信玄の生きて居る間は形だけでも聯盟と見て宜しいが、信玄が死んだ後は烏の集まりであつた。信長としても此の點は始末がし易かつたかも知れぬ。

併し此の三年間の信長の立場と云ふものは、觀方に依つては桶狭間戰當時と同様以上で、第二の桶狭間戰であり、若し信玄と戦ふならば、我が方も桶狭間戰時代よりは十數倍の力とはなつて居るもの。武田信玄の力は今川の比ではない。加ふるに西に毛利氏あり、近畿は反織同盟一色と云ふも過言でない狀況であるから、其の戰略、政略から見ても戰術上からも見ても桶狭間戰時代の如く唯九死一生斷の一字を以て決すると云ふ譯にも行かぬ狀勢であつた。元龜二年三年から天正元年四月信玄の死迄は實に信長大業成否の一大岐路であつたと思ふ。

筆者は元龜二年三年の頃を大觀すると信長の近畿地方の平定は行詰まつたとは考へられない。片つ端から叡山の如くやれないことはなかつたやうに見える。併し信長は叡山以外には荒療治は加へて居

ない。夫れは全く政略上からだと思ふ。策動の震源足利義昭などをひねることは朝飯前ではあるが、夫れをすると將軍弑逆と云ふ口實を反織聯盟に與へると云ふが如き其の例である。信長が叡山以外に武力の徹底的行使をしなかつたと云ふことは確かに考へた結果であると謂ふべきである。又戦略上から見て、信長が信玄西上迄に是が非でも浅井朝倉を片づけようとはせず、浅井氏の内部切り崩しの謀略を併用して湖東を安全にしつつ岐阜方面に於いて信玄を邀撃しようとしたのではなからうかと思ふ。浅井の部下が長政の膳甲斐なきを憤り、續々信長に降つたと正史は記してあるが、其の裏面には秀吉と其の名参謀の竹中重治などが居り、信長一流の謀略を之等智將にやらせた結果であつたとも考へられる（かうして浅井氏に對する兵力を極力減じ對信玄兵力を増加したとも考へる）。

信玄の西上が始まると信長は近畿湖東を部將に任せて岐阜に歸り、對信玄戦策に取りかかつた。此の事は當時の戦局としては當然の如くであるが、此の決戦を豫期するが故に信長は近畿や湖東で我方の消耗戦となるやうなことを爲さず、浅井氏の消耗を考へたと見れば深慮と云ふべしだ。

要するに第一次反織同盟との三年間の抗争は信長は戦略、政略をうまく調和し、武力と謀略と適切に併用して少しもあせらず、無理な力押しをせず處理した所に其の偉大性を見ることが出来る。そして其の努力の並みなみならぬ點もはつきり讀める。信玄の死と云ふ信長の爲には僥倖と云ふこともあ

るが、夫れは努力家で施策の適切なる信長に與へられた當然の天佑で、假令信玄と決戦しても勝星が未知數だと評し去ることは出来まい。筆者は寧ろ岐阜地方の決戦は信長には信玄の西上を破摧し得る確信はあつたと思ふ。謙信にも相當手を焼いた信玄としては、謙信と氏康とを加へ或は義經と頼朝を加へたやうな信長を對手とし、最も心服して居る尾濃地方の信長の根據地で戦ふのであるのと、家康は三方ヶ原で敗れたりとも尙ほ濱松に於いて危機を脱して居るのであるから、信玄も決して樂々とやれる戦ひではなく、三方ヶ原の家康並みには行くまいと觀察することは出来ると思ふ。

〔部分的觀察〕次に此の三年間に於ける反織聯盟に對する各時期に於ける重要作戦中、後世吾人に兵理を教へる點に就き申述べて見よう。

第一には浅井朝倉の再起に對する信長の作戦に就いてである。

信長は姉川の戦鬪に於いて浅井朝倉に一大打撃を與へたので、次いで横山城を攻陥して之に一部を配置し、更に佐和山城をも一部を以て攻圍して置いて、戦況戦果を朝廷に奏上し幕府に報告すべく上京し、終つて岐阜に歸つた。

信長が京都を去ると、一旦阿波國に遁れた三好黨が再び京都を狙ふ。大阪の本願寺がこれに策應する。比叡山の僧兵又反信長派に與みする。伊勢の北端長嶋の一向宗徒も之に策應する。將軍義昭の態

度は信長に對する謝恩心漸く薄らいで嫉妬から反抗と變色しかかつた點もある。そこで信長は元龜元年八月二十三日姉川戦後約二月兵三萬を率ゐて京都に入り肅正戦を開始した。當時三好黨其の他の叛徒は今の西部大阪に其の名の残る野田、福島の兩城を占據し、本願寺と協力して叛旗を翻して居るのて、信長は之を討伐に向ひ、途中出撃した石山本願寺僧兵を城内へ追ひ込み、進んで野田福島の兩城を圍んだ。所が、野田、福島の兩城も、さう簡單には攻略出来さうにもない。攻圍中九月下旬となつた。此の時に當つて飛報は信長の下に達した。夫れは淺井、朝倉が再起して兵三萬を以て我が湖西の守備部隊に構はず、一部を之に當て或は陥れ易きは陥れて將に京都に進入せんとすると云ふのである。専門的な戦史研究ならば信長の決心如何と云ふ問題を出す所である。それは兎に角として此の状況に於いて信長は、兵を班して淺井朝倉の聯合軍を撃つことにした。其の理由は假令當面の兩城を攻陥しても京都を敵手に委しては恥辱であると云ふのである。斯くて信長は一部を以て野田、福島、石山本願寺に當て、主力は其の攻圍を解き之を率ゐて京都に向つた。信長は此の撤退に當り怒々として敵を呑む大膽さを示して居る。信長の此の決心處置は適切であると評すべしだ。

さて信長が京都に入ると淺井朝倉の聯合軍は比叡山に據つた。そこで信長は坂本北方地區に兵力を集結した。湖東に配置してあつた我が一部も來會した。此の信長の戰略態勢は敵の退路背後連絡線を

遮斷するのである。野田福島大阪と淺井朝倉の軍を東西に控へた内線より脱して敵の主力の背後遮斷の外線的態勢に出たのである。非凡と評して宜しい。それから後は毎夜叡山に對し小夜襲を行ふとか其の他の企圖を以て聯合軍に挑戦し、決戦強要の態度を示したが聯合軍が應じない。更に信長は叡山の僧徒に對し「聯合軍と絶縁せよ、否らざれば中立を守れ、兩者其の一つを選ばば寺領も生命も安堵さすが、若し兩方共に承知しないのならば他日焼拂つて汝等を鑿殺してしまふであらう」と云ふ旨を通告した。脅したり、すかしたりと云ふ文句である。併し僧兵は此の通告を無視した。之が其の翌年有名な叡山の焼討となつた原因である。信長は僧兵への通告とともに聯合軍に對しても決戦を申込んだが、聯合軍は返答しない。秀吉や、丹羽長秀なども、今度こそは淺井朝倉勢を一人も残らず討滅したまへと進言し、信長も兩將の意氣を壯として之に同意し、愈々其の總攻撃を準備して居ると、聯合軍から和議を提出したが、今度は信長は聽かない。其の内に初冬の候となり、朝倉軍は退路が心配になつて來たので和を請ふたが、信長は許さない。そこで、聯合軍は義昭に頼み、義昭は叡旨迄も仰いで講和を勧めたので、信長も之に従ひ、講和したことは前記の通りである。

以上の淺井朝倉聯合軍の再起に對する作戰に於ける信長の戰略、政略及び之を通じての武力と謀略の併用は實に鮮やかなものがある。

第二には翌元龜二年九月の叡山焼討取行であるが此の事に就いて所見を述べよう。

信長の叡山焼討は古來史家の非難の的となつて居るが、信長は前年淺井朝倉勢が叡山に據つたときも叡山から聯合軍を引き卸さうとする努力が充分見えて居り、初めから叡山を無茶苦茶に焼討ちしようとするやうな意圖がなかつたが、信長が最初入京時以來、當時迄の僧兵の態度には愛想が盡き、平安朝末期頃以來の大瘤を除かふと決心したのであらう。此の決心を頼山陽が日本外史に名文を以て敘述して居るから叡山焼討の理由として之を掲げて置かう。

諸將に命じて火を縦ちて叡山を焚かしむ諸將皆色を失ふ。佐久間信盛等諫めて曰はく「桓武帝此寺を創建してより、此に幾千年王城の鎮たり、敢て犯す者なし、今にして之を滅す其れ之を如何」と信長曰はく「吾れ國賊を除くのみ、汝輩何ぞ我を沮むや、吾れ四海を定め王道の衰へたるを興さんと欲し、筋骨を勞し軀命を輕んじ、未だ曾て一日も安居せず、夫歳、攝津を略し兩城將に陥らんとす。長政義景兵を擧げて我が後を窺ふ、吾れ兩城を捨てて返る。之を山上に棲ましめて吾を殲さんとするなり、人を遣はして僧徒に諭すに禍福を陳説す。而れども彼れ竟に服せず、務めて兇徒を右けて以て王師を梗ぐ、之れ國賊に非ずや、今にして芟除を行はずんば乃ち患を天下に貽さん、且聞く、彼れ其の律を犯し、輩を茹ひ妾を蓄へ誦呪を束閣すと、安んぞ其の王城を

鎮むるに在らんや、圍みて之を燔き遺類あらしむる勿れ」と諸將乃ち服す。

右に抄記した信長の叡山焼討の理由を見れば實に堂々たるものがある。文は修飾があらうが、信長の眞意は充分に窺知することが出来る。叡山の僧兵は平安朝末期以來數百年の大瘤であることは有名である。尤も官軍にも與みしたことがあるが、夫れは眞の忠誠心からと見るべきものが甚だ少く、其の功罪を比ぶれば瘤的な存在であつた時代は相當永い。況んや戰國亂麻の時代の僧兵の行狀は信長の言ふ通りであつたと思ふ。信長が近畿の平定には此の瘤の切開を當然なさねばならぬと觀たことは正しい視方であると思ふ。只其の遣り口は餘りに徹底し過ぎたことは遺憾ではあるが、亂麻の世を正す爲には此の大荒療治も必要であつたとも思ふ。戰國時代、否、昔の内戦で、神社や佛閣は兵火に罹つたものが甚だ多く、而も夫れは過失の戦禍ではなく、故意の放火であり、然も故意に崇高な神社を焼いた賊徒が非難せられず、信長の此の叡山の焼討のみ問題とすることは常識的な國史の批判でなく、信長を惡將視する徳川時代の史家の流れの説であると評したい。

第三には足利義昭追放戦である。

將軍義昭は信玄、毛利氏などを説き信長を除かんと策した。信長は是れ迄義昭を奉じ其の失行を諫め、毫も他意なきを示したが、勿論實權は之を與へず、云はば崇め奉ると云ふやうなやり方であつた

から義昭も不平であつたものと思ふ。義昭の陰謀を知つた後でも、信長は義昭との間を調整しようと思つたが、徒勞であつたのみならず、天正元年二月義昭は愈々舉兵した。夫れは恐らくは信玄の近き西上と策應する爲であつただらう。所が直ちに信長から抑へつけられてしまつた。其の経過を略述すると義昭は各一部を以て近江の石山及び堅田に據らしめ、主力を以て二條城及び横島（宇治の西北流川河岸）の城に據つた。信長は部將をして石山及び堅田を攻略せしめ次いで自ら兵を率ゐて上京し、一方兵威を示すと共に他方、義昭との和議を策したが、義昭は聽かない。依つて愈々兵力を以て二條城に義昭を圍んだので、義昭も遂に和議を申込んだ。信長は義昭の和議は一時の方便であることは之を看破したが、其の場は義昭の態度に感謝の意を表し兵を反して岐阜に歸つた。時に四月で信玄は此の月の十二日に死んだ。義昭は其の後七月横島城に據つて又舉兵したので信長は遂に勘忍袋の緒が切れ、之を攻めて追放し、茲に室町幕府は名實共に消失し、信長は名實共に中央の實權を握り、更に近畿の肅正を行つた。

義昭追放に至る迄は信長も出来るだけ蟲を抑へたことが分る。武力を以てすれば既に早く一撃直ちに打倒が出来るところをやはり將軍職と云ふ義昭の地位を重んじたのと、又戦ひの名を立てる爲の政策をよく考へた所など用意周到である。要するに對義昭戦に於いては戦ひの名を立てると云ふ點に於いて

後世に示唆を貽すもので、家康が豊臣氏を滅ぼしたのに比較すれば、信長の遣り口は筋が正しく立つて居ると思ふ。殊に足利幕府の如きは一舉打倒して差支へなき存在たるに於いて然りである。

何れの時代に於いても義昭の如き小策士が其の門地を利用して策動すると碌なことはない。只世を亂る計りであることを看取せねばならぬ。

第四には淺井朝倉の最後の撃滅戦に就いてである。

信玄死し、義昭を追放したので、信長は淺井朝倉に對する止めを刺す時期が到來した譯である。

信長は足利義昭を追放して八月四日（天正元年）岐阜に歸つた。當時秀吉を湖北に止めて占領地地方を管理せしめ、且つ淺井朝倉の監視や淺井の内部切り崩し等を策させて居たが、八日秀吉から淺井の部將阿閉貞秀が降つたと謂ふ知らせがあつたので、信長は即夜兵を率ゐて出動、十日小谷城北方の山田山に陣した。蓋し阿閉貞秀の織田方への降服は容易ならざる出来事であつたので、長政から朝倉義景へ通報し、義景亦出動南下すると見たからだらう。

果して義景は兵二萬を率ゐて南下し來り、八月十日今日の木ノ下附近に到着した。

信長は豫て來、色々と謀略を施して居たのであらうと思ふが、義景の陣中に内應者が出た。そこで八月十二日風雨に乗じて朝倉軍前進據點を急襲奪取し、其の翌日敵陣を望見し朝倉軍は其の夜退却

するものと判断して諸將に追撃準備を命じたが、諸將は表面は畏り乍ら、心中では左様なことはあるまいと考へて居た。所が朝倉軍では軍中の動搖は益々著しくなつたので、義景は十三日夜暗に乗じ柳ヶ瀬附近に後退するに決し、各陣屋に火を放ち退却を開始した。信長は之を見て敵の退却と看破し直ちに全力を擧げて進撃を命じ、自ら陣頭に立つて前進を始めた。諸將は油断して居り皆何れも信長より後れたので、信長は甚だ機嫌が悪い。所が前田利家と佐々成政とが先行して居たので、やつと機嫌は直つたと云ふ史話もある程急進發を爲さしめた。

斯くて朝倉軍を急追して近江と越前との國境刀根峠に差し掛つたが、此の地は三叉點であり、敵が敦賀方面に退却したか或は直ちに府中(武生)方面に退却したか分らない。追撃隊から何れに追撃するやを伺ふと、信長は敦賀方面へ向へと命じた。事實朝倉軍の主力は敦賀のはうへ退却したのであつた。明察と云ふべしだ。

信長は追撃を始めてから約十一里途中十箇の城塞を抜き、敵の首級三千八百を討取り、十四日敦賀城を占領した。實に神速其のものである。

朝倉軍は敦賀にも占據し得ず、續いて一乗谷(武生の東北約五里)の本據を指して退却した。信長は敦賀に於いて一兩日兵力を休養した後朝倉の本據を覆滅すべく進發した。十八日府中(今の

武生)に進み、二十日義景を賢正寺(一乗谷の東方約五里)に圍んでしまつた。

義景は何故一乗谷に入らなかつたのだらう。夫れは、城中、城下士民皆逃亡して城に據ることも出来ぬ。所在をうろつき最後に行つたのが賢正寺であつた。茲で部將の景鏡が義景に自決を迫り、二十日其の首を携へて信長に降つた(一説には景鏡に討たれたとも云ふ)。

信長は越前の措置を終り二十六日から淺井の小谷城攻撃を開始し、二十七日淺井久政(長政の父)が自殺した。信長は長政に對し助命するから開城して降れと諄々と諭したが、長政は遂に妻子を信長の許に遣はし自害した。

之で淺井朝倉の兩家が亡んでしまつた。

此の作戦は、實に信長の用兵の神速を物語る一例であり、特に此の戦例の貴い所は敵の隨意退却に乗じて之を潰滅せしめた點である。敵の隨意退却に乗ぜよと云ふ兵理は今日と雖も現存して居るのであるが、斯かる鮮やかな戦例は古來餘りない。

信長の戦機の見破は戦略的にも戦術的にも極めて明敏であることは何時も乍ら頭が下る。此の作戦は三年餘り抗争後最後の二十日を以て片づいた。長期戦の結末は皆之である。

信長は淺井氏を亡ぼすに、いきなり堅城にぶつからず、武力、謀略其の他の三年掛りの工作で小谷

城の羽翼を漸次そぎ、遂に小谷城を丸裸にして只二日で攻め陥した。

以上第一次反織聯盟に對する三年に亙る信長の戦迹を見れば、實に用兵の非凡卓越古今に稀れなるものがある。各個撃破の名人と云へば直ぐ奈翁を指すが、信長の各個撃破の作戦は兵理に於いては奈翁戦史の夫れより示唆に富むものが多く、我が民族の矜持を感ずること甚だ深いものがある。桶狭間戦、姉川戦と共に此の作戦は後世の範にして然も卓越非凡の戦迹を貽して居る。

信長が朝倉、淺井と抗爭間種々の美談佳話があるが本書の目的でない故之を略するが、淺井、朝倉は何故に亡んだかと云ふことは、戦史以外一般の史學として後述吾人に誠訓の資となるものが甚だ多いやうに思ふ。以上述べたところでも此の點を認識し得ると考へる故、茲に之以上述べないこととする。

第十一章 長篠の戦 (武田氏との決戦)

〔信玄死後の武田氏と織徳同盟との關係〕 第一次反織聯盟の破綻後、次章に述ぶる毛利上杉を中心とする第二次反織聯盟成立迄に於ける最も重大なる戦ひは、天正三年五月に於ける長篠の戦で、武田が滅亡の前夜の破目となつてしまつた戦ひである。

信玄臨終の際勝頼への遺言なりとして名將言行録に「吾死するの後妄りに兵を動かすこと勿れ唯國政を修め、寇來らば之を禦ぎ寇去らば之を守れ、賞罰の行はること三年ならば則ち四隣戦はずして自屈せん、且つ上杉謙信は義人なり天下未だ其の比を見ず一旦國を以て之に託する時は泰山よりも安し汝我が言を用ひれば吾復何をか患へん」と記されて居る。此の遺言を嗣子勝頼が後生大事に遵守したならば、長篠役も起らなかつたのであつたが、勝頼は血氣の勇將ではあつたが、其の思慮は淺薄、跡部、長坂など云ふ側近の奸物を信じ、信玄の養つた老名臣の意見を疎んじたのが抑々の間違ひであつた。武田の軍隊は信玄の訓練に依り當代屈指の精銳であり、家中には名部將が肩を列べて居ると云ふ有様であるから、大家の坊ちやんの勝頼には何か一仕事したいと云ふ氣にもなつたかと思ふが、

之が抑々織徳同盟との抗争となつた感情である。何か一仕事をやらうと云ふ氣になるのは、信玄に仕へた諸臣に我が腕を見せて之を威服ささうと云ふやうな氣分も手傳つて居たか、夫れとも大家の坊ちやん一流の我儘からか、其の邊は知るに由もないが、まあ忌憚なく云へば父の遺言を守らない不孝且つ不肖の子たることは結果から見ても餘り辯護の餘地はなささうだ。——勝頼は凡庸でないと云ふ史家もあるが——。

長篠の戦はかうした勝頼の性質と感情とが其の生起原因の一つである。今一つは家康の東方經略である。家康は信玄の強大を知つて居るから、信玄在世中は信玄と決戦を避ける態度を持続したが、遂に三方ヶ原の決戦を餘儀なくせられて惨敗した。尤も三方ヶ原の決戦は家康は坐して自己の領土通過を見て居れないと云ふ自衛獨立心、面目、信長との同盟の誼みから利害存亡を超越した決戦であつたと見るは普通であるが、深謀遠慮明察の家康の事であり、勝敗の歸趨が見透せず、只運を天に任すのだとあつさり考へ得ない。何か心の奥底に期する所があつての事ではなからうかと考へる向もあらうが、其の邊の事は知るに由もない。併し東方經略は家康の不動の方針であり、武田信玄なき後は、三方ヶ原で失つた戦力を回復補充しつつ戦政兩略を以て領域を擴充して行かふとするのは當然で、之が又勝頼の山氣と衝突するのは自然である。

又信長と武田との關係は信玄在世末期、信玄は信長の五逆を、信長は信玄の七惡を並べて宣戰を布告して以來平和は克服しては居らず、反織聯盟との關係も表面内面とも聊か有耶無耶の姿となつて居たやうであるが、織徳同盟が存する限り勝頼は此の同盟との和戦を決せねばならぬ破目に在つた。信玄は死に臨み、やつと謙信の義人なる旨を告白し、謙信と握手することを遺言したのも、此の織徳同盟があるからであらう。勝頼は織徳同盟離間の外交謀略をめぐらさず、武力一本で此の同盟を向ふに廻はした所に破滅の一因が潜在する。高坂昌信（武田の四臣の一人で深謀遠慮を以て聞えた人）が勝頼を諫めた言葉の中にも、織徳同盟と和して北條氏を討つを賢明だと説いて居るが、勝頼は勿論此の諫を用ひなかつた。

天正元年四月信玄の死んだ當座は勝頼も兵を動かさなかつたが、家康であつて見れば、其の三、四月には信玄の再西上の爲に侵略を受けて居るのだから、武田軍撤退に伴ひ失地回復を策するのは當然であり、家康は天正元年四月長篠を攻めたのは失地であつたか否かは別として、武田軍の撤退に伴ふて起るべき當然的な現象である。勝頼の方から見れば之が兵を動かすの口實となるのも彼の性格や其の山氣氣分上是非はあるまい。

天正二年は信長に取つては慰勞休暇的な年であつた。過去三年反織聯盟を破り先づ京畿と其の四隣が安泰となつた年を迎へたからである。信長は此の年、諸將を岐阜城に集めて大々的な戦勝祝賀會をやつたのは、かうした氣持ちからであつただらう。所が天正二年二月には既に勝頼の爲に美濃及び参河と信濃との接壤地方を荒されるやうな状況となつた。併し信長は大體に於いて此の方面は時節が来る迄、自重して守勢を取つた形である。或は信長は武田軍の眞價が分る迄決戦を避けたとも考へられる。又京都に朝覲して政務を見る必要もあり、旁々攻勢を以て事を決する時期でないと思へて居つたとも思はれる。家康は勝頼から遠江の北部を荒される度に信長に來援を求めて居るが、倭敏其のもの信長に似合はず家康救援が敏活でなく機を失して居る。然も家康の機嫌を損ねないやう物的援助を家康に與へて居る。何か意中に藏するものがあるかのやうに見える。

〔信玄死後に於ける信長の對武田策〕 以上敘述した所から、筆者は、信玄死後に於ける信長の武田氏に對する策案は、

- (1) 適當な時機が来る迄は決戦を避けよう。
 (2) 武田氏とは未だ眞劍に交戦したことはない。只三方ヶ原へ増援を送つて此の増援隊が戦つたが、信長自ら手合はせをしたことはない。故に今より充分に武田氏の戦力、戦法、其の他の敵情

觀察を行ひ、我が打つべき手を考案する必要がある。

- (3) 此の間秘密戦を以て武田を衰弱させてやらう。反對に我が軍を訓練して益々精銳ならしめ、一面、軍隊を休養して銳氣を養はしめよう。

(4) これと併行して中央政務を見、施政の適切を期せねばならぬ。
 と云ふやうな點にあつたと考察せられる。果して然らば、流石に信長だと感心せざるを得ない。

〔長篠の戦の動機〕 武田氏と織徳同盟とは右のやうな關係にあつたが、斯様な關係は遂に長篠の攻守城を繞つて大爆發した譯である。

元來長篠城は豊川に沿ふ信州と参河との交通路上豊川の上流で大野川と澗川と云ふ二つの川の合流點にあり、信州から参河へ出る爲にも、参河から信州へ入る爲にも共に重要な一戦略據點である。初め今川氏の部將が築き其の後武田徳川の兩氏の争奪點となり、元龜年間には武田氏に屬したが、天正元年六月を以て家康は之を取り返して以來徳川の屬城で、奥平信昌が選ばれて其の守將となり、武田に備へて居たが、天正三年五月初旬、武田勝頼が武田の精銳約一萬五千を率ゐて之を攻圍したので、家康は信長に依頼し同盟軍の力を以て之が解圍の爲進攻し、五月二十一日、我が戦史上に於いても亦外國の戦史上に於いても一寸例がない戦圍が信長に依り計畫せられ、實施せられたのである。其の特

異性に就いては、次第に敘述して行く所に依り鮮明するであらう。

〔戦闘経過の概要〕 天正三年五月、武田勝頼は甲信上三州の精銳約一萬五千を率ゐて南下し一部を以て長篠城を圍み、主力を以て一旦吉田城（現在の豊橋）方面に進し、其の先頭部隊は家康と小戦を交へたが、勝頼は兵を班して五月八日全力を以て長篠城の攻撃を開始し、十四日迄猛攻を行つたが、城將奥平信昌は僅かに五百餘人の兵力を以て奮戦克く防ぎ、甲軍も亦力攻を止め長圍に決し、嚴重周密其のもの如く攻圍した。例へば、城外には柵を環らし、大野川とか瀧川の水中には網を張り、網の端には鈴を附し城兵が水中を潜つて出た場合直ちに分るやうにし、又城の四周には綺麗に砂を敷き詰め、城兵が出たならば直ぐ足跡で分ると云ふやうなことを迄してあつたと云ふことである。

これより先信昌は急を家康に報じて居たが、まだ援兵が到達しない。籠城の常として糧秣の缺乏は氣懸りになる。そこで急を更に家康に報告せねばならぬ。其の密使たることを出願して其の選に當つたのは有名な鳥居強右衛門勝商である。彼の脱出と歸來時の義烈は今尙ほ情夫をして起たしむるものがあるが、周知の史話であり之を詳述することは本書の目的でないから敢て茲に載せない。

家康は武田との戦況逼迫するに伴ひ、五月十日急使を馳せて援を信長に請ひ、十一日にも亦督促した。當時の様子を傳へた文獻に、信長は急援を逡巡したの對し、家康は強硬に増援を要求し、若し

増援を拒むとか、微温的な増援ならば、寧ろ此の際、武田と和して矛を逆にして尾張に向つて進攻すると脅迫的な強腰を以て信長を動かしたとか、又信長の逡巡に對し佐久間信盛が謀略を以て勝頼を致すべき手がある、之を用ひるならば必勝疑ひない故増援可然旨進言したので、信長は意を決して出動したといふ説があるが、共に俄かに信じ又は無下に否定も出来ない。

信長は家康の要求に應じ、十三日岐阜を發ち、十四日岡崎に到着した。率ゐる兵力は約三萬餘人であつた。翌日の十五日夜には鳥居勝商からの報告を得たので、信長は家康と協議して即夜進軍を命じた。併し其の行進速度は甚だ遅い。長篠西方設樂に著いたのは十八日である。一説に依れば信長は武田軍を怖れて遲疑して居るかの如く見せかけて、勝頼をして同盟軍を侮り攻撃して來させやうとする術策からだ云ふが、或はさうであつたかも知れない。

信長は十八日設樂原（長篠城を距つる西方約一里）に到着し茲に兵力を集結した。家康も信長に先發して同日設樂原に兵力を集結した。其の兵力約八千である。

故に同盟軍の兵力は合計三萬八千で、外に五百ではあるが長篠城の守兵が居る。武田軍は總計一萬五千、内、長篠城を監視しつつ同盟軍と戦ふものとすれば同盟軍は武田軍に比し二倍半の優勢を以て居るのである。

斯様な優勢を持ち乍ら、信長は攻勢防禦と云ふ手に出た。其の理由は精銳なる武田軍の騎兵戦に對し遭遇戦的な攻撃が出来ない。先づ武田の騎兵の襲撃を破摧した後攻勢を採らうとするのである。

其の戦闘配置を略述すると全軍の銃手(約一萬人)より三千人を選抜し佐々成政、前田利家等をして其の隊長たらしめ、陣地を連子川(以下の地名は挿圖参照)右岸の高地線に選定し、陣地前には柵を立てて障礙物を構築し、其の内方陣地に小銃手を配置し、武田軍が柵を破つて突入せんとする直前に射すくめてしまはふと云ふのである。又、柵の内三十間乃至五十間毎に攻勢移轉の際は開いて出撃が出来ぬやうな出撃口を準備した。そして信長は銃隊長に訓令し「勝頼は自己の勇氣と、軍隊の精銳を恃み、無謀な攻撃を行ふであらう。そして其の騎兵は柵側まで突進して来て柵を破つて入らうとするのだらう。彼が愈々柵際に通つたとき千挺宛代るべく一齊射撃を爲さしめよ」と堅く申渡した。

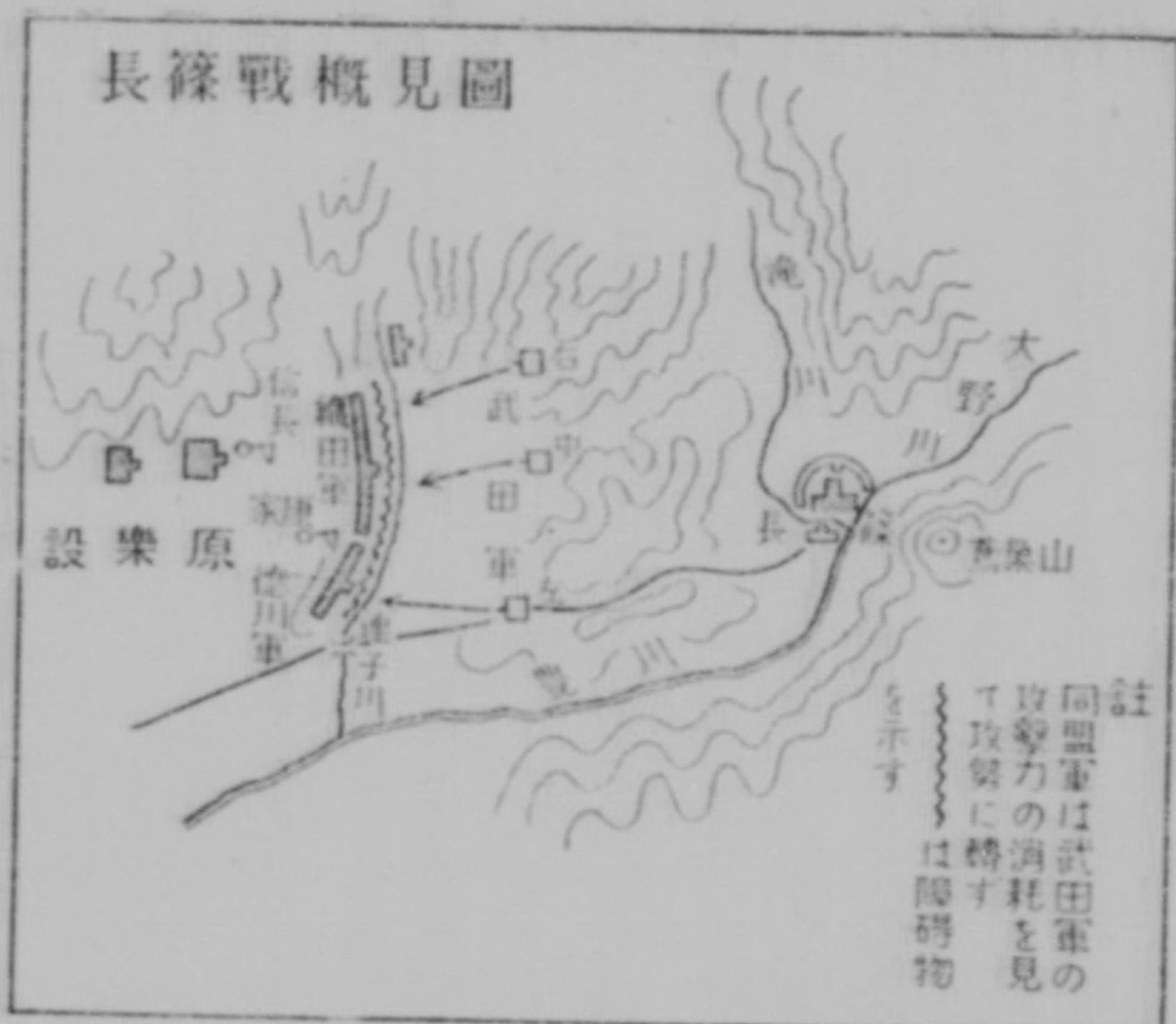
此の配備の爲信長は岐阜出發時、各隊に命じて柵の材料と繩とを携行せしめたと云ふ説もある。何れにしても此の攻勢防禦方策は、信長が設樂原に来てからとか或は行軍途中などに考案したのではなく、岐阜出發時には、ちゃんと腹案がしてあつた。否、武田の騎兵隊を如何にして粉碎するかと云ふ戦法は信長としては信玄の在世中から考へて居たと思ふ。信長は當時軍の裝備を爲すに他名將に比し火力主義を重視したと思ひ比べて決して妄斷ではあるまい。

二十日になると武田軍は同盟軍に對し攻撃して来る氣配が漸次に明瞭になつて来た。信長は家康以下諸將を其の本營に會して交戦に就いて軍議を開いた。

一方武田勢はどうかと云ふに、五月十九日勝頼は諸將を集めて同盟軍に對する戦策を開示した。夫れは一部を以て長篠城を監視せしめ主力を以て同盟軍に對して攻勢をとり決戦せんとするのである。之に對して馬場信房、内藤昌豊、山縣昌景等武田四臣の内の三臣や小山田信茂、原昌胤等は「織徳同盟軍が全力を擧げ非常な決意を以て出動して來、其の兵力も我に三倍する有様であるから此の際は決戦を避けて歸る方が宜しい」と諫めたが、勝頼の嬖臣で奸物であつた跡部長坂等の徒は「新羅三郎義光公以來、未だ曾て敵を見て之を避けたことはないに拘らず、今戦はやして軍を班し、敵に背の後を見せるなどと言ふことは祖先を辱かしむるものである」と主張する。そこで馬場信房は「然らば先づ速かに城を陥れて後、退却すれば宜しい。思ふに城中の小銃數は五百位である、假令第一の射撃が悉く命中したとするも我が損害五百、第二發の亂射に又五百を失つても前後一千人の損害を覺悟せば城を屠り我が武威をも揚ぐる事が出来るではないか」と之に應酬すると、跡部は「大敵を前に控へ攻城に千人を失ふなんて實に馬鹿な話である」と信房の説をけなす。信房は「退却は厭と云ふならば、城を屠つたならば、勝頼公や御身内の方々は長篠城に居られ山縣や内藤や吾々老臣は進んで敵と對峙

しよう、然るときは我は糧道の心配はないが敵はその策源が近畿迄延びて居るから補給に困り撤退することは疑ひない、之が良策ではないか」と更に第三案を提議したが、跡部は「信長ともあらう者は何んで、おめく軍を班すであらうぞ、彼若し急に來つて我を攻めたならば如何なさるか」と之にも反対する。依つて信房は「其の時は殊死決戦する計りだ」と決意を示したが、跡部は之を冷笑し乍ら「已むを得ずして戦ふのと我より進んで戦ふのと戦ひは一つではないか、寧ろ先んじて人を制するに如かずではないか」と反駁した。最前から此の議論を聞いて居た勝頼は、茲に至つて跡部の説を採用して之に決定した。勝頼は當面の實情に適合しない唯口先だけ勇ましい観念的、抽象的な兵理を以て正しい當面の實情に適合した戦理を滅却して惨敗したのであつた。空漠たる観念論の無價値を物語る史料の一つである。

武田軍は二十一日拂曉から右翼隊、中央隊、左翼隊（各隊各三千人）を以て果敢なる攻撃を斷行したが、全く信長の衛中に陥り皆柵前に於いて覺れる。内藤、山縣其の他信玄以來の老臣始め名部將は殆ど戦死し、武田軍の攻撃力は全く消耗した。此の機を看破した信長は直ちに全線に攻勢移轉を命令した。各隊は勇躍陣地から跳び出して武田軍に突きかかった。武田軍は惨敗、約一萬の首を同盟軍に渡したと云ふことである。同盟軍の損害も亦約六千と云ふから相當の激戦であつたことは分る。此の



戦ひは六月廿一日（太陽曆七月七日）午前五時頃から午後三時頃迄続いたと云ふことである。

同盟軍は文字通りの大勝利を得て武田氏を滅亡の前夜のな状態へ追ひ込んでしまった。當時家康、秀吉、利家等が更に大追撃を遂行したが信長は之を用ひず、兵を收めて岐阜に歸つた。追撃を止めた理由や批判は後に敘述する。

以上の外廣く長祿の戦として武田、織田、徳川の三將始め、其の麾下の部將に就いて其の人物や作戦手腕、戦況の細部などを見れば實に後世吾人の至寶的な教訓となるものや或は嚴正なる戒めとなるものは尠しとしない。

以上概説した内にも所在に其の片鱗を発見すると思ふが、元々、此の戦史は信長統帥の戦史であるから、信長の統帥に直接の関係ないことは省くと云ふ執筆の方針に則り、戦況に就いては先づ之に止め必要あらば評論と同時に述べることにし、以下評論に移らう。

〔評論〕 武田信玄の死後に於ける信長の對武田氏策は前敘の通りと考察するも、敢て妄斷とは思はない。茲は信長の偉い所で戦勝の餘威に乗じて盲目的なことはしない。口には言はねど其の爲す所に依り戦勝に酔ひ驕らざる如く方策其のものを立てて之を下に示して居る。口に驕るなとか酔ふなとか云つた所で施策其のものや指導其のものが言ふ所と一致しないと成果は擧がらない。信長は長篠戦前迄は何時でも武田勢に對する作戦は退避的であり、退避的である。全く近畿地方や夫れ以前の果敢な作戦と違つて居る。之が部下にどう誓いたかは別として、戦勝に酔ひ驕らぬと云ふ遣り口と、敵に依つて打つ手を考へると云ふ遣り口とは、はつきり讀めると思ふ。

さて長篠の戦に於ける信長の遣り口を見ると信長は實に底知れぬ作戦智能と計り難き偉大なる手腕とを有することが、更に判明するやうに思ふ。以下之等の點を敘述して以て評論に代へようと思ふ。

第一には家康から増援を要求せられた場合即座に應諾しなかつたと云ふ點である。夫れに就き信長の意中を忖度して見ると、救援には行かねばならぬが、如何にすれば勝つか、或は一步下つて、今、

織徳同盟と武田と決戦する時機かどうかと云ふ點を深く考へたに相違ないと思ふ。家康が信長の第一回越前進入が失敗して撤退する際から姉川に於ける奮戦、殊に三方ヶ原に於ける犠牲的な行動など信長に與へた助力の莫大なるものがあるが、信長は之を無視して自分の都合本位に物を考へると云ふやうなことは斷じてないと思ふ。左様な氣分があるならば、誰が何と云はふとも増援は申譯的に止めるに違ひがない。所が信長が首將格となり全力を擧げて出動して居る點から見ると、如何に信長でも即座に安請合ひは出来ないのは自然である。信長には信玄死後今日迄二年間武田の軍情は能く分つて居たと思ふ。信長としては武田に對する對抗手段を如何にすべきやの方針や戦法などを考へて居ない筈はない。筆者が思ふのは、信長は若し五月十日の家康の使者に對し「よしッ直ぐ行く」と即答しなかつたとすれば、夫れは長篠の戦局に對し如何にすれば日頃考へて居た手を打てるかと云ふべき思案がつく迄返答保留と云つた態度であつたと思ふ。又一面には麾下の將士で武田勢の精強なのに怖れて居るものもあつたことは事實であり、信玄死後今日迄に於ける信長の決戦回避的な態度は或は部下に對して武田軍恐怖の心を助長して居たこととは限らない。恰當の時機迄武田との決戦を避けて今日に及んだ信長は、此の戦局は果して武田との決戦時機として恰當か否かと云ふことを考へたでもあらう。果斷のやうにして思慮周密な信長としては此の邊のことを考へたに相違ない。所が心に成算が

出来、軍議の結果將士の心も讀め、家康の気持ちも分つて居るので初めて應援を承諾したのだらう。五月十日は家康の第一の使者が来た日、翌十一日は家康の第二の使者が来た日で十三日は信長の出發であるから、信長は應援を遅疑したと云ふことは外觀であり事實は必要を感知して準備し、出發したと云ふ段取りから見れば決して遅いとは云へぬ。何時もの信長よりは遅いかも知れぬが、夫れでも凡將のやるより遙かに速かなるものがあると思ふ。

第二には稀代の名將が敵に優る二倍半の兵力を以て攻勢防禦を爲し大勝を博した點である。古來凡將が敵に優る兵力を以て防禦して負けるのは常である。手近な所では日露戦争に於ける露軍が夫れであり、滿洲事變此の方の我等の敵も多くは優勢を擁して防禦して負けて居る。信長の如き稀代の名將が優勢も優勢二倍半と云ふ優勢で防禦して大勝ちに勝つた。そんな戦例は他に有るだらうか。執筆し乍ら考へたが一寸類似の例はない。或は曰はん、優勢な兵力を以て攻勢防禦を爲し勝つたと云ふ戦例を有するからとて、夫れが何んで我等民族の矜持であらう。然らば、長篠役の信長の作戰の價値は根本から覆へるではないかと。筆者之に對し左にあらすと答へたい。筆者は他の角度から見て世界に稀れなる戦例として民族的な矜持を持つものである。以下其の譯を申さう。

信長は曾て敵に比し十分一強の兵力を以て果敢なる桶狭間の奇襲をやつたのと比較すると、火と水との相違がある。全く百八十度の差異がある。斯かる戦法に出た信長の眞意を忖度すると、信長の意中は兵數の多寡に依る攻防の原則や、面目などはどうでもよい。要は敵に優る戦法を以て大勝利を得ればよいと云ふ大乘觀に立つて居るとも思ふ點がある。又一面に於いては信長は優勢とか劣勢とか云ふことを單に兵力量を以て見ず、兵力の質を多分に加味して優劣を判定して居ると思ふ。信長は量では優勢でも質では及ばないと云ふ所から攻勢防禦と出たのか、夫れも考へたであらうが、信長の眞意は火力裝備の威力を以て、信玄以來精銳を以て誇る武田の騎兵を粉碎しようとしたのである。消極的な考へではなく積極的な考へからである。尤も遭遇的な運動戦では武田の騎兵に對しては勝目はないと云ふ考へ方もあつたに相違はないが、武田の騎兵を怖れての防禦ではなく、武田の騎兵を粉碎せん爲の防禦であつた點に於いて偉なる所がある。我が優越點を以て假令精銳とは云へ必ず有るべき敵の弱點に乗じよう、強敵の弱點を狙ふとする點に於いて企及し得ざる大非凡性がある。筆者は此の點に於いて信長の長篠戦の眞價の大なる一つとしたいのである。信長が攻勢防禦と決定したものの敵がどう攻撃して来るか、又攻撃して来るか来ないかと云ふやうな點に就き、心密かに多少の悩みがあつたやうに思ふ。夫れかあらぬか、二十日信長は武田軍の主力が攻撃準備の爲、我が方に向ひ展開して来るのを見て「占めた」と云ふ氣持ちになつたやうである。參謀本部の日本戦史には「二十日信長東

軍ノ我軍圍ニ中リ進ミ來ルヲ見テ家康以下諸將士ヲ其營ニ會シ軍議ス會ニ織田ノ斥候歸リ報シテ曰ク
甲軍部伍整肅ナリ容易ニ戦ヒ難シト、聞ク者皆色ヲ變ス徳川ノ士酒井忠次曰ク某昨日間諜ヲ縱チ敵軍
ヲ偵察セシメシニ其兵數極テ寡軍ナリ戦必ス勝タント信長大ニ喜テ曰ク怯者ノ眼中草木モ亦兵ナリ獨
リ左衛門（註、忠次ノコト）然ラスト遂ニ酒ヲ命シ諸將士ヲ饗ストある。以て當時の信長の心持は
は讀めると思ふ。

信長の目には又敵の強弱ははつきり映つて居る。「怯者ノ眼中草木モ亦兵ナリ」と云つた信長の言
を吾人が常に記憶せねばならぬ。大東亞戦下英米の強點のみが眼に映り其の弱點が分らぬやうな連中
は、右、抄揚した斥候や之が報告を聞いて色を變じた手合と撰ぶ所はない。敵の弱點を看破し之に乗
ずる手を考案使用すべしだ。

第三には、野戦陣地に據り火力を以て敵を壓倒し、其の攻撃の頓挫せるに乗じて攻勢に轉じ敵を撃
滅すると云ふ攻勢防禦の方式は、信長を以て創始者と見て宜しからう。尤も城に據り敵の攻撃を頓挫
せしめた後、攻勢に轉じた例は大楠公の赤阪城に於ける防禦に於いて之を見、又戦國時代でも名將が
屢々用ひて奏效した例があるが、野戦陣地で斯く攻勢防禦をやつたのは信長だけと云つて宜しい。攻
勢防禦を古戦史に求むる人は、奈翁のアウステルリッツとか、ワグラムのカール太公とか、ワーテル

ローのウエリントンとブリュッヘル合作の攻勢防禦を御手本とするが、夫れよりも二百五十年も前に
信長がちゃんと模範的に創始して居るのである。然も其の何れもが信長の如く強敵の弱點を衝くと云
ふ意思があつての防禦なりや否や、疑問である。

第四には信長の必勝の信念である。信長が岐阜で家康から増援の要求に接した時は必ず勝てるかど
うかと多少考へたとも思ふが、愈々必勝の信念が湧いて救援を承諾したと思ふ。信長は家康に向ひ、
「貴殿は年來の仇敵と思はれ餘り勇敢に戦はれて討死などせられては此の戦ひに勝つても何にもなら
ない。今度の合戦では佛になつた御心算りで何も御構ひにならぬやうせられたい。拙者は武田軍を網
にかかつた小鳥をひねるやうにやつつけて見せる」と云つて居る。信長と云ふ人はかう云ふ點は放膽
明朗に言ひ放つが、ほらではない、事實は其の通りであつた。これ位必勝の信念がないといけないと
思ふ。

第五には謀略の併用である。之には種々の史話がある。前記二十日の軍議の席上、酒井忠次が、信
長に向ひ、鷲巢山を夜襲を以て奪取する必要を力強く進言すると、信長は頭から其の愚策なることを
こき卸して、てんで受入れない。忠次も黙つてしまつた。それから會議が終つた後、信長は、そつと
忠次を別の所に呼び、軍議の席上に於ける非禮は防諜上止むを得ざりしことを釋明して鷲巢山を夜襲

奪取するの名策なることを禮讚共鳴し、忠次を以て其の夜襲隊長とした。此の事は本當の史實であることは些かの疑ひもない所であると思ふ。

信長は豊川沿岸に到着してから現在の新城附近までの行軍速度の遅々たりしことは日程で察することも出来る。武田軍の方では信長が遠巡して居るやうに見えたか否やは判然とはしないが、信長は何とかして武田軍が、我が小銃陣地へ突進して来るやう仕向けたことは事實と思ふ。

次に初め信長が家康より救援の要請があつた際遠巡し、諸將を會して意見を徴した所佐久間信盛は一つの謀略を進言したと云ふ説に就いてである。夫れは信盛は伴つて武田家に内應する如く見せかけ跡部長坂等の如き勝頼の嬖臣に取り入り、若し勝頼が果敢に攻撃すれば信長は一溜りもなく敗れるから攻撃するがよいと云へば必ず武田方は攻撃して来る。此の工作をすることを許されたいと云つたので、信長は大いに善しとし、決心が定まつて出動した。一方、信盛は早速に勝頼が信長の火力正面に突進するやう跡部や長坂を通じて手を廻はしたと云ふのであるが、此の説は作り事で眞實ではないと云ふ説が多い。日數から云へば、夫れだけ工作する日數があつたか無かつたか、即ち僅かに一週間の間に斯様なうまい工作が出来るかどうかと云ふ點に疑ひはあるだらう。併し、織田家と武田家と修好し出したのは永祿の中年頃で爾來五、六年以上の修好があつたから、信盛などは案外手筈があつたか

も知れぬ。信長も信玄も謀略には長じて居るからうまく反間を用ひたかも分らぬ。信玄卒するの後、信長は二ヶ年の間に相當の秘密戦を武田家に指向して居ると見るのは妄斷ではあるまい。信長は家康救援に考へ込んだと云ふのも秘密戦の効果の現はれ如何と云ふことを考慮に加へたことであらうとも思はれる。勝頼が如何に我儘だとは云へ、跡部長坂の言のみに耳を藉し多くの名宿將の意を用ひなかつたのは、跡部長坂を信じ切つたのか、夫れとも自分も必勝無疑と何人かから信念づけられて居た結果であると思ふ。此の信念つけた裏面に信盛の魔手が入つた爲と云ふことも尤もらしく云へば云へるのであるが、兎に角、長篠戦前には何等かの謀略を併用してあつたことは否定し難いやうに思ふ。さもない限り長篠の武田軍軍議の席上の勝頼の態度はあのやうではなかつたとも思ふ。

第六には此の戦闘は火器と白兵、騎兵と歩兵との優劣、新兵器と舊兵器との威力比較等編制裝備の戦闘に及ぼす影響を示唆すると共に、信長の進歩主義、革新主義なる點に於いて他の企及し得ざる點があるではないかと云へる。又三千挺の銃を三交代に千挺宛一齊射撃をさせたと云ふ點は千挺の單發の火繩銃を三連發銃にし使用した譯で、信長は何處迄も獨創的な點に於いて偉いと思ふ。

第七には高巢山の夜襲であるが、現地に行くとの山を重い甲冑でよく夜襲したものだと思ふことを感ずる。實は甲冑を脱いで背負つて行つたさうである。夜襲は日本民族獨特の傳統戦法の一つであ

るが、此の夜襲も有名である。

第八には信長は何故に戦勝後の追撃をやらなかつたのであらう。夫れは、(1)京都方面の状況は長期の出動を許さないこと、(2)補給は長驅進撃を許さないこと、(3)麾下將兵の心裡は長陣を許さぬ爲であつたらうと推定することが出来る。家康や秀吉などは只當面の事を戰術的にのみ考へたのであらうが、信長は戰略、政略の兩方面から大局的に且つ大所高所から觀察し統帥の機微を考へて居る點がやはり家康の兄分であり秀吉の主人である。二年前に信長は朝倉軍の隨意退却を徹底的に追撃し朝倉氏を一舉に亡ぼした。追撃の必要を知らぬ信長ではないが、艱難なる信州路を何處迄追撃し、結末をどうつけるかを考へると、單に目前の戰術的のことのみを考へての追撃論には耳を藉し得なかつたであらう。其の状況に應じ機宜を誤らない點は實に偉いものである。

第十一章 第二次反織聯盟及び叛將

に對する作戰 附伊賀平定戰

第一次反織聯盟は天正元年四月信玄の死亡、同年七月足利義昭の追放、同年八月淺井朝倉の討滅に依り、其の中心で且つ主臺的乃至大黒柱的な存在は潰滅したが、尙ほ根強い一本の柱が近畿に残つて居る。夫れは大阪石山本願寺の法主光佐である。義昭は將軍職から蹴落され若江に軟禁せられて居たが、彼の策動病は改まらう筈もない。彼は毛利氏を語つて再び反織聯盟を策し本願寺の光佐亦毛利氏を頼んで信長に反抗を繼續するのみならず、越前方面の一向宗徒の保護を上杉謙信に依頼する。結局義昭と光佐とが策動の中心となり、毛利上杉兩氏の武力を結盟させて之に有象無象的雜徒を加へ信長を除かふと策した。勿論、近畿の反信長殘黨も之に加はつた。此の聯盟は反織の第二次聯盟と云つて宜しいと思ふ。そして此の聯盟は將に消えんとする残り火に僅かな炭をついだと同様な状態で第一次反織聯盟に繋がつたと見て宜しいと思ふ。

そこで信長は之をどう成敗したであらうか。先づ左に年表的に之を記載しよう。

- (1) 天正二年、義昭は上杉謙信、武田勝頼、北條氏政を聯合して信長を討たんと策したが、成果の認むべきものはない。
- (2) 同年四月信長は石山城に向ひ光佐を壓す。
- (3) 同年七月一向宗徒を長嶋に攻め、九月之を殲滅す。
- (4) 天正三年二月義昭、備後鞆津に走り、茲から毛利本家及び吉川元春、小早川隆景に書を送つて幕府の再建を圖る。
- (5) 同年十月、光佐、信長に和を提議したが成立せず。
- (6) 天正二、三年の頃から信長と上杉謙信との抗争は北陸方面に於いて漸く表面化して來た(後に説述す)。
- (7) 天正四年四月石山本願寺に對し信長は封鎖作戰を開始す。
- (8) 同年七月、信長の大坂封鎖水軍と毛利の水軍と初めて交戦す。
- 〔註〕 此の年迄、信長も毛利も成るべく交戦状態に入らざる如く其の態度を持して來た。
- (9) 天正四、五年には上杉謙信は次第に越前方面に深く喰ひ込むやうになつた。夫れは光佐が謙信に越前の一向宗援助を依頼した結果でもあつた。

- (10) 天正四年信長は安土に移る(之より先、安土築城を始めたが完成した)。
- (11) 天正五年十一月中國征伐を開始す。
- (12) 天正六年三月、謙信卒す。之で、謙信と信長との決戦も亦歴史の上に遂に見ることが出来なくなつた。
- (13) 謙信の死に依り第二次反織聯盟は全く瓦解も同様となつたが、尙ほ餘炎は近畿に在る。
- (14) 天正五年二月、信長自ら紀伊の雜賀を撃ち、同八年、本願寺光佐の大坂石山城退散に依り、近畿の反信長黨は潰滅し、後はただ毛利氏と交戦を續け秀吉の力に依り著々有利に進展しつゝある。

以上は第二次反織聯盟作戰の年表概見であるが、此の作戰間降將の再叛があつた。それは、

- (1) 天正五年松永久秀が信長の無頓著不用意な冗談半分の言に疑心暗鬼を生じて叛し、八月遂に亡ぼされてしまつた。

- (2) 天正六年九月荒木村重が叛した。之も信長を疑ひ信長から害せられると信じた結果で、明智光秀が讒言した爲と云ふ説がある。村重は七年九月遂に力盡き退散した。

以上の外信長が天正十年六月本能寺に於いて兇變に逢ふ迄の間には、東部山陰地方の略定と天正十

年三月の武田氏完全討滅がある。此の武田氏討滅は勿論、廣く見て第二次反織聯盟破摧の一重要作戦と見ることも出来るし、武田勝頼が假令反織聯盟に加はると否とに拘らず、當然に討滅せらるべき運命にあつたのだと見ることも出来る。東部山陰地方の経略は反織聯盟破摧に伴ふ當然の歸結である。更に其の前年、即ち天正九年、信長は大舉して猫額的な小國伊賀の土豪を征伐して居る。之は、勿論、別に反織聯盟とは關係なく、又、叛將的な叛亂でもない。單に此の年迄信長に服しない土豪であつた。

右、列記した諸作戦の全部を研究すれば、勿論、得る所があるが、種々の都合があるので本章に於いては、其の主たるもののみ大観することとする。

〔大阪本願寺攻圍〕 大阪石山の本願寺の法主光佐は信長の西上の際から反抗して中途一度和議を試みたが成立せず、光佐は上杉謙信及び毛利輝元（事實は吉川元春、小早川隆景就中隆景）の援助を請ひ、謙信も毛利も之に應じた。そこで信長は先づ本願寺を各個撃破せんとして天正四年五月大阪石山城外に在る石山本願寺方を撃攘して之を大阪城内に逐ひ込み、大阪城の四周に堡壘を築くこと二十餘、大阪河口は水軍（兵力は不詳）を以て封鎖し以て徹底せる長圍の策に出た。同年七月毛利氏は六百餘

隻の糧船を三百隻の兵船を以て護衛せしめて大阪本願寺を救援せしめた。是に於いて織田の水陸兩軍と毛利の水陸兩軍とが七月十三日大阪河口及び其の附近の陸上に戦つたが、織田軍は利なく毛利軍は糧秣を本願寺に供給するに至つた。之が信長の中國征伐の近因となつた譯である。此の戦ひに於いて織田水軍は鐵舟を用ひて居つたと云ふことである。戦鬪利を失つたとは云へ、舟其のものは非常に進歩して居つたことが分る。

本願寺の光佐が信長に降り、石山城を退散したのは天正八年の閏三月であるから、信長と光佐との抗争は實に十餘年に亘り、其の内愈々大阪石山城を長圍したのは滿四年である。そして此の石山城の攻圍間、他方面には北陸では謙信と戦ひを交へ、秀吉をして中國では毛利氏を征伐せしめ、且つ其の兵力を増強し、又之と併行して紀伊の雜賀徒、松永久秀、荒木村重の叛を鎮定するを要した譯であるが、之を急がず焦らず、じわり／＼と片づけて行つた信長の努力には底知れぬものがある。

〔中國征伐〕 中國征伐は秀吉戦史に譲ることとし、茲には毛利氏征伐に至る迄の外交に就き概説する。

中國征伐の始まつた原因は（1）義昭及び光佐が援を毛利に請ふたこと、（2）毛利氏も義昭を扶け其の覇業を回復するを名として東上の覇心があつたこと。此の二原因と信長の海内統一の大業遂行企圖

とが衝突した譯である。

信長と毛利との關係が問題化して來たのは次のやうな事件からである。

- (1) 尼子の殘黨が信長に援を求めたこと(尼子の殘黨は毛利の敵である)(永祿十一年)
- (2) 毛利から義昭を宥恕せんことを信長に請ふたこと(天正元年七月)
- (3) 光佐が援を毛利に求めたこと。

併し之等の事件に於いては信長も毛利も中々兵を動かさうとしなかつたのみならず、兩者表面は互に親善を装つて居る。例へば天正元年七月元春が因幡但馬に兵を出したときの如きは故らに信長に向つて聲援を求めた。又信長は義昭を處分する際には毛利の請求を容れ、山中幸盛(尼子の遺臣)から援助を依頼せられたときも之を斥けて應諾しなかつた如き夫れであるが、裏面に於いては信長は播磨及び三備地方の反毛利黨をして毛利の東上を阻止するの策を講ぜしめるとか、或は窃かに幸盛に命じて尼子勝久(尼子の遺族)を奉じて東部山陰道に進入せしめ、又、毛利も大阪石山の本願寺を窃かに援けて居つた。

斯様な次第で、初めは信長も毛利も表面は親善な顔をして其の傀儡を使ひ、毛利は信長の傀儡たる尼子の遺類を撃ち、信長は毛利の傀儡たる石山本願寺を撃つと云つた状態であつたが、之が昂じて信長と毛利との斷交開戦となつた譯で、其の動機は信長の石山本願寺に對する強力なる長圍封鎖に對して、毛利は此の封鎖を破らうとする武力衝突であつた。

表面親善を装ひ乍ら、裏面に於いて敵對的暗躍を試みると云ふ例は今日迄國際場裡に於いてもざらにある手である。前には信長と信玄との關係、今又信長と毛利(立役者は隆景)との關係、共に類似であり、信長の對手の信玄と隆景とは又其の性格中に似た點がある。けれども永祿中、末年の信長と天正の初めの信長とは大分、立場も違ふ、戦力も違ふから、信長は毛利に對する親善は大國が小國に臨む態度が見える。即ち毛利をして自由勝手なことはさせぬと云ふ態度である。併し信長は唯、霸慾に任せて戦ひの名などはどうでもよいと云ふ態度ではない點は見上げた點と云はねばならぬ。又、毛利の方でも、信長の企圖はよく看破し流石に智者の隆景と勇者の元春の結合した力も見えるやうに思ふ。以上の外中國役の作戦に就いては次篇の秀吉戦史に於いて詳述することとするが、最後に申したいことは、信長軍と毛利軍とが大阪灣口で戦つて織田と毛利との斷交以來一年三ヶ月を経過した後、信長が中國に出兵したことであるが、何故に信長は斯く時日を経過したのかと云へば、恐らくは謙信に對する作戦、近畿の肅正等の必要からであつたと思ふ。そして五年の暮になると大局上、目鼻がついた爲かと思ふ。唯一つ不思議なのは、天正五年の夏秋の頃は北陸より上洛せんとする謙信と

の決戦は近づきつつあり、六年の春は謙信から決戦を挑戦せられて居るのに、五年の秋から秀吉を中國に差遣した點である。けれども此の事も克く分る。それは、謙信の上洛に對し之と策應して必ず毛利が東上して来るに相違ない。故に之に對し何等かの手を打たねばならぬ。其の手は東部陰陽兩道地方の確保であり、手段は須らく戰略攻勢であらねばならぬ。之は恐らくは天正五年十月からの信長が二正面作戰開始の心情であつたと推斷することが出来る。かう考へると其の戰略上の機眼機略は實に感服するものがある。同時に時の兩強敵に對し二正面作戰を斷行せんとする信長の決心は立派なものであると謂ふべしだ。中國征伐に於ける信長の統帥は非常に手堅い遣り口である。このことは便宜上次篇に於いて述べることにする。

〔上杉謙信との抗争〕 初め信長は西上準備として家康と盟約を益々堅くすると共に又款を信玄に通じて其の背後の憂を滅じ、且つ信玄と結ぶことに依り謙信を牽制した。其の後信長と信玄との和破れ信玄は近畿の反信長聯盟と策應して信長打倒の爲西上を開始したが、中道にして病ひを得、天正元年四月卒去した。信長は信玄との和が破れるに伴ひ、謙信に恭敬の意を表し、裏面に於いては警戒怠りなかつたが、信玄死し淺井朝倉亡び信長の勢力が北陸に及ぶに従ひ、謙信との抗争は必至の狀勢となつた。加ふるに越前には一向宗徒が多く、同地方に於ける石山本願寺の勢力とも亦衝突せざるべから

ざることとなり、本願寺は謙信に依頼する。其の上に義昭が又謙信に頼つて来るので信長と謙信との間は益々險惡となるのは當然である。所で信長は例の通り謙信に對しては西、毛利氏との關係もあり表面は依然として敬意を表したが、裏面に於いては謀略に依り加賀、能登、越中地方に自黨を作ることを策し、謙信の上洛阻止を企圖した。斯かる次第であつたので信長の勢力は潜行的に伸び、天正二年頃には能登の七尾城迄、反謙信陣營に入つてしまつた。

是に於いて謙信は大いに信長の不信を責めた。義將謙信としては當然である。信長は表面は種々陳辯したが、意中は勿論覺悟の前である。義に強い謙信が一杯喰はされたと自覺したのだから信長の陳辯などは聽入れやう筈はない。遂に天正二年夏を以て兩將斷交と云ふことになつた。時に謙信は四十五歳信長は四十一歳である。因みに申して置くが謙信は天正六年四十九歳を以て最後の決戦の爲の西上を前にして病死し、信長も亦四十、九歳にて雄圖空しく本能寺に於いて斃れた。奇しきことである。

信長の對謙信作戰方針は如何であつたか、固より鮮明し難い點があるが、(1)安土城を築いた一理由は謙信の上洛に對する最後の抗戦上の戰略據點と云ふ意義があつたやうである。(2)決戦は北陸方面に於いて之を行はず、安土を戰略據點として江州地方に於いて行はんとしたものではないかと推察せられる。(3)之が爲北陸に於いては退避作戰を行ふ。と云つたやうな考察でなかつたであらうかと

思はれる。

更に筆者は謙信の立場で考へると、假令謙信が京都へ入るも、有力なる信長軍が安土に居る。長濱平地の各據點は信長方の有であり、信長は尾濃を本據として主力を以て岐阜から西を向いて睨むとなると、謙信は北陸方面に對する退路の關係も非常に不安になつて来る。冬は降雪の爲交通が杜絶することあらう。かうなると信長の首を取らぬ限りは、謙信は氏康に對する關東進攻より尙ほ六ヶしい戦ひとならぬとも限らない。信長の見る所も之に似たものでなかつたらうか。

謙信の進攻は、説に依り多少異なるが、

- (1) 天正二年七月兵三萬を率ゐて西上七尾城を回復し金澤を收め一旦歸國した。
- (2) 天正三年八月、再び出動、加賀の松任城を攻略し兵を返した。
- (3) 天正四年春第三回の出動を爲し小松城を攻略したが又兵を返した。
- (4) 天正五年には東北部越前迄進攻したが兵を返した。
- (5) 天正六年三月を期し愈々信長と決戦すべく大軍を催し三月三日西上出發の爲觀兵式を行つたが、其の夜發病五日卒去し雄圖も水泡に歸した。

と云ふ説と、天正五年夏、能登を平定した程度で其の冬から西上を準備したが其の翌年死んだのだと

云ふ説もあり、尙ほ此の他にも異説があるが、信長は何れにしても部將を遣はしたときも自ら出動したときも北陸に於いて謙信とは決戦をしないで退避作戦をしたと云ふ點は、當然の戦略として肯定出来ると思ふのである。

謙信と信長との間に交はされた兩將の氣分をよく表はした文書などは茲に之を省略するが、日本外史などには山陽が面白く名筆を揮つて居る。

謙信の死は、信玄の死と同じく信長の爲には實に僥倖であつた。けれども信長は謙信に對しても初めから一本調子の決戦を企圖せず、徐ろに策する所があると云つた態度は適切だと思ふ。

〔伊賀征伐〕 近畿にある猫額ねこがしの山國伊賀は戦國時代土豪の割據する所であつた。信長は北畠氏其他伊勢の諸族を征服した後、北畠信雄(二男)をして前後兩度伊勢から伊賀に進攻させたが、二回共失敗に終つた。所で石山本願寺も開城し畿内の叛將の征伐も終つたので愈々大舉して牛刀を以て鶏肉を裂く作戦を敢行した。そして直ちに伊賀を征服した。此の征服作戦は、實に伊賀の四圍よりする進攻であつた。筆者は特に此の作戦を掲げたのは何故かと云ふと、信長が決して無理な作戦をしないと云ふ一例としたのである。信長が入洛して既に十年、山城の隣國に全く服従しない國があるのであるが、之を十年間も放置してある。何だか、理由がありさうであるが固より探究すべくもない。信雄

が伊賀攻略に失敗すれば其の直後何とか伊賀を成敗してしまふと云ふのが信長の性格だと見る人が多いと思ふが、筆者は信長を見ると、さうでない、信長は常に大局に眼を著け、下らぬ局部のことに力瘤を入れ、無理して大怪我をすると云ふやうなことは避けると云ふ考へを濃厚に有して居る。荒木の叛に對しても、石山本願寺に對しても亦此の伊賀に對しても無意味な力攻を爲さず、易々と平定し得る迄、持久作戦に出る。之が信長の用兵觀の一つと見ることは出来る。此の意味に於いて伊賀征伐と云ふ無名作戦を茲に掲げたのである。

〔武田氏討滅戦〕 天正三年信長は武田勝頼を長篠に破つて殆ど致命的打撃を與へたが、長驅進攻を止めて軍を班した。其の後家康は遠江の失地を回復し進んで駿河に進入し、又信長も武田領との接壤失地を次第に回復して信濃に向ふ態勢が漸次に整頓して來た。之に對する武田は其の勢ひ日に月に縮まる狀況となつて來た。

義昭や光佐の反信長聯盟工作は、勿論、武田勝頼にも呼びかけられた。勝頼も勿論、反信長陣營に入ることは當然であるが、往時の實力などはない。只、反織聯盟の員に備はると云ふ程度であつたであらう。

信長も愈々上杉謙信と事を構へ何れは決戦せねばならぬと云ふ狀況になると、勝頼を自己陣營に引入れて謙信を牽制せしめんとしたが、固より仇敵關係を一掃するやうなことは出来やう筈はなく、此の誘引策は成功しなかつた。さうかうして居る内に謙信が死し、光佐が降参し、伊賀も片つき、荒木の叛も鎮定、秀吉の中國征伐は進捗し愈々毛利氏との決戦も近づく、一方に於いては、武田の衰弱は愈々最後の止めを刺し得る状態となつた。之が天正十年三月の武田討滅戦となつた譯である。

武田討滅戦の直接準備は天正九年の頃から行つて居たと思はれる。作戦實施は天正十年の三月であつた。

此の作戦部署は、(1)信長父子は南信飯田方面から諏訪に出でて甲府に向ひ、(2)別に支隊を木曾方面及び飛騨方面より中、北部信州に向はしめ、(3)家康は駿河より北進甲府に向ひ、(4)尙ほ當時誘引した北條氏は東部駿河の武田領に向ふと云ふ分進合撃部署である。そして其の兵力は、信長父子の率ゐる軍は十二萬、家康の率ゐる軍は三萬と號した。兵力に多少の掛値があらうが、やはり牛刀を以て鶏肉を裂く作戦である。我が古戦史上に於ける分進合撃は澤山あるが、源頼朝が二弟を遣はして義仲を攻撃させた作戦、一谷の攻城、頼朝自身の行つた奥羽征伐などは中世に於いては有名であり、戦國時代に於いては大小の分進合撃例は多々あるが、此の武田討滅戦は大規模の方である。分進合撃の戦略原則なども普墮戦争などを以て金科玉條とした時代があつたが、其の兵理は遠く孫子にあり、

我が國では其の戦例などは古くからざらにあるのである。

此の信長、家康等の進攻の前に於ける武田勢は全く脆かつた。同盟軍の進攻に伴ひ勝頼麾下は離散し、勝頼は僅かの従者と天目山に入り衰れな最後を遂げたことは周知の通りである。

以上の如く第二次反織聯盟も、謙信の死と云ふ天佑か徳俸があつたが、遂に毛利を残して後は全部各個に撃破せられてしまつた。そして信長は愈々自ら毛利と決戦を企圖し、一方亦四國征伐を準備しつゝあつた矢先、遂に本能寺の變に墜れたのであり、惜しみても尙ほ餘りあると云ふべきである。

第十三章 信長の作戰用兵の特色

前十餘章に概説した所で、信長の作戰用兵の特色は大體何人にも御分りのことと思ふし、其の程度述べた點もあるが、更めて左に其の主なる點を取纏めて再録し研究に便にしたいと思ふ。

(一) 兵無^ニ常勢^ニ水無^ニ常形^ニと云つた孫子の兵理は全く信長の作戰用兵に依り代表せられて居ると云ふも過言ではない。

信長は桶狭間では敵の八分の一の兵力を以て白晝奇襲を企畫、天佑的な驟雨に乗じ九死一生の決戦を斷行して大勝を得た。長篠では敵に優ること二倍半の兵力を以て攻勢防禦をやつて大勝した。まるで百八十度相違の作戰である。さうかと思ふと姉川では敵を堅城から誘引出して城外決戦を求めて撃破して居る。朝倉軍の隨意退却に乗じて果敢なる追撃を斷行して一舉に朝倉氏を滅亡せしめたかと思ふと、姉川戦の後でも、長篠戦の後でも殆ど追撃は行はないで兵を收めて居る。信長の遣り口は彼を知り己を知り敵に優る手を案出し一定の型などには捉はれない。此の點は一寸他の古今内外の名將には見られぬ點である。信長は何故斯く作戰したかは其の都度述べて置いたから省略する。

(二) 信長は戦機看破の名人である。此のことは桶狭間、姉川、長篠、朝倉軍追撃等の場面に於いて明らかに看ることが出来る。單に斯かる戦場に於ける戦術上の戦機看破のみならず、大勢に於ける戦略上の戦機看破にも妙を得て居る。例へば、天正元年後期頃は朝倉、淺井を滅ぼしてしまふ好時機だ、天正二年頃はまた武田との決戦は早過ぎると云ふが如き其の例である。

(三) 信長は無理な作戦は行はぬ。信長の桶狭間の奇襲や俗に傳へられる性格(眞實は違ふが)などから信長は無理な作戦を行ふ人のやうに見えるかも知れぬが、信長は決して無理な作戦をやつて居らぬ。桶狭間の奇襲は九死一生の大賭博的に見る人があるかも知れぬが、あの場合、あの手は最良の手であつたのである。あの手以外に織田氏の生きる道はなかつたので無理ではなく道理である。信長は攻城などでも決して無理な力攻はしない。大阪石山城は四年攻圍し荒木村重の有岡城も一年攻圍した。決して無用の力攻を行ひ兵を損するやうなことはしない。要するに勝目の多い、否、百パーセント勝つと云ふ以外には戦はぬと云ふ譯でもないが、勝目の乏しい戦ひなどは勿論しない。各個撃破を爲すにも後に云ふ如く少しも無理をしない。何かと作戦又は謀略を以て敵の力を漸次弱らせて樂々と勝つと云ふやうなことを充分に考へて居たやうである。

斯く無理な作戦をしないのは何故か、之は長期戦に於ける兵力の愛惜、民力の消耗防止、及び厭戦

氣分の防止である。長期戦下無理な作戦をやれば必ず厭戦氣分となり將士は從軍を厭ふことは必定である。信長は功利觀から常に人心の機微を捉へると云ふ點には無頓著な所があるが、將士に厭戦氣分を起させず、志氣を鼓舞するには無理をせず、上手な作戦をやることだと云ふ點に就き大いに用意があつたやうに思ふのである。

(四) 信長は成果をあせらぬ。信長は齋藤氏に對しては六、七年、淺井、朝倉に對しても三年、武田氏も約十年、本願寺も亦約十年、伊賀平定も約十年か、つて居る。少しも無理なく、急に滅ぼさうとあせらずに滅ぼし易くなつたとき亡ぼす。亡ぼし易くなるやうに工作する。此の點は信長の作戦の一特色である。

(五) 信長の各個撃破には一特色がある。どんな特色かと云ふと、一つ宛敵を根こそぎに片づけようと思はぬ、あちらも、こちら少しづつ痛手を負はせ、其の内に一番弱つたやうな奴を先づ根こそぎにやつつける。

(六) 信長は戦略と政略とを克く一致させて居る。殊に、凡有る手段を盡くして兵力を用ふる場面を少くしようと考へて居る。西上作戦などは戦略と政略と一致した模範例と云ふべきである。其の他の戦ひでも戦政兩略を考へて居る。

(七) 如何なる場合に於いても謀略を用ひ、作戰や外交を容易にして居る。所謂、謀を先にし戦ひを後にすると云ふ模範を示して居る。

(八) 強靱性が大である。信長は一本調子の作戰はやらぬ。弾力性のある作戰をやることは各戦闘に於いても全局の作戰に於いても之を見ることが出来るが、兎に角強靱性が大である。美濃の齋藤氏に對する作戰でも秀吉が洲股の臨時築城に成功する迄の數年間は木曾川を越えて作戰する度に失敗して居る。所が夫れに少しも屈せず、作戰と謀略とを併用して、たうとう成功した強靱性をはじめ、武田、本願寺等に對する作戰を見ても實にねばりが強い。然も此の強靱性中には小歌を謡ひ乍らと云つたやうな氣分が見えるのは信長の一特色である。

(九) 最後に申して置きたいことは、信長は常に自ら皇師の將を以て任じて居たことは明らかに看取することが出来る。然も夫れは名を皇師に藉りて野心を遂げようとするやうな不都合な考へは聊かもなく、純眞に考へて居つたと思ふ。要するに海内統一は奉勅作戰と考へて居たことは事實と思ふ。以上の外向ほ色々の特色もあらうが、信長の作戰に於いて特に鮮やかに見ることが出来ると思ふ點を掲ぐれば先づこんな點だらうと考へる。

第十四章 信長戦史の現代に與へる

示唆の數例

以上信長の戦史を通過すると現代に與へる示唆も段々あると思ふ。戦史の貴い所の一つは又ここに在ると思ふ。此の示唆も其の都度申述べて置いたこともあるが、茲に纏めて其の若干を例記することとする。

(一) 信長が美濃を攻略する上に於いて連年攻勢を取るが一向成功せぬ。併し信長は少しも挫折せず遂に洲股に前進據點を占むることに依り、戦略上の地歩を占め、一面、秘密戦に依り齋藤家の内部切り崩しを策し武力と謀略とを併用して遂に齋藤家を滅ぼしてしまつた。齋藤方は、數年間信長の進攻を其の度毎に撃退したが、最後には多つてしまつた。此の戦史は現大戰に於いても若し米英の進攻に對し萬一にも終始受身に立つて居つては其の都度敵の進攻を破挫しても最後にはやられてしまふことを暗示する。尤も進攻者は信長の如き偉人でなければ宜しいかも知れぬが、大體に於いて守勢は味方になる他力の作用なき限り最後には参るものである。北條時宗は對元進攻を準備せしめたのは誠に

故あることである。

(二) 信長は如何なる場合に於いても兵力を用ふる範圍を最少限にし、極力外交及び謀略で敵の切り崩しを策し、又兵力を用ひても戦力を消耗させないやうに深く意を用ひ、一面、軍事の進歩特に其の技術の進歩を策し、戦力の増強、戦法の創意に努めて居る。誠に長期戦指導上の適切なる著想であると評すべしだ。

(三) 信長が四年に互り、本願寺光佐の石山城を封鎖して力攻せず、毛利、上杉、其の他外周の敵との交戦に力を致した遣り口は、今日の戦局に於いて哲理相通するものがある。即ち蔣は本願寺的立場、米英は毛利、上杉的或は義昭、信玄的立場であると考へると、舞臺は大小比較にならぬが、哲理は相通するものがあらう。

(四) 信長の反織職盟に對する作戦を見ると、じわり／＼とやりつつ、戦機到らば、ぐわんとたたき。思ひ詰めた無理はしない。どんなに苦しい状況でも悠揚迫らざる態度がある。吾人をして眞に英雄的態度と禮讃せしむるものがある。吾等は今後大戦下如何なる艱苦にぶつかつても信長式であらねばならぬ。

(五) 長祿戦前日斥候が歸來し武田軍の威容の偉なるを報告した所、將士が之を聞き青くなつたに

對し、「怯者ノ眼中草木モ亦兵ナリ」と叱咤したと云ふことも味はふべきことである。名將には敵の強弱味方の強味弱味ははつきり分り、如何なる場合でも敵の弱點を看破し之に乗じようとする。凡將には敵の弱點が見えず其の強點のみが眼に映る。味方の強味は分らず、弱味ばかりが氣にかかるものである。吾々は大東亞戦下、皆名將心理を持つやう正しき認識を必要とする。米英には、拭ふべからざる弱點がある。然も夫れは彼等の誇る強味を滅却してしまふと思ふ弱點がある。之に乗ずることを終始考へて居らねばならぬ。

(六) 織徳同盟の鞏固なりし所以を考へて今日の三國同盟を強化し、日、滿、華、泰其の他共榮國民族の團結を鞏固にせねばならぬ。

右の外、掲ぐれば他に澤山にあるが、以上の如き諸例を見、特に三十三年間信長が連年奮闘した長期戦の迹を省み、長期戦指導の哲理を求むれば得る所甚大と思ふ。

第十五章 信長觀の是正

筆者は事、信長に關することを書く場合には如何なる場合に於いても信長觀の是正を認むるのである。夫れは古來の信長觀に大なる誤りがあり、斯かる人物觀をして居ると到底偉人は出ないと思ふからである。

信長は大智大勇、大名將中の大名將であり、秀吉の主人、家康の兄分たるの大器であると思ふ。其の作戦其他軍事、政治を始め凡そ將たり相たる事何一つ後世の範たらざるはない。

然るに今日迄の信長觀、殊に其の人物觀の中には甚だしき見當はつれのものや或は小乘觀的のものもあり、又功利主義觀としか受取れない信長批判が多いやうに思ふ。就中徳川時代の學者の所論は殆ど悉く信長を惡將視して居る。夫れは彼等の功利主義觀からで、特に徳川氏に阿諛遠慮し家康を偉くせんとする底意からだたと評せざるを得ない。果して信長は斯かる腐儒や凡夫から惡口云はれるやうな人であらうか、筆者は大乗觀に立ちて少しく信長を觀察しよう。

〔誤れる批判に對する辯護〕 多くの人は信長は無軌道な人で殘忍性強く猜疑心深く短氣で、偏愛偏憎如何にも不徳な行爲が多く、爲に遂に明智光秀から弑せられて、終りを完ふことが出来なかつたと評するのであるが、之は功利主義觀、皮相觀乃至は小乘觀であり、惡く云へば腐儒、凡夫、僞君子の我觀に過ぎぬ。

信長は其の昔、平手政秀から死を以て諫めらるる迄は、成る程、ならず者的な所もあるが、斯様な性格や行爲は天才的英傑の幼時には得て附きもので、信長のみ問題にすべきではない。寧ろ信長は平手の死に感奮して大成を期し、平手の恩義を終生忘れなかつた善き方面を見ねばならぬ。或は信長が弟信行を謀殺した事の不徳を非難する者もあるが、斯様な事は戦國時代の道德觀では餘り問題としなかつたかの如き程其の事例が澤山ある。信玄は父を逐ひ嫡子を殺した。家康も實子を切腹せしめた。秀吉も養子秀次を高野山に幽閉して死を賜ふと云ふ事をやつた。其の他戦國及び其の以前の多くの名家にも斯様な事は澤山ある。信長だけを詰めるのは當を得ぬ。而も信長にして見れば、父なき後遺臣が弟信行を嗣としようとする策動があり、信行も其の氣になつて居る以上、除かざるを得ない立場にあつた。大義觀を減すと云ふが、戦國時代には大義と大策と穿き違へ、大義と自己生存とを誤つて居つたやうなことも多々あるが、信長は織田家の正嗣と生れた以上、之を廢嫡せんとする一味に對しては斷乎成敗しようとすることは又止むを得なかつたと思ふ。

信長は叡山を焼き、僧侶其の他全山の男女老弱を盡殺し、長嶋で三萬の一向宗徒を焼殺した事や、到る處で神社佛閣を焼拂つたことは後世非難の大的である。併し此の信長の行爲には辯護の餘地は相當にある。

抑も叡山の僧兵は平安朝以來の大癌であつたことは史上匿れなき事實である。戦國時代に於ける一山の心的頹廢も推して知るべしであり、神聖なる道場などと云ふ資格は聊かもなかつたと見るのは必ずしも見當違ひではない。所詮近畿の平定にも此の大癌の切開は當然せねばならぬ破目にあつたと思ふ。信長が叡山を焼討ちするときの理由として述べて居る所は正しいと思ふ。結果は遣り過ぎたもの非難は免れないが、信長の云ふ所には堂々たる理由がある。數百年來の大癌を除いた其の斷行力を見ねばならぬ。而も信長が藪棒式に焼討ちしたのではない。前年山徒が淺井、朝倉をかくまつたとき信長は「聯合軍と絶縁せよ、否らざれば中立を守れ、其の何れかを選ぶならば寺領を安堵させよう。若し何れをも拒まば他日徹底的に膺懲を加へる」と叡山へ申送つて居るのであるから膺懲を加へる理由は充分にある。其の程度には行過ぎた誇りはあらうが僧徒膺懲の必要は充分ある。其の名も完全に立つ。長嶋の一向徒に對しても第一回、第二回の攻撃に於いては左程殘酷なことはして居ない。所が長嶋の一向徒が大阪の石山本願寺と通じ近畿の反信長派に與みし、而も長嶋は信長の本據たる尾張の接

壤地方であるから、叛服常なき者を何時迄も放つて置くわけにも行かず最後の太閤槌を加へたのである。所謂「佛の顔も三度」のたとへがある。況んや信長をやである。信長としては成る勘忍はして居る。只成らぬ勘忍をしなかつたに過ぎぬ。道歌に「勘忍の成る勘忍は誰もする。成らぬ勘忍するが勘忍」と云ふことがある。修養を積めば其處迄行けるのであらうが、成る勘忍をするのが常識であるから、此の點から云へば信長を責めるに當らない。

武田勝頼を亡ぼして其の首を得て侮辱したと云ふやうなこともあるが、信長は信玄の死後、勝頼が身の程を知らざる西方侵略に對し不快一方ならずであつたに相違ない。私的言行に無頓著な信長としてはありさうなことだが、非難すべく餘りに事柄が小さい。

信長が朝倉氏を討つため、南部越前に進入し淺井氏の寝返りに遭ひ軍を反し、次いで岐阜に歸る途中、千草越で信長を狙撃して果さなかつた杉谷善住坊を捕へた後之を一週間地中に立埋めにし頭だけ出して置き、竹鋸を以て七日間に斬殺させたと云ふことは如何にも殘酷なやり方だが、昔から武人の曲型と云はれた源義家が金澤橋を攻圍中城中から義家を罵詈した千住なる者を城柵陥落後生捕りにし其の舌を抜いた話や、源頼義が前九年の役、厨川橋を陥れた後此の役間の官軍の糧道を絶ち官軍を苦しめた經濟の首を鋸で引切つたと云ふ話と大同小異で、獨り信長のみ非難するのは公平ではない。

信長は寛容の徳がないと云ふ人もある。成る程觀方に依り左様に見える所もあるが、最初信長が入洛した際でも美濃の齋藤家没落後、或は朝倉氏を討滅した後でも、降將は之を殺さず寛大なる處置を施し己に従屬せしめ、降將をして未だ歸順せざる者を討たせて居る。之等は一つの政策からであることは勿論だが、信長が眞に腹の小さい男なら斯様な策を取り得ないであらう。信長から觀れば隨分手こずらされた大阪石山本願寺でも最後は長嶋や叡山のやうな殘忍なことはして居らぬ。信長が家を嗣いだ直後柴田勝家は反信長派の巨頭で弟信行に加擔し兵を擧げて失敗し、僧服で降つたのであるが、信長は寛大に取扱ひ勝家も最後迄忠實な老臣となつた。佐久間信盛の節度なき行爲も許せる限り大目に見て居たが、其の非武將的行爲が募るにつれ止むを得ず高野山に追放したが其の子は之を用ひた。

光秀の叛逆は信長が餘りにも光秀を虐待したからだと云ふが、之も小乘的感情觀である。一介の浪人を一國の城主に迄取立てた信長の人材登用を見ねばならぬ。秀吉登用の如きは其の最たるものだが何れの時代にも獅子身中の蟲が居る。獅子身中の蟲に斃れた人は獨り信長ばかりではない。古今に其の事實は少しとしない。戰國時代には下剋上の風が盛んで主人を殺したり主家を横領した者は多々ある。然るに主人殺しと云へば光秀を其の代表者と目するが、夫れは信長を惜しみ信長の偉大性を裏書きし、問ふに落ちず語るに落ちた世道人心の表現であるとも云へよう。

信長の私的言行を見ると世人には如何にも仁者でないやうに見えるかも知れない。信玄や家康が部下の失策を叱らず、秀吉は大度量を以て闊達明朗に部將を傘下に入れたのに比して信長には辛辣な所がある。だが謙信が松山城を失つた責任者を斬つたのと、信長が洲股占據に失敗した柴田や佐久間を責めないのみならず、其の勞を犒つたのと比較すれば、獨り信長だけを癩癩持ちの代表ときめつける譯には行くまい。論より證據光秀が信長を殺した後、信長の譜代の臣や外様の部將で光秀に志を通じた人は幾人ありや、是を見ても信長は決して部下から見放された人ではない。光秀に對し弔合戦を考へたのは獨り秀吉だけではない。只秀吉は機を見るに俊敏であつた爲、功を専らにしたに過ぎぬ。

信長は大名將とし智の湧出する所、作戰上に於いても將又、隣國諸將との間に於ける外交に於いても、巧妙な謀略が多いので、私行上にも夫れがあるかの如く見られたのであらう。信長は作戰のことも外交のことも極めて細心周到であるが、私的言行には無頓著である。降將松永久秀が再び叛したのも此の無頓著な言行が基であり、光秀の叛、荒木村重の叛も信長の私的言行の無頓著性が其の禍因の一つであることは勿論で、信長の缺點と云へば云へよう。だが問題は小さい。

元來信長の部下の統率を見ると、信玄の如く籠絡的、衛策的、理窟詰ではなく、秀吉のやうに物的重賞籠絡主義でもなく、又家康の如く術を部厚の仁徳で鍍金したやうな感じもない。いづれかと云へ

ば、信長は赤裸々であり、非常識のやうで常識を逸せぬ。叱るべきは叱り賞すべきは賞し何等不思議もない。何れかと云へば平凡である。叱るべき所を暫く怵へ賞すべき所を見合はすと云つたやうな點は多少ないではないが、さう意外の非凡性がある譯でなく常識的である。尤も信長は青少年時より奇抜な人であつたので、大名將となつた後も三つ兒の魂百迄と云ふやうな所もあるが、部下に對する統率に謙信と一脈相通するやうな所もあるやうだが、信長は時に部下を彌次るやうなことや、毒舌を振るつて叱り飛ばすと云ふやうなこともあり、秀吉の如きも信長からは猿と云はれたり、又小身時代に勝手に旗印を拵へて信長に見つけられ叱り飛ばされた揚句旗竿をへし折られたやうなこともあつたが、信長は決して秀吉を捨てなかつた。秀吉が柴田勝家を援ける爲越前に向ひ勝手氣儘に歸つた。信長は怒つて接見しなかつたが、其の後中國征伐の獨立兵團長を命じた。信長は部下に對しては誠意を失はず、大乘的愛護は充分にして居る。自分が 朝廷から官位を授けられたとき、夫れでは部下に對して濟まぬとして部下の爲にも官位を奏請して居る。

秀吉は後年信長を評して「信長公は勇將であつたが良將ではなかつた。剛を以て柔に克つことを知つて居らるるが、柔を以て剛を制することを知られない。一度信長公に双向つた者に對しては何時迄も其の憤怒が解けず、悉く敵の根を絶ち其の葉を枯らしてしまふから折角降参した者を誅し歸服した

者をも殺してしまはれる。だから復讐の絶え間はない。夫れと云ふのも器小量狭であるからだ。人からは畏れられるが懐かれない。譬へば虎や狼を見よ、人々が之を怖れるから之を殺して危害を免れようとするのである。明智の謀叛も之から起つたことである」と云ふたとか云ふ文獻もあるが、何れは後世の僞作であらう。秀吉が斯様な評論をするならば秀吉の値打が下る。信長は柔を以て剛を制することを知つて居ることは信玄との外交史でも謙信に對する謀略でも分る。信長に双向つた者で根葉を枯らしたのは叡山と長嶋とであるが之には理由があることは前述の通りである。淺井朝倉を滅ぼしたのは元々淺井の寝返りが基で、朝倉が亡んだのは秀吉が柴田勝家を亡ぼしたと略々同様である。淺井の亡ぶ前には信長は妹婿長政に降を勧めること再三であつた。降將松永久秀を攻めたのも僅かな不用意なる信長の放言に久秀が疑心暗鬼を生じ叛したからだ。荒木村重の叛には光秀の讒謀がある。秀吉の評なるものは殆ど當らない。斯様な信長評は秀吉に事寄せてつくつた腐儒凡人輩の評としか思へない。吾人は信長の人物を正視せねばなるまい。

以上は古來信長の悪評に對する筆者の辯護論であるが、之は信長を好き又は同情してではない。只小乘的、功利主義的な人物月旦を除かんとするにある。古來の信長觀のやうでは人才は世に埋もれてしまふと思ふから、愚見を述べたまでである。

〔戦国時代の他の名将の企及し得ざる信長の偉大性〕 筆者は信長を敬仰するのは次に述ぶるやうな他名将の企及し得ざる偉大性があるからである。

第一に筆者が口を極めて信長を賞するは其の尊皇心敬神心の篤いことである。信長は敵や第三者に對し義がなくとも 天朝に對し奉つての忠と義は當代無比である。當代大義名分は地を拂ひ 朝廷は御式微の極に達して居たことは史實の示すとほりであるが、信長は宮殿を造營し奉り御料を献上申上げ、至尊の御不自由、御困難を除き奉つたことは何と云つても信長の偉功で忠誠心の發露である。又伊勢の 皇大神宮の御遷宮に獻金したことも信長の敬神思想の篤きを窺ふに充分であり、信長が神社佛閣を焼拂つたのは當時神佛混同し、加ふるに悪神官や不良僧侶が非行多きを匡正せん爲であつたと云ふことも推察することが出来よう。

信長は 勅を奉じて入洛したが軍紀極めて嚴正、些かの犯す所なからしめたのも闕下に於ける不祥事なからしめ 宸襟を安んじ奉らうとする信長の意中であつたと思ふ。彼は官位を拜しても功に過ぐるときは之を拜辭して功相當の官位を頂戴し、中央政權御委任を忝うしても敢て幕府を再建するが如き私心は聊かもなく、最後に右大臣に任ぜられても單に高級の一朝臣として中央政權を掌理し、家康の如き大權を私するが如きことをしなかつた。頼朝以來の重臣としては信長の如き大義名分を辨へた

人はない。筆者が信長を崇敬する根本的理由は此の點である。

第二は信長の功業である。筆者は戦国史を讀む度に思ふことは、此の人のりて初めて亂麻の戦國に統一手術のメツセルを入れ得たのであるといふ點である。信長は徳の人とは云へぬかも知れぬが、力の人、識見と実行力の非凡卓抜な人で殊に進歩主義、獨創心の盛んな人である。此の識見と実行力とで戦國統一の爲の難症部の切開を爲し治癒恢復の曙光が見えたのである。或は信長の功業は尾張に生れたと云ふ地の利と謙信信玄の抗争と其の死と云ふ天の時とがあつたからと論ずる人があるかも知れぬが、筆者は假りに謙信、信玄或は家康を初めから尾張に生れしめた所で、信長だけの仕事が出来たか否や疑はしいと評せざるを得ない。禮を厚く辭を低くして信玄の款を通じ、家康を見抜いて鄭重なる禮を以て同盟を結び、而も謙信とも難を構へず背後の憂ひを除いて近畿に進出した外交上の手腕などは實に立派なものである。密勅を奉じて以來、彼の努力と云ふものは上洛と云ふ大方針の下には區區たる面子などは考へない。斯様なことは尊大な信玄などには出来ない藝當である。家康の如き守成的の人には信長の助手しか出来ない。謙信は政治的手腕は遙かに信長には及ばないと思ふ。信長は家康を見込み秀吉を登用した所に大成の重因があるが、信長あつての秀吉であり、家康であつたことを忘れてはならない。

信長は内政にも殊の外意を用ひた。入洛後京都の秩序の回復肅正のことは拙著「我が戦國時代に於ける名將の謀略」中に認めた所であるが、近畿の交通や民福にも大いに意を用ひた越前を平定して柴田勝家を封じたときの訓令の一節に「公租公課を重くしてはならぬ。土民を侮つてはならぬ。司法に偏頗があつてはならぬ。武備を怠つてはならぬ。皇室の御料を大切にせよ」と云ふやうなことがあり、尙ほ「思案に餘ることがあらば上京して相談せよ」と附言して居る。言簡であるが用意が周到で且つ茲にも信長の尊皇心が現はれて居る。

第三には信長の作戦用兵上の特長である。このことは前章に述べたが兎に角信長の作戦は謙信と信玄との作戦上の特色を合成したやうな観がある。謙信の如く尖鋭的な所もあれば疾風の所もある。信玄の如く慎重堅實急がずあせらない所もある。謙信に比し謀略は巧妙であり信玄に比し放膽な所もあり、兩將に比し遙かに進歩的な所がある。

信長は當代稀れなる進歩主義の人であり、舊慣を弊履の如く顧みない。殊に軍隊の訓練に意を用ひ其の編制裝備等に火力主義を重用し、長篠の合戦のときには既に三千挺の小銃を有し之を千人宛三交代に發射せしめて三連發の効果を擧げ、武田軍の猛襲を破挫して攻勢に轉じ、武田軍衰滅の最大原因を作つて居る。當代三千の小銃と云へば偉大なる新式裝備であつたことは云ふ迄もない。又信長は鐵

舟をも創始し、被服裝具なども織田軍は實に立派であつたと云ふことである。

第四には信長には聊かも功利心とか私心が無いと云ふ點である。此のことは敢て再述しなくとも分ると思ふが、當代實に稀れなる私心や功利心なき武將である。

以上は筆者の信長觀であるが、信長はやはり秀吉の主人たる名實があり、家康の先輩たる力量と手腕とがある。何れの時代でも第一流の創業者は功業を完ふせずして斃れ、第二流の好運兒は後を繼いで當代の第一流として世の中から譽められ、我が物顔に世に出づるのである。信長は苦勞して大功業の基礎を定め、苦勞にむくいられたものは後世の腐儒凡夫や當代の凡將、功利者流からの惡評であつた。氣の毒な性分と云ふべしだ。だが過去の信長觀を是正せねば眞の偉人は出るやうな世の中にはならぬと思ひ、敢て本章を加へたことを再言する。

第二篇 秀吉戰史

第一章 戦歴概観

蓋世の英雄、日本一の偉人と呼ばれる太閤秀吉の如何なる人であつたかは誰知らぬ人はあるまい。又秀吉の人物は割合に世の中に誤解なく傳へられて居る。——尤も徳川氏は織豊二氏の歴史殊に豊臣氏の歴史を歪曲し湮滅したと云はれて居るが、秀吉はどんな人であつたかと云ふ點は信長程の誤解なく傳はつてゐるやうに思ふ。——故に敢て秀吉は如何なる人かと云ふことを説く必要もあるまい。

秀吉も大天才であり然も努力の人であることは云ふ迄もない。秀吉の幼時に就いては太閤記などに面白く色々なことが書いてある。何處迄が本當であるか分らぬが、兎に角幼少時から大天才の閃めきがあり、之が子供の悪戯となつて現はれることは何れの英雄にも附物の史話である。秀吉の幼少時の史話は他の英傑よりも、より普遍的に傳へられて居るから、今茲に事新しく紹介して戦史の前記とする必要も認めない。秀吉が信長に仕へる前及び部將となる前のことは戦史として大なる價值はない。依つて信長の部將時代から書き起すこととする。

秀吉の戦歴は之を(1)信長の部將時代と(2)獨立した後とに分ちて敘述すると大體次のやうに

なる。併し信長の部將時代に就いては其の主たるもののみ掲げることとした。尙ほ、秀吉は信長に仕へた後、洲股の前進據點を築設占據する迄の隊長としての戦歴は、判然としないから、茲には洲股以後のことに止める。

(一) 信長の部將時代

(1) 永祿九年八月、當時何人も出来なかつた洲股の前進據點を築設し、之を守備確保することに成功した。之が信長が美濃攻略の最も有效なる施策であつた。同時に秀吉の榮達の動機のやうに思ふ。

(2) 信長の西上戦に於いては箕作城を急襲した部隊長の一人として戦功を樹て名を擧げて居る。

(3) 信長の第一次越前進攻が蹉跌して退却する際、自ら進んで後衛を志願して信長をして其の退却を安全ならしめた。

(4) 姉川戦に於いては第三番隊長として淺井軍に撃退せられたが、此の戦後、反信長聯盟に對する信長の活躍間は、長濱地方に於いて、よく淺井、其の他反信長黨の活動を箝制し且つ信長の淺井、朝倉切り崩し策の支障となつた。

(5) 天正三年の長篠役にも従軍して第一線の部隊長の一人となつて居る。

(6) 天正五年十一月からは中國征伐の先遣兵團長格を以て出動し本能寺の兇變迄活動、此の間陰陽數國を征服す。

(二) 獨立後

(1) 山崎の合戦(天正十年六月)。

(2) 第一次反秀吉聯盟に對する作戦(天正十年十月より天正十一年四月、柳ヶ瀬の役と稱す)。

(3) 第二次反秀吉聯盟に對する作戦中小牧長久手の役(天正十二年三月より同十月に互る)。

(4) 同紀伊征伐(天正十三年三月)

(5) 同四國征伐(天正十三年五月)

小牧長久手戦の延長と看ることを得。

(6) 同越中征伐(天正十三年八月)

(7) 九州征伐(天正十四年九月より天正十五年三月迄)。

(8) 小田原征伐(天正十八年三月より七月迄)及び伊達政宗の投降に依る奥州平定。

(9) 朝鮮征伐(文祿元年より慶長三年秀吉の薨去迄)。

信長の美濃攻略開始を永祿五年本據を小牧に移してからと起算し、秀吉の薨去迄を通算すると三十七年の長きに互つて居る。其の内秀吉が戦争しなかつた年は天正十六年及び十七年と十九年だけで、

其の外は毎年の戦争から戦争迄の間が休養期間である。中には一年に數回戦つて居ることもある。右の外、信長に仕へてから美濃攻略以前に於いても下士官兵的な立場でも屢々戦ひに臨んで居るであらうから、秀吉も一生戦争をし續けたと云つて宜しからう。

第二章 秀吉の國內統一戦通観と 作战用兵の特色観

信長が本能寺の兇變に逢つた後、秀吉は毛利氏と和し、山崎の合戦に於いて明智光秀を打倒討滅した直後に於ける主たる群雄は次のやうであつた。

- (一) 織田家の遺族 尾濃及び伊賀伊勢地方を主領とす。
- (二) 織田家の主たる遺臣

柴田勝家 北陸織田領の總督的地位に在り、佐々成政(西部越中)、前田利家(能登加賀)は其の指揮下に在り。

澁川一益 上野を主領とす。

丹羽長秀 若狹を主領とす。

- (三) 徳川家康 参河、遠江、駿河を主領とす。

- (四) 北條氏政 關東八州の大部を領す。

第二章 秀吉の國內統一戦通観と作战用兵の特色観

- (五) 上杉景勝 越中の東部及び越後を主領とす。
 (六) 毛利輝元及び其の一族

備中の西部、伯耆の西部以西山陰山陽の全部及び九州の一角を領す。

- (七) 長曾我部元親 四國の大部を領す。
 (八) 島津義久 南九州の大部及び北九州の大半を領す。
 (九) 龍造寺隆信 肥前を中心に北九州の西北部を領す。
 (一〇) 伊達政宗 東北地方の南半部を領す。

而して秀吉は播磨を主たる所領とし、長濱(近江)地方の一角も其の所領であつた。中國の征服した地方は又秀吉の勢力範圍であつたが、信長の直轄地方とでも云ふべき所はまだ混頓として居つた。右の内、毛利氏もまだ向背不明安心が出来るとは云へぬ状況であつた。

斯かる状態下に秀吉は或は自然の結果に依り、或は計画的なる統一企圖の下に征服したのである。秀吉は天正十年六月、信長の弔合戦の大旗印の下に明智光秀を打倒してから、天正十八年七月小田原に北條氏を撃滅する迄は滿八年である。夫れ以前の諸將が一代乃至三代を通じ一地方の數國乃至十數國しか平定し得ざりしに比すれば、秀吉の國內統一は實に迅速と云つて宜しい。應仁元年から天正

十八年迄は百二十三年であるが、此の日本戰國も最後の八年で、ばたばたと統一せられてしまつた譯で、此の超長期戦も亦最後の八年で息りがついた譯である。茲にも超長期戦の末期や結末につき示唆するものがある。

さて然らば秀吉は何ゆゑに斯く迅速に統一し得たであらうか、其の原因を概観する必要があると思ふ。筆者は其の原因を大體次の如く見て居る。

- (1) 信長の遺業を繼承したこと(信長は基礎を築いてあつたこと)。
 (2) 秀吉の偉大なること殊に其の性格と技術手腕とが斯かる大業には誂ひ向きに出来て居たこと
 (3) 群雄は次第に小粒となつてしまつたこと(家康以外に秀吉に抗し得る實力ある者はなくなつた)。

- (4) 天下漸く戦亂に厭いて來たこと。
 (5) 秀吉の施策の適切、特に戰略政略の一致と用兵の巧妙なること。
 (6) 皇師の將帥たる地位を得たこと。

右に列記した中、秀吉の施策特に戰略政略の一致と用兵上の巧妙なる點は、秀吉戦史を通じて特筆大書すべき所である。否、此の點を無視して秀吉戦史はないと云ふも過言ではない。

そこで筆者は先づ初めに秀吉の統一戦に現はれた作戦用兵の特色を大観した上、更に各戦役に及ぶこととする。尚ほ此の特色をば、前篇第十三章の信長の作戦用兵と比較して御覽を願ひたいことを附言する。

秀吉の作戦用兵上特に目立つて居る點は、

- (1) 戦はずして勝つことを非常に重視すること。
 - (2) 戦つても難戦苦闘せず易々として大勝を得ようとする事。
 - (3) 敵を殲滅することも、さること乍ら、敵を完全に屈服すれば夫れで宜しいと考へて居るやに見えること。従つて時と場合とに依り殲滅が出来ても之を減ぼさず、屈服従屬させることを考へる。
 - (4) 乗すべき戦機を狙ひ、此の戦機あらば機敏に之を捉へて疾風の如く之に乗するが、無理押的の戦ひはしないこと。
- 等にある。故に秀吉の獨立後の各作戦を見ると、常に敵に優る大軍を以て作戦して居る。試みに主たる各作戦の兵力を見ると、
- (1) 山崎の合戦 二萬五千

(2) 柴田、澁川、神戸の聯合軍に對する作戦

七萬

(3) 信雄及び家康の聯合軍に對する作戦

主力方面のみ約六萬

(4) 紀伊征伐 十萬

(5) 四國征伐 主力方面のみ約四萬

(6) 九州征伐 大阪に集中の分のみ約十五萬(總計二十萬を超えん)

(7) 小田原征伐 十七萬(或は二十萬とも云ふ)

と云ふ兵力である。尤も書物に依り其の兵力に差があり、多少誇張の點もあらうが、相手に比し遙かに優勢な兵力を用ひたことは疑ひなしで、二、三倍は愚か數倍の兵力を以て相手に臨んで居る。

斯く秀吉は大軍を以て敵に臨んでも、必ずしも直ちに武力に訴へない。敵に隙あり虚ありと見れば疾風の如く戦闘をやるが、虚隙を發見しないと満を持して放たない。其の出方を見ると、先づ強大なる兵威を以て相手の度膽を奪ひ、謀略や政略を以て或は雄大なる戦略態勢を採り、又血ぬらずして勝つか、或は兵を交へても牛刀を以て雞肉を裂く式にやつてしまふと考へて居るやうに見える。大軍を

以て孤城を圍んでも必ずしも力攻めはやらぬ。或は水攻め兵糧攻めと云つたやうに兵力を損せずして之を降すことを考へる。急がば廻れ式の略術も考へて居る。大損害の伴ふ厭戦氣分を起さずやうな戦ひは之を避けると云ふ氣持ちは用兵上に克く現はれて居るやうに見える。

詰まる所秀吉は大軍を動かすが大戦をやらすに片づける。

秀吉は加速度的に大軍を用ひることが出来るやうになつた原因を見ると、連勝の餘威で領國は加速度的な擴大を來した結果に外ならぬが、一面、秀吉の作戰用兵には無理はなく苦しい作戰殊に困難な戦闘をやらぬ爲將士は從軍を厭はぬ、從軍を厭はぬ所に兵員が集まつて來る。一方恩賞は過分と云ふ程重賞し、行賞は少しも吝しまぬ、悪く云へば口舌でも賞め財物でも釣る、然も其の豪快にして廣大無双の氣宇と明朗無邪氣な氣分を以て統率するから期せずして兵力が集まる。兵員が集まりがよければ兵數は増大する、兵數が増大すれば敵を威壓することが出来る。敵を威壓することが出来れば敵の氣を奪ふことも出来る。そして其の結果は、樂々として早く作戰が片づく、以上は秀吉の用兵を見て感ずる特色中の特色で、統一を速かにした用兵上の特異點である。

論者は或は以上の如き秀吉の作戰用兵は、特色にして然も獨創であると云ふかも知れぬが、中には勿論特色であり、獨創と思ふ點もあるが、信長の遣り口と似た所、全然同じ所が多い。之は秀吉は信

長に見習つたと評するを妥當とする。信長は秀吉を謀臣として其の智慧を藉りて作戰したことは先づさう澤山はあるまいと見るのは、織豊戦史を研究する者の常識だと思ふ。筆者は秀吉の作戰用兵や戦略と政略との關係を見ると、出藍の譽れも勿論あるが、主人信長を手本として居ることは明らかだ。

作戰用兵や、戦略政略の一致乃至は謀略は信長は師匠で秀吉は弟子であるが、速かに群雄を傘下に入れ所謂英雄の心を攪り、明朗闊達に之を率る聊かも離反せしめない點は秀吉の方は師匠信長より上である。又秀吉の作戰統帥には明朗性が豊かである。信長の作戰統帥も太線の鷹揚さを示して居るが何處かに凄味がある。

かう考へると結局、群雄の掌握の巧みな點は秀吉の大業を速かにした最大の特長點だと云ふことが出来る。

併し、考へねばならぬことは信長が作つたあれだけの基礎がなければ、秀吉も、ああ、とん／＼拍子には行かなかつたであらう。若し秀吉をして初めから信長の地位にあらしめたならば、果して如何であつたらう。永祿の初めから、元龜天正の初め迄は、秀吉型の人よりも信長型の人でない、あれだけのことは出来なかつた世相ではなかつたらうかと考へる。

第三章 獨立する以前の戦史（中國征伐を除く）

秀吉が信長麾下の兵團長格になる迄や兵團長格になつた後の中國征伐など、信長の部將としての作戦も研究すれば大なる参考となり研究價值も大いにあるやうに思ふが、遺憾乍ら中國役を除くの外は兵理から見ても、どれが本當か分らぬことが少しとしないので、筆者は中國役を除く信長部將時代の作戦に就いては、ほんの概要に止めることとする。

洲股の前進據點の占據と爾後の確保は古來有名な戦記であるが其の所説は異なつて居る。其の年號も永祿五年とも云ひ、同九年とも云ふが、之は九年と云ふのが正しからうと考へる。又、佐久間信盛や、柴田勝家が洲股占據の失敗の後を受けての秀吉の成功であつたと云ふ説と、初めから秀吉に命ぜられたと云ふ説とがあるのみならず、秀吉の洲股築城と之が確保に就いては古來面白く脚色せられて居るが戰術的に見て如何はしいと思ふ點もある。併し秀吉が蜂須賀や稻田等の野伏を驅り集め、物心両面から、うまく之を收攬し、一つの別働隊的に組織し正規軍と呼應して敵前築城を行ひ之を確保したのであらうと推定する。——恰も日露戰爭當時馬賊を使つて作戦を補助せしめたやうに——。

元來秀吉は人夫を用ひたりする場合などに經費を吝しまない。材料運搬、作業掩護、作業實施を整理と區別して計畫し、うまく之を協同連繫作業せしむる天才がある。之が成功の基で、人の使ひ方が上手、作業計畫實施の適切、之が秀吉の特長だつたと思ふ。

信長の西上戦に於いて、其作戦を急襲したことは湖東突破の戦略として適中したことは前篇に於いて之を述べたが、當時秀吉は他の先輩部將と轡を並べて其作戦攻略に任じ、戦機看破の明敏と其の行動の勇敢とは戦記類に名高い。

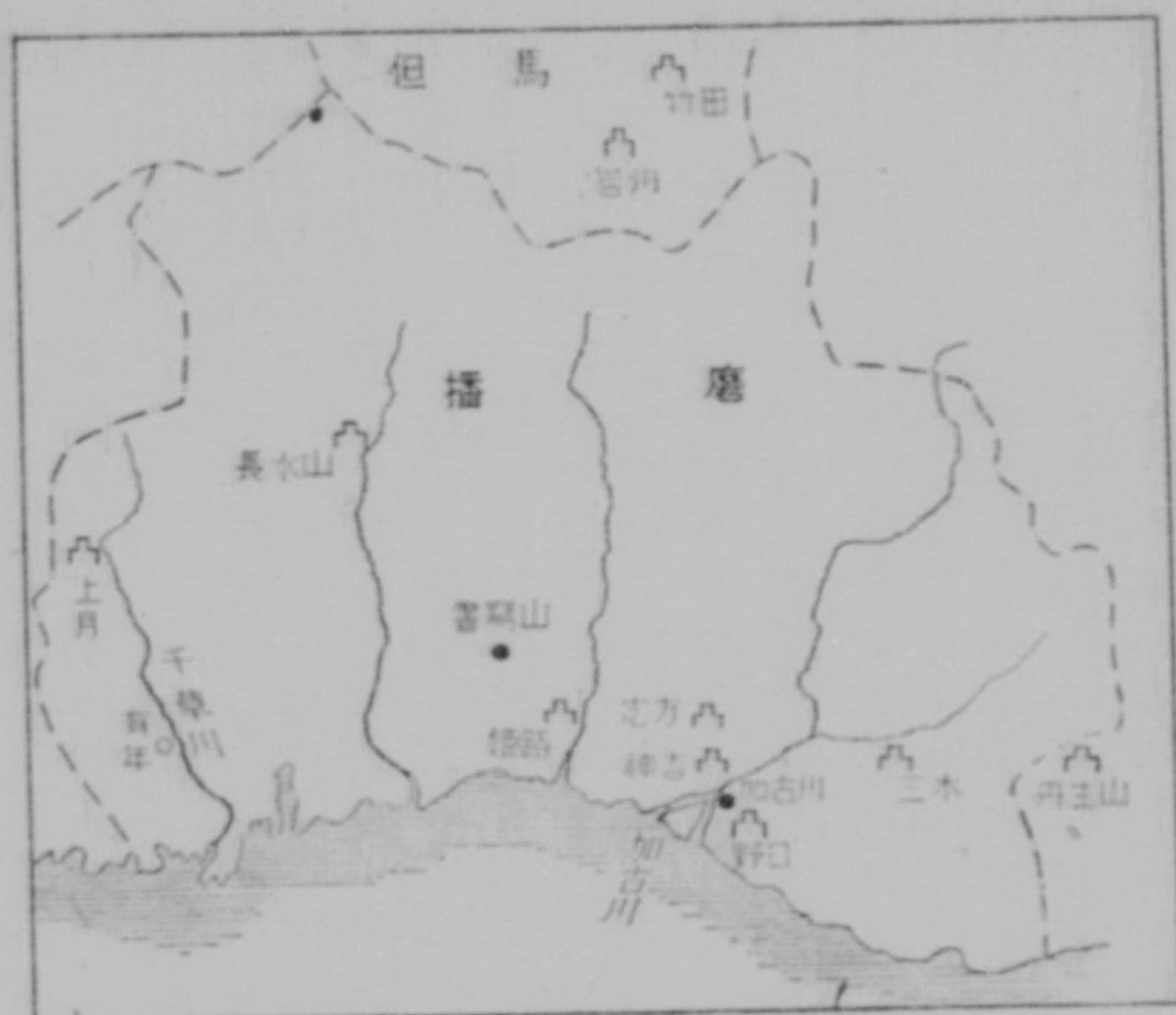
信長が、第一次越前進人が挫折して退却する場合、秀吉は志願して後衛司令官となつた。そして攻勢防禦を以て敵の追撃を撃破した。其の要領は、約七百の兵力を三分し僅少な二隊を第一線とし、大きな一隊を豫備隊として、本隊の退却掩護の態勢を採つた。すると果して敵が追撃して來た。そこで秀吉は第一線をして輕戦の後、後退せしめ、敵が圖に乗つて追撃して來る所を豫備隊を以て側面攻撃を加へたので、敵は敦賀城内に向ひ敗退した。秀吉は敵を逆撃し、城に到り、爾後敵が追撃して來ないやう談判して引上げて來た。小戦だが珍らしい後衛戦である。後衛司令官が敵が追撃せざるやうに約して退却した後衛戦は世界の珍戦術であらう。併し後衛が決戦を覺悟し敵に一泡ふかせて退却すると云ふことは今日迄其の戦例は他にもある。そして今日の後衛行動の一原則を爲して居る。

信長は元龜二、三年頃から苦境に立つた。其の頃、湖北地方淺井の勢力に對抗して要地を確保し、淺井の勢力の衰弱を圖り、信長をして京岐の間に自由に活動するを得しめ、後年淺井、朝倉撃滅の戦略據點となつたのは秀吉の力であつた。之も前編に於いて其の要旨を述べたから茲に再述しない。

第四章 中國征伐

中國征伐に於ける秀吉の任務は織田軍の先遣兵團長的のもので、其の征戦間、信長は京都又は安土から、或は荒木村重征伐の爲の出先から大本營的な指揮を爲し、又、嗣子信忠などを遣はして中國征伐の總指揮官たらしめた場合もあつたやうであるが、其の實質は殆ど秀吉の獨り舞臺と云ふも過言ではない。

中國征伐の起因に就いては前篇第十二章に於いて略述したが、信長が中國出兵に決し愈々秀吉に其の先遣兵團長を命じたのは天正五年十月であつた。信長が、毛利と初めて武力衝突してから一年三ヶ月の日子を経過して初めて中國出兵を開始した所以は前篇第十二章に論考して置いたが、天正五年頃は毛利の勢力は東漸して西部播磨の五郡は、毛利方の宇喜多直家が蠶食し、爲に、播磨の別所、小寺、赤松などと云ふ小豪族から信長に修好して其の保護を受けようとする状況であり、それが纏て、之等の諸族が聯合して信長に西征の一將を派遣せられむことの要請となつた。そして其の使者は後年秀吉の名參謀となつた黒田孝高(如水)であり、將には秀吉が選ばれたのであつた。



〔作戦経過概要〕 爾後に於ける秀吉の行動を年表的に列記すれば大體左の如くである。

- (1) 天正五年十月二十二日、兵を率ゐて安土を發す。
- (2) 途中京師で一泊、次いで播磨に入る。
- (3) 小寺氏は秀吉の爲姫路城を其の本營に供し、秀吉は茲を本據として小作戦や宣撫工作を行ひ、著々と味方を傘下に收めた。
- (4) 十月二十八日、使を安土に發して、十一月初旬には播磨全國を略定し得べしと報告した所、信長は秀吉に感狀を與へて播磨の領主に補した。
- (5) 此の間、播磨及び其の接壤地方の兵要地誌を調査す。

(6) 播磨全國經略の方策を定めたる後、十月下旬(日時不明)兵を但馬に進めて岩州、竹田の兩城を攻略し弟秀長を置きて該地方を治めしめた。

(7) 五年十一月二十七日福原城を抜き、一部を以て宇喜多直家の増援軍を撃破し、主力を以て十二月四日上月城を攻陥し、尼子勝久、山中幸盛等兵七百餘をして之を守らしむ。

(8) 十二月下旬(日子不詳)安土に至り信長に復命す。

(9) 天正六年二月秀吉再び播磨に歸任す。

別所長治遂に秀吉に叛す。其の原因は、二月秀吉が歸任して長治に征西策を諮問したに對し、長治の答が秀吉の氣に喰はなかつた爲、秀吉は長治を侮辱がましく、きめ付けたことが原因で、結局感情からと思はれる。

(10) 三月、秀吉三木に向ひ長治征伐の作戦を開始す。

(11) 四月、秀吉は長治方の屬城野口城を抜く(野口は加古川の東南)。

此の月、毛利及び宇喜多の聯合軍來りて上月城を圍み、其の奪回と尼子の殘黨討滅とを策す。依つて秀吉は上月城に赴援す。

信長上月の急を聞き援軍二萬を發す。

(12) 五月、信長は長子信忠等に三木城を中心とする別所方の監視を命じ兼ねて上月方面の作戦軍の背後を安全ならしむ。

此の月、上月附近に於ける兩軍の對峙間、小競り合ひがあつたが、兩軍決戦に至らず。

(13) 織田軍は上月城の救援に來たが、地形不利にして援けを上月城に及ぼすことが出來ず、加ふるに増援に來た澁川一益、丹羽長秀、明智光秀等が秀吉に協力しない嫌ひがある。依つて秀吉は潜かに東上し、六月十六日京都に於いて信長に謁して稟議した結果、信長は上月を捨てて三木を攻略すべく命令した(恐らく秀吉は此の案を意見具申したと思ふ)。

信長の命令の要旨は、上月を捨て、秀吉も其の増援の諸將も皆信忠の指揮下に屬して、三木を中心とする別所長治及び其の一黨を討滅すべしと云ふに在る。

(14) 其の結果、七月遂に上月城は陥り、尼子勝久は自殺し、幸盛は伴りて降りたる後殺さる。

此の月、織田軍は別所方の諸城に對し攻撃を開始し、八月迄に其の居城を屠る。

(15) 八月、信忠、全軍を率ゐて三木に通つたが、其の急攻の不利なるを知り、秀吉に命じて、長圍せしめ、八月十七日他の麾下の諸將を率ゐて岐阜に歸る。

(16) 十一月、秀吉は京師にいたり信長に軍狀を報告し、十一月には叛將荒木村重攻圍の軍に加は

り、十二月には三木に歸つた(同時に援軍來りて秀吉に糧秣、彈藥を補給して歸る)。

(17) 七年二月三木城兵出撃して撃退せらる。

三月毛利軍、糧秣を三木に入れんとして果さず。

(18) 四月、信忠、信長の命を受け再び諸將を率ゐて秀吉に赴援したが、三木城は其の陥落尙ほ遠きものありと判断し、更に攻圍の堡壘を増築したる後、荒木村重を攻圍中なる信長の許に歸る。

(19) 三木城の別所と、有岡城(伊丹)の荒木とは、其の攝播間の支城を介して連絡し、毛利軍亦之を通じて糧秣を送つたが、秀吉之を探知し、五月二十五日支城を屠つて其の連絡、兵糧搬入を遮斷す。

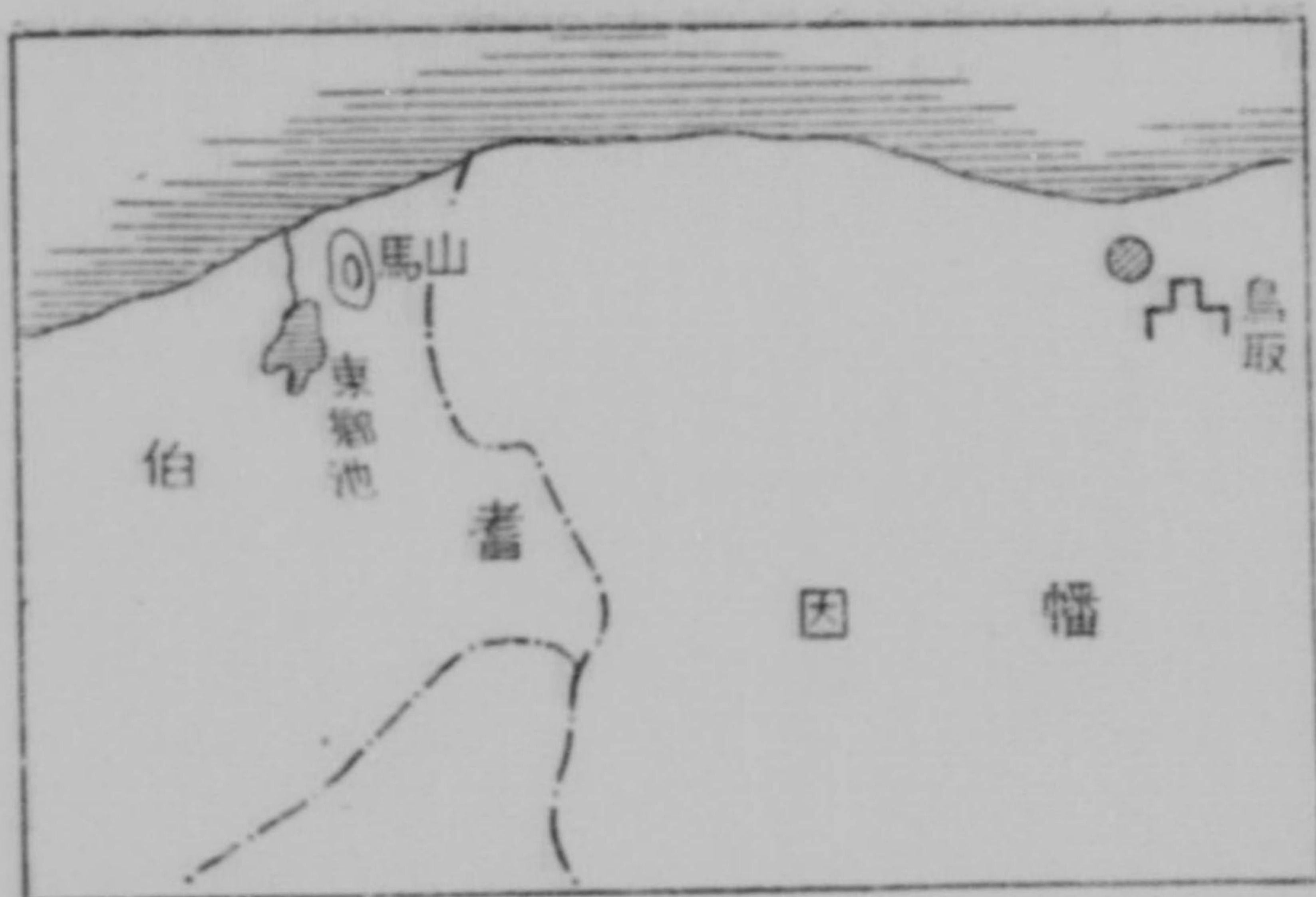
(20) 宇喜多直家、毛利に背き秀吉に屬す。

(21) 八年正月三木城陥る(十七日長治妻子を刺して自殺す。年二十三)。

長治は秀吉と絶つてから滿二年、攻圍を受けてから一年半で遂に亡んだ。長治は中々の出來物であつたやうで、惜しい青年武將であつたと云ふ人もある。

秀吉の不用意なる一言は滿二年中國平定を遅らせたと評し得ぬこともない。

(22) 四月より姫路城の修築を開始すると共に未だ歸順せざる播磨國の殘城を攻陥す。



- (23) 九年三月姫路城修築成り此處に移る。
- (24) 六月二十五日兵二萬を率ゐて姫路城を出發、山陰經路を開始す。蓋し播磨は平定し宇喜多の歸參に依り山陽方面は一段落となつたからであらう。
- (25) 七月初めより鳥取城を攻圍し、十月下旬遂に之を陷る(城將吉川經家自裁す)。
- (26) 鳥取攻陥後更に西進し、十月二十七日馬山に於いて吉川元春と對峙したが、天候地形は我に不利にして元春が決戦の決意抜くべからず、全く九死一生不退轉なるを看破したので二十九日陣を撤して姫路に歸る。
- (27) 十年三月再び山陽道經路を開始し備中に向ひ、四月高松城を圍み水攻めを行ふ。六月四日攻陥す。
- (28) 十年六月本能寺の兇變を知り、之を嚴秘して毛利氏と和し即夜兵を班して東す。

以上列記した所に依れば秀吉は征西開始より滿四年半に互り、此の間陰陽五ヶ國を平定歸屬せしめた譯である。



しむる爲には、秀吉は色々事情を具申したと思ふ。上月城の作戦をどうするかに就き信長に稟議し

〔評論〕 以上の作戦經過に顧み、尙ほ要すれば史實を補充しつつ秀吉を中心とした評論を試みることにしよう。

(一) 謀將、黒田孝高の歸屬に依り、播磨の中部を以て作戦根據地とし、播磨の西北部上月城を中心として毛利、宇喜多の聯合軍と抗争が始まつたのである。此の抗争は尼子の殘黨を圍りとしたかの如き感じがするが、此の圍り戦略は毛利軍を引き付けはしたが、結局圍りを殺してしまつた。夫れは秀吉の責任ではなく信長が上月城を放棄せよと云ふ決心を採つたからだと思ふが、信長をして此の決心を採ら

て其の命令に従つてやると云ふことは筋は立つた遣り口だが、自ら、かうしたら宜しいと云ふ案なしに稟議したのならば秀吉らしくないと評せざるを得ない。上月放棄は恐らく秀吉が具申した結果、信長が同意したと見るのが、或は當るかも知れぬ。

(二) 秀吉は詰まらぬ口舌の點から、折角歸服して居る別所長治を叛せしめたことは何と云つても失策だ。天正五年十月下旬に入播し一旦歸東、再歸任した二月、自ら策を長治に問ひ長治が滔々と戦策を述べると、何んだ青二才、そんな生意氣なことを云はないで先陣で勇戦せよと云つたやうな態度で長治の言を一蹴したことが長治背叛の因である。單にこれが表面の理由で、長治が毛利其の他から買収せられたためとは云へまい。唯、黒田孝高などが、別所が邪魔になるから、斯様に仕向けたと云ふ疑ひもないではないが、夫れにも勿論根據はない。すれば秀吉の詰まらぬ口舌が、滿二年間、中國作戰の進展を三木城の爲に掣肘せられたことになる。秀吉にも似合はぬ黒星である。長治は死んだのは二十三歳である。すれば初めて織田氏方として歸屬したのは二十歳である。當時秀吉は四十二歳である。此の青年を叛せしめたことは秀吉の責任である。明治維新の際でも、河井繼之助の反抗も岩村の一言からだつた。河井と岩村との關係は岩村が青年で、秀吉と別所との年關係の逆であるから多少は許し得られるが、秀吉が不惑の年を越えて二十歳の青年武將を怒らせ、二年も其の征服に年を費したことは辯護の餘地はない。人は往々信長が毒舌を揮ふので叛將が出た。此の點は秀吉の方は偉いと云ふが、さうも云へぬ。併し此の苦い經驗が後年秀吉の經世上の藥となり、あの速かなる統一が出来たのかも知れぬ。

(三) 東に別所長治が叛ずる。西からは毛利、宇喜多の大軍が上月城の奪回の爲押し寄せて来る。中國征伐に於ける一の危機に當面したが、此の狀況に於ける秀吉の作戰方針及び其の指導の要領は、一部を以て三木に備へしめ主力を以て毛利、宇喜多の聯合軍に向ふと云ふのである。さて愈々聯合軍に向つて見ると、敵は優勢であり、戦備其の他も堂々たるものがあり一寸手を下せぬ。信長から増援の爲の諸將が到着して兵力は優勢となつたが、中々秀吉の下知に従つて呉れぬ。上月城に於ける尼子の殘黨は見殺しにするの是非は兎に角、一寸思案に困る。考へたのは信忠を總指揮官にすること、併し信忠を奉じて毛利と決戦すると云ふ點も尙ほ大いに考へなくてはならぬ。かうなると「上月放棄、廻れ右再び三木へ」と云ふ案にしかならぬ。尼子の殘黨の囹りを犠牲とし、これで毛利に一花もたせて、後徐ろに後圖を策しよう。此の間播磨の東部を順へた方が賢明だと云ふのは、信長の決心と云ふよりも寧ろ秀吉の案で、京都で信長に具申した筋であつたと思ふ。唯、斯く作戰することは秀吉獨斷では行かなかつた。夫れは増援諸將との關係があつた爲だらう。此の優柔的な作戰も冷靜に考へて見